

刺激によるものであつて、その精神に到つては、多くは、依然として明治大正期の個人主義的思潮の延長線上に立ちわづかに近代精神の色彩を外面より塗抹してゐるに過ぎない。その試は終局に於て技術的である。かくの如く新短歌運動が形式的であるといふことは、それは傳統短歌の破壊の面のみ役立つことを意味する。このことは、反動的に短歌大衆をして傳統短歌のもつ短歌的情趣、特にその藝術的氣魄及び古典的氣品等の擁護に趨らせることを結果した。

明治大正期歌壇の開拓者たりし一流作家等の、最近に於ける活動の原因を、ここに求めることが出来る。たとへば齋藤茂吉氏の氣魄や北原白秋氏の氣品の如き、何れも大正期短歌の延長であり擴充である。かゝる事情の下にあつては、勿論今日の中堅少壯作家の作品は、その氣魄に於て、その氣品に於て、到底一流大家の作に及び得ざることは言ふまでもない。が、同時にそれらの短歌の持つ傳統短歌的情趣といふ抽象的な世界が、ともすれば短歌を現實の社會から遊離せしめる危険性をもつ傾向にあることに満足し得ず、且短歌の破壊をも拒否して、再び、現實感を新しく傳統短歌と融和せしめんとする當初の出發點に立つ新作家が、今や前面に現れようとする機運にある。

宇都野研氏の評論及作品に於ける現實感への理解、土屋文明氏の作品に於ける日常生活相への展開等々は、今や轉換期にある歌壇の主導的地位に立つものと言ひ得る。

嘗て自然主義の當然の一方として石川啄木等によつて開拓せられかけた生活歌を、當時の短歌より驅逐し、大正期の短歌をいちじるしく自然觀照と心境解剖との面に局限してつひに超現實の世界に昇華せしめたアララギ内に於て、土屋氏が日常生活相の面を取上げるにいたつたことは一つの進展でなければならぬ。しかしながら、氏の態度は未だ自然發生的である。

しからば、現代に於ける生活意識は、特に如何なる點が重要視せらるべきであり、また現實把握の方法は如何になさるべきであらうか。

第一の答としては政治的經濟的の面を指定しうる。この意味に於て、無産短歌は再びその當初の出發點から新しく出直すべきである。そこには、諸種の事情の制約によるための限界性を持つ個人主義的有産短歌に對立して多分に未來を持つ世界が感じられる。勿論明治大正短歌は二十年代初期に勃興せる反動的國粹精神を出發點として、その上に組立てられて來てゐる。いきほひ國家意識の高揚せらるる時には、短歌も亦盛に行はれる機運を持つにいたるのであつて、

今日の歌壇の復活も亦一應はこの觀點より理解せらるべきであることはいなめない、ひとり毎歌のみならず、文學一般の、自國的文學への傾向をも同様の面より解釋することはすでに常識に屬することであるが、抒情詩としての短歌に於て特に影響の顯著なることは事實が明示してゐる。にもかかはらず、無産短歌に將來の發展を認めようとする事については再論の機にゆづる。

第二の現實把握の方法としては、自然主義的態度をとるか超自然主義的態度をとるかの二つの方法が存する。前者の作品は經驗感性による現實描寫を基調とし、後者の作品は純粹感性による現實構成を基調とする、従つて前者は現象主義に陥り易く後者は超現實に陥り易い。そのいつれの方法によるにせよ出發點は現實直視のまこと、この態度にあらねばならぬ。あはれの情趣は現實を視る眼を曇らせる。

かくて、現實直視による作品から組立てらるべき新しい短歌美學は、傳統短歌美學を擴張し現代化するにいたるであらう。現實的新抒情主義短歌の提唱は、かかる轉換期に於ける短歌の方向に對する整理と指標とのためのものである。

なほ現實的新抒情主義短歌の主張は、短歌の形態について特に現實感を定型律の形式によつて、抒情せんとする方法の具體的解明を必要とする。何故なら、それは今まで「敗亡の歴史」を繰返へしてきたことなのだから。それについては別に發表すべき短歌の抒情性及短歌形態論^{註9}を参照せられむことを希む。

- 註1 國民新聞八年三月、土屋文明氏の所説
- 註2 右 同
- 註3 大阪毎日新聞七年十一月、短歌雜感
- 註4 短歌春秋八年二月、古今集の鑑賞
- 註5 詩歌八年四月、矢島歡一氏の記事
- 註6 齋藤茂吉氏著、太田水穂氏著
- 註7 右 同
- 註8 ポトナム八年一月、短歌の方向（現實的新抒情主義の提唱）
- 註9 短歌春秋八年五月、短歌の抒情性
- 註10 ポトナム八年五月、短歌形態論

問題四つ

1

認識的面 現實を直接に見、直接に認識し感ずること。歌を作る人はとかく短歌的な物の見方感じ方をし易い。現實を見てゐるつもりで實は見えてゐないのである。しかし、現實を直接に認識してこれを抒情するとなると、非常に多くの困難な問題がともなふ。けだしこれは短歌が抒情詩であるといふ本質に起因する。

2

構成的面 抒情詩的方法を「中心點なく渾沌として流れる生そのものに對し、一つの中心を以

問題四つ

て臨む態度——それは一つの中心に結び付けて世界を統一し、一切を一個の私の観點より眺め感じ價值づけることである。世界は一個の主觀の對象となる。このやうに世界を眺めこれを言葉に移す法」と解する時、他の文學形式に比べて著しく主觀による構成的要素が主要な役割を占めてゐる形式といへるであらう。現實に對する認識だけでは抒情することはできないのである。これを私はその遲着性とよんでゐる。短歌は常に他の文學形式に遅れるといふ意味である。

3

短歌の遲着性 短歌は現實認識にともなふ感情を基礎とする構成である。現實認識は時代とともに進展してゆく。しかるにそれに伴ふ感情が依然中世短歌美學のうちに立往生してゐる。これが現今の短歌一般の姿である。技巧の煩瑣主義に陥つてゐる點は、あたかも明治二十年後半期に於ける舊派短歌の圓熟期につづく時代と酷似してゐる。いかにその遲着性を認めるにしてもそろそろ轉向してもよい時機だとはいへなからうか。否すでに轉向しつつあるともいへよう。然らばその方向は。

4

短歌美學の擴大 經驗感性を基礎とする自然主義的現實主義による新抒情の方向、純粹感情を基礎とする構成主義による主智的方向等々、その態度方向のいづれたるを問はず、短歌美學の擴大——傳統短歌美學をもふくめて、その上に立つ短歌美學の揚棄——に明日の短歌はかかつてゐると私は考へてゐる。

完成より動搖への過程

1

子規の客觀的寫實主義短歌は、明治三十年代後半期に於ける伊藤左千夫によつて、一度主觀的な色彩を濃くしたが(馬解木)四十年初期には再び客觀的寫實主義へ戻らうとする狀勢にあつた。これは言ふまでもなく自然主義思潮の影響であつたのである(アカネノ二三)。それが四十年代末期から大正期にかけて主觀客觀融合の世界に到達し、遂に歌壇の主流を占めこの國の短歌史の上に一つの頂點を示すにいたつた。所謂一般から現實主義短歌とよばれてゐる處のものである。自然主義は人生への再批判の方法として、ロマンチズム時代の個人心理の追及と併せて、社會への批判の必要を臆けながら自覺せしめた。併しその自覺は未だ十分徹底する迄にはいたつてゐなかつた。多くの歌人は——生活派を除いて——個人を社會から切離して、觀念的な空

中の樓閣として描いてゐた。ために折角建立された個人の權威も、具體性を缺いた空想的觀念的なものに顛落してしまつてゐた。當然社會生活の上にそれを實現せしめようとする積極的な意志をも缺いてゐた。却つて、一度社會生活の矛盾に遭遇するや、個人の中に閉籠つて靜かに人生を諦觀しようとし社會の矛盾をも宿命と觀じて寂しく人生を諦めようとする、人生の窮極は虚無だといふやうな消極的な人生觀に到達した。人生を藝術に逃避しようとする藝術主義の氣持ちがこゝから生れて來た。時代思潮がかういふ方向をとつたために所謂現實主義短歌そのものも、實は現實と背中合せをした退嬰的な靜觀的なものとならざるを得なかつた。萬葉集を宗としながら、新古今集に通ずる歌や(島本赤彦の作品参照)近世の芭蕉の世界を理想とする(大正期の潮音の歌参照)ものが現れたりした。

人生を虚無と觀じ自己の宿命を慨き人生無常を思ふものゝゆくべき道は享樂かさもなくば諦觀かである。一體自然主義文學が発見した自我は餘りに貧弱な醜惡な五慾の固りの自我であつた。そこから對人生の二つの態度が生れた。一つは人間とはさうしたものである、人間は神様ではない、だからさうした人間の世をどうしようとするよりも、五慾の欲するまゝに生きて行か

うといふ享樂主義の態度である(吉井勇氏の作品参照)。一つはさうした人間の上になつて、更に如何に生きて行くべきかといふことをもう一度考へ直さうとする理想主義の態度である。しかし、この理想主義の態度も、個人主義的自由主義を對人生への問題から個人内面の問題に彎曲せしめた時代思潮の影響下に於ては、著しく唯心的な諦觀的觀念的なものになつて行つた。諦觀に達せんが爲には何よりも、人生をさうしたものと諦める上の心境の練磨を必要とする。かくて短歌は個人心理追及の面とわづかに自由の存する自然觀照の面(まことに山林に自由存す)とに限られたしかも唯心的な鍛練道をとるやうになつた。由來東洋には鍛練道がある、東洋の文化は色々の道を取つて開かれてゐますが、何時も鍛練道が骨子となつてゐるやうであります。儒教や佛敎も一種の鍛練道であります。鍛練とは生活力を統率して一方に集中させることであります。生活力を統べると云ふことは、必ずしも本能を抑壓することではなくその生活力を一方に集中させることでもあります——佛敎に於ける悟りの工夫といふものは一種の鍛練道であらうと思はれます(赤彦)鍛練道に於ける窮極はやがて宗教の悟入の世界に一致する。ここに短歌を宗教視するといふ神祕觀が生れてくる。歌には歌の大道がある。その大道の由つて來る根源を

禮拜するのは、自分の今踏んとする大道を禮拜すること自分の個性を尊重する所以になるので(赤彦)ある。己を空うし愈己を空しうすることによつて眞の個性が發揮される。小我に執する個性は有つてもなくてもよく、むしろなければ猶よいことになる。即ち自我を否定することによつて肯定しようとするのである。「物資の供給分配の社會的現象」を云々する如きは、目前急なるに似て實は要核に遠い問題であつて要少き處であることになる。ここに、さういふものに執する自我から超越すべく心境の鍛練を工夫せんとする所謂鍛練道が開けたのである。かかる境地に於ては、自然主義の當然の一方向として生れた明治末期の生活派短歌が何等の發展をも見せなかつたのは言ふまでもない。ここに到つて明治大正を通じての人生への批判は著しく局限せられた。その個人主義的自由主義は、個人内面の問題に偏向せしめられ、鍛練道による虚無的諦觀に終つた。明治初期以來の批判主義の結論し得たものが、かゝる東洋流の傍觀的宿命觀や虚無的無常觀であつたとすれば、それは餘りに果敢ない結論ではないか。ただそれが個人主義的現實主義の限界を明瞭に示したといふことだけは收獲でありはしたが。なほ、いへば限界點に到達したゝめの一種の消極的な落付きを見せてゐるといふ點に於て所謂現實主義短

歌は或圓熟境に行きついたものと見ることが出来る。

自我の追及から出發して、自我を否定することによつて肯定しようとするに到つた個人主義は、一方、諦觀への寂しさから人道主義的な愛と誠に生きようとする方向をとつた。愛といひ、誠といひ、個人主義にとつては、お互の個性を尊敬することである。ここから個性絶對主義の世界觀が生ずる。「實相に觀入して自然自己一元の生を寫す」といふ短歌寫生の説は、主觀的な個性絶對主義の思潮と客觀的な寫生の手法とを統一せしめた境地である。この點からも所謂現實主義短歌は一つの主觀客觀融合の圓熟境に達したものと云へなくはないであらう。

人生への諦觀は窮極に於て大道無門を思ふ氣持ちに通ずる。實相に觀入して人生の寂寥相に參ずると言ふのも、唯美主義的短歌の或るものが遂に寂寞世界に到達するにいたつたのも(北原氏の作)新しく提唱された象徴主義の短歌が中世的な幽玄や寂びに行きつかざるを得なかつたのも、そしてこれらのものが相互に論難しながらも、共通の神祕的な宗教的な「人生の寂しさ」に棲んでゐることも、かうした時代思潮の當然の歸結だつたのである。同時に作品一般に靜觀的な退嬰的な悲哀感と憂鬱とが濃く滲み出てることも、その表現形式がより古典的傳統的で

あることも、更にそれらの爲に短歌そのものゝ限界性が暗示されてさへあるといはれてゐるのも、すべてはかうした時代思潮に結びつけることによつて解明しうるであらう。

以上によつて明かなる如く、一般に現實主義短歌を代表するものとして見られてゐるアララギの歌も、實は現實から遊離して超現實に昇華してゐたのである。逆にいへば人生から藝術への逃避、藝術を至上としてゐることは現實主義短歌の一つの特色をなしてゐる。短歌は人生逃避の隱家である。かそかにして果敢なき隱家、しかもあへかに美しい隱家である。誰でも一度この隱家に住んだものは容易にそこから離れて人生に戻らうとしない。そして愈隱家を美しいものにしてしようとする愛着で一ぱいになる、それは短歌が抒情詩として作者の感情を組織する力を持つてゐるからである。勿論現在かゝる隱家を存在せしめてゐるといふことは短歌そのものゝ保守性によることは云ふまでもないが、否定しても否定しつくせなかつたすべて傳統的なるものが未だに社會に生きてゐる爲でもあつた。傳統短歌と現實觀との融和が以上の如き思潮を基礎としてなされたといふことは、所謂現實主義短歌の形態の上にも明瞭な反映を示してゐる。以下、それが、今日の歌壇にどう現れてゐるか、またどう動かうとしつつあるかを、具體的に検討してみよう。

2

齋藤 茂吉氏 (アララギ八月號)

- 1 年々のことなりしかど庭の木に蟬なきそめて心うらがなし
- 2 このゆふべ支那料理苑の木立にて鯛がひとつなきをむるなり
- 3 こがらしのおとを戀ひつゝたちいづる吉井勇は寂しきろかも
- 4 或個人らの思想の轉向といふことが手柄らしくあからさまになりぬめで
たや
- 5 わが心なにははずみにかあらん河上肇おもほゆ大鹽平八郎おもほゆ

齋藤茂吉氏の歌の根本が虚無觀であるといふことは前月號本誌に尾山篤二郎氏が明にしてをられる。(さういふ尾山氏自身も亦虚無の中に住んでゐる。この事は同氏の作品のところで觸れ

る。實相に觀入して自然自己一元の生を寫すことは、方法であつて内容ではない。生そのものは、個々の對照によつて千變萬化する。時々刻々に流轉する。さういふ生を流動の姿に於て捉へる方法が寫生であり、實相への觀入である。ここに茂吉氏の歌の流動性がある。その意味から言へば氏は完成せる歌人であり、同時に永久に未完成の歌人でもありうる。氏の作品のうち自然觀照心理描寫の面を扱つたものは、一つの頂點に立つ完成品である。

123の歌等はそれである。これらの作品は傳統短歌的技巧の上に於て間然するところが無い。却つてその爲にもの足りなさを感じしめさへする。1のうたの心うらがなし、かうした東洋流佛敎流の無常觀をうたつた作品は氏の作品の三分の二を占める（本誌前號尾山氏の説）といはれてゐる。實相に觀入するにあつて「事物を見ると同時に無常諦念の觀念にまで要約せねば氣がすまぬ」のは、獨り氏のみでない。ただ氏の詩人的な稟性がアララギの中に於ても特にその色を濃くしてゐるのである。それなら何が氏をさうさせたか。それは1の完成せる短歌の項で述べた如く、個人主義的自由主義の行詰りに起因してゐる。氏の如く強氣な性格を以てしても、なほかゝる諦念に落ちざるを得なかつたことを思ふ時、つくづくと時代思潮がその時

代を揺り動かすこと及傳統の力の強さを考へさせられる。氏にあつては、この無常觀が具體から抽象に昇華した觀念的なものにさへなつてゐる。其の爲に實相觀入が妨げられ、現實を現實として見る上に何時も一つのヴェールが被せられる。あたかも自然が自然としてなく無常觀の化身としてのみ存在してゐるが如くに。4の歌のめでたやははかなき感傷である。對照を嘲笑ふ心は自己を嘲笑ふ心であり人生を嘲笑ふ心である。それは虛無觀から生れて來てゐる。5のわが心なにはすみにかあらんの氣まぐれな心もそこから生れる。氏のかうした時事歌はすべてその時々のはすみである。氏には思想はない。その故に時々刻々の現象を是非々的な態度で歌ふことを可能ならしめもしてゐるが、同時に或限界をも考へさせられるのである。氏を完成せる歌人と見る所以である。無常觀を基調とせる表現主義、そこに氏の本質があるのではなからうか。

岡 麓氏（アララギ八月號）

1 夏の夜のふけて出る月横雲の二筋かかる裏にしづけき

完成より動搖への過程

2 夏の夜のふけては秋をおぼゆる夜そらに月のかげもりにけり

代表的な完成せる歌人を氏に見ることが出来る。傳統短歌のもつ短歌的情趣が如何にもそれにふさはしい形で表現されてゐる。同じアララギでも氏の作品は、個人心理追及の面よりはより多く自然觀照の作が多い。自然の風趣を、そこに漂ふそこはかとなき陰影を、精確に描寫するといふ點に到つては現在の歌人の中に於て最も完成せる一人であらう。窪田空穂氏の、日常生活の陰影を何のこだはる處なく如實に表現せる日常身邊歌が、一つの完成を示してゐるのと思ひ合はされて、こゝにも傳統短歌の完成といふことが考へられて來る。たゞ空穂氏は自然主義を最もよく生かしてゐる點に於て一つの流動性を持つてはゐるが、その點から言へば岡氏の作品の完成は時代を超越せる完成と言へなくはない。進歩性を缺いたもの足りなさがそこにある。1の歌にしても2の歌にしても、さういふ感じが無いとは言へない。

土田 耕平氏 (アララギ八月號)

1 苔水の石間に入るは清けれどわれは病みつつ世に遠ざかる

- 2 梅雨明けの日射はすでに秋に似たり高野の上は木さへ寂しき
- 3 竹むらに雨ふりいでしさをぎして下の河原の石濡るゝ見ゆ
- 4 田水引けば川瀬の音もひそまりて山の曇りに啼く閑古鳥
- 5 茅葺の構へゆたかに古りたれど内輪をきけば多く貧しき
- 6 國ぶりの田唄もきかずいつの日かまた潤農の御代はいたらむ

これは尤も典型的な「赤彦的なもの」の世界である。1の歌に見える靜觀的な寂寥相を見給へ。しかもその透徹した手法の冴え、それは深く對象に觀入した所謂自然自己一元の境地に達してゐる。2の歌も同様である。但しその觀入の仕方——世に遠ざかる、木さへ寂しきといふ傍觀的な態度が問題になることは言ふまでもない。3の歌さをぎしてのして、4の歌の第一句田水引けばは説明である。作者の緊張が1の歌の上の句のやうな所まで至つてゐないためである。5の多く貧しき、6のいつの日かまた潤農の御代はいたらむ、共に餘りに傍觀的である。多く貧しきと報告しないで貧しい状態をそのままに表現したい。潤農といふやうな生硬な

語も一首全體の靜觀的なびやかなリズムに合はない。かういふ語を使ふには一首全體の組立方から變へて行くことが必要である。作者は病弱であるらしい。むしろその病弱にあまえてゐるやうにさへ思はれる。我々四十歳以下の歌人としては、氏は恐らく完成せる歌人の第一人者であり、同時に最後の一人ではなからうか。尤も氏の境地まで到らない若年寄は澤山あるが、むしろるすぎるのであるが。

今井 邦子氏 (アララギ八月號)

- 1 向谷に日かげるはやしこの山に繪島は生きの心堪へにし
- 2 年経れば亂れし戀もあはれなり繪島の墓は信濃の山に
- 3 山の上の墓は小さしこの國の春べの山に雪はのこりて

氏の歌にも、土田氏と同様に二句切が多い。この傾向は赤彦晩年の作に現れてゐる。赤彦の歌の新古今集に通ずる境地である。1の歌の懐古的な手法は現代短歌の完成の項に於て述べた時代思潮の一つの現れである。ただ氏の作品には土田氏程神祕的宗教的な色合がない。それだ

けに寫生が生きてゐる。男性の作家でも多くは途中で感傷に妥協してしまふのが常である。女性であつてこゝまで徹するといふことは容易でない。所謂鍛練の賜物か。手法の確さは2の歌の結句3の歌の下の句に見ることが出来る。氏も亦完成せる作家の一人である。土田氏に比して寫生に即せる點に於て流動性を持つてはるるが——そこに氏への今後の興味がある。

尾山篤二郎氏 (短歌春秋八月號)

- 1 喜悅となりて來ぬものを思ふより明らさまなる山河を見よ
- 2 この河を船さしわたす生業を無常と思ひ觀ることも得べし
- 3 さやかと言ふにやあらむみづみづしく水氣たちこむる山々の色

氏の根本が虚無であることは、さきに茂吉氏の處で引合ひに出したが、氏は茂吉氏の如く寂寥相に行かず享樂の方向をとつてゐる。享樂と言つても、吉井勇氏のやうなロマンチズムから出發したのとは違つて、小市民的な手輕な享樂主義である。あるがまゝの現實があるがまゝに受入れて行く、そしてそこにゆるされた範圍の享樂を求める。要領を得た苦勞人らしい世渡り

の仕方である。人生の批判といふやうな事を眞向から考へるなどは、氏から見ればまだ世の中の解らないニキビ盛りの子供のいふ事である。それよりも「ちよつと一杯飲みましょ」が大事なのである。1の歌の「喜悅となりて來ぬものを思ふよりも明らさまなる山河を見」るのである。喜悅となりて來ぬものの内容が重大なものであらうがなからうが、そんなことは問題ではない。そんな事を氣にするよりは自然を眺める。それも自然の寂寥相に沈潜するといふやうな馬鹿々々しい骨は折らない。見て慰めばそれでよい。船頭の生業を無常と見ることも出來ようが、必しも見なくてもよいのである。萬事萬端さらさらと流してゆく。かう言うてしまふと如何にも浅いやうであるが、併しこの平明無礙の境地に到る又一種の達人である。悟入の世界である。感傷を乗り越えてここまで來る鍛練は並容易ではない。主觀が浅く小味なのは日本人だからである。技巧亦びたり内容に倣つてゐる。こせついてゐない。一首や二首の歌はどうでもいい。3の歌のやうにみづみづしく水氣と氣になるみの頭韻など一向氣にならないのである。明るい氣の利いた中に見える諦め、その諦めをさへ忘れてゐる明るさ、がしかしこの明るさは底にある虚無によつて暗くされてゐる。と同時に奥行を持つてゐる。氏獨特の世界である。

日比野道男氏 (曼陀羅八月號)

- 1 白々し芥子の花畑陽をはじきおちつきがたしもとほり來るに
- 2 白花のつつめるうちははこらかに雌蕊ふとりぬ雄蕊おさへて
- 3 花芥子の並立つもとはいささかの蔭をおかせて暑き畑土

氏にはお氣の毒だが若年寄の代表になつてもらつた。何時も氏の作はさうだといふ意味ではないのであるが、この三首を曼陀羅に見出したので粗上に上せたわけである。1の歌の第三句、2の歌の第三四句、3の歌の第四句等に作者の苦心が見える。が、かうした苦心は結局技巧の煩瑣主義でしかありえない。先人が身を以て開拓して來た境地の此方側で遊んでゐるのでは仕方がない。氏には、もう少し短歌を藝術たらしめる悩み、さうした悩みがあつてもよくはないか。たとひ失敗に終るとも。

3

さて以上は完成せる作品の見本である。これをどう展開させて行くかが次に問題になつて来る。それは言ひ換へれば現實感を如何に傳統短歌のうちに生かして行くかといふことになる。この現實感が階級性によつて更に二つの方向に分れる。所謂無産短歌と有産短歌である。又表現形態から言へば自由律と定型律とに分れる。無産短歌は自由律から詩に解消して、有産短歌だけが定型律と自由律との二つになつてゐる。そこでこれを便宜上定型律をとりつゝ動かうとしてゐるものと、自由律の形態をとつてゐる所謂近代主義乃至新興短歌と呼ばれてゐるものと無産短歌とに分けて見てゆくことにしたい。ここで動きつゝある一群として扱はうとする人々は第一の定型短歌によりつゝ或はそれを基準としつゝ動かうとしてゐる人々である。なほ非常時としての國家意識の高揚による「日本的なるもの」の追及氣運が、短歌の動向に如何なる影響をあたへ、最近の短歌がどういふ方向をとらうとしてゐるかといふことについては、短歌の轉向の項を参照され度い。

宇都野 研氏 (勁草八月號)

- 1 きりぎりす聲の吹かるゝ砂庭に枯松葉こぼれぬ日光浴の人
- 2 地引網曳きて今頃を砂丘越ゆる漁夫の半裸體雨に來ずけり

對象に眞向から取組んで押してゆく所、氏獨特のものである。即物的な態度より來る迫眞性、それが氏の短歌の窮極である。窪田空穂氏の自然主義的客觀主義の態度を純客觀に押進めたのが地上の對馬完治氏であるとすれば、強い主觀を裏付けとしながら、これを即物的な客觀主義の態度に押進めたのが宇都野氏である。氏の歌はその即物性の故にギョチナク角張つてゐる。韻文の散文化といふやうな時代性をそこに見る。が今日の作は少し立止つてゐる。

1の歌きりぎりす、聲、日光浴の人がバラバラである、それでゐて一首のリズムは如何にも既成短歌になつてゐる。對象を押切らないうちに歌の方へ妥協したためである。2の歌、下の句に氏らしさを見ることは出来るが上の句は説明の域を出てゐない。おもかけ一聯如何にも懐古的であり短歌的であるのは素材の爲であらう。それにしても少し立止つてゐるやうである。感になつて來ない。

四賀 光子氏 (潮音八月號)

- 1 ネオンサイン照りかつ消ゆるスピードはジャズより早し音なき旋律
- 2 半裸體水衣を着たるマネキンの苦笑の奥にあるものを知る

アララギの寫生を向ふに於てそれと對立的な立場を取らうとしたのが潮音である。自然主義的態度を否定して象徴主義的態度に立つてゐる。しかも傳統を無視した新詩社のフランス船載象徴主義の衰頽を目前に見て來た水穂氏は、さすがに傳統の上に立つことを忘れなかつた。傳統の上に立つた象徴主義は即ち新古今集の幽玄の世界である。又それは芭蕉の詩境にも通ずる。かういふ立場をとつた潮音歌風が大正期にある發展を遂げたといふことは1の項に於けるこの期の理想主義的人道主義的な思潮に折合せて見ることによつて理解されるであらう。象徴派の行着くところは構成主義である。かつての潮音は幽玄とか寂びとか風雅とかの面から現實——藝術的眞實——を構成しようとした。最近の潮音は機械とか現代世相とか言ふやうな面にこれを置換へようとしてゐる。併し出發點でとつた幽玄や寂びが知識的觀念的であつたために

その觀念的な態度そのものをどこまで清算しうるか。これは辛い事業である。主智的な面に立つて現實を構成しようとする、たとへば「短歌と方法」の人々との作品に於ける距離をそこに見ることが出来る。1の歌第五句の音なき旋律はここでは説明である。2の歌奥にあるものを知る。この邊に現在の潮音の動きつゝあるものがあるのではなからうか。

岡山 巖氏 (歌と觀照八月)

- 1 みかけには大いなる屋敷ばかりなり見るにも慣れて四年經むとす
- 2 すでにして二千五百圓は家賃に拂ひしが土塊だにも我がものならぬ

氏は一體に外形彫琢主義である。その氏が動かうとしてゐるのであるからここ暫くは混沌を免れぬであらう。氏の本領たる屏風繪や美術品などを歌うた作品は正に完成品の一である。それだけでも歌人としての氏は認められていゝ。そこを動かうとする熱意は偉とするに足りる。ただ外形彫琢主義であるだけに動かうとする時形から行き易い。住居雜詠の一聯中のこの二首にしても動いてゐるのは表現の形であつて内容は依然たる岡山氏である。

岡野直七郎氏 (蒼穹八月號)

- 1 宿の浴衣に白く着替へて眼のまへに仙酔島を見ぬこれが名所か
- 2 仙酔島の青き樹よりも遙かなる島に人すむ家居眼につく

ここまで来て岡野氏の歌を見るとどうも今月の作はここに引合ひに出すには不適當のやうである。氏の作品のうちには内側から動いてゐるものがあつたやうに記憶してゐるのであるが、今それを調べる材料がない。今月の作は平凡である。1の歌白く着替へては技巧すぎる。第五句のこれが名所か、この頭からずばりと行くところ氏の持味である。氏の歌についてはもつと別な作品にぶつかつた時に云はしてもらふことにする。

さて、これでは甚だ尻切蜻蛉である。實は動きつつある一群の作品のあとに、第四項短歌美學の擴大として、その持つ特質を解剖するつもりであつたが、それは次の機會に譲るより外なくなつた。完成せる作家として、第一項で引合に出した北原白秋氏や吉井勇氏、あるひは特殊な境地をもつ川田順氏等なほ論すべき人が多い。動きつつある一群としても土屋文明氏を始

め問題とすべき人は多い。これは一つは地方にゐるので八月號の雑誌が幾冊も手に入らなかつたためである。いづれ、他日短歌美學の擴大及新興短歌に觸れる機會があつたら、その折に補説することにして一先づ擱筆する。最後に、完成せるものと動きつつあるものとを、便宜上人によつて分けてきたが、嚴密にはこれは作品によるべきであることはいふまでもない。念のため。

短歌美學の擴大

短歌に「あはれ」を種々の角度から、種々の採入れ方をしてゐる諸派についてみるに水麩はより多く國文學的である。直文、柴舟氏、直三郎氏と數へてくると、これは當然の展開ともいへる。水麩で故莫哀の歌風の成長しなかつたのは、莫哀の個性的であつたためもあるが、何よりも莫哀の歌風が國文學的でなかつた事が根本の原因であつたといへよう。水穂氏は「あはれ」の氣分を情趣化した、「幽玄」の角度から採入れてゐる。ただ俳諧の世界をそのまま採入れてゐる所に無理がある。

白秋、夕暮は官覺的な角度から採入れてゐる。短歌に「まこと」を採入れてゐるのはアララギである。ただアララギの「まこと」も専ら自己觀照と自然觀照との面に局限せられてゐた。そして、これらは何れもすでに一通完成の域に達してゐる。最近水穂に近代主義短歌があらは

れ、潮音に流行の歌があらはれ、アララギに生活相の歌が多くあらはれてきた。

ここに短歌の進展の上に最も問題となるべき現代生活相の歌について一瞥する。

亡き友が形見分ちしセルの着物一枚を寒くなるまで着つくしぬ

土をふるひ春咲く花の根を植うる一時だにも吾はゆたけし

幾年かねがひし桶を買ひ來り五日ばかりはつづけざまに浴む

わが病君こまごまと見給ひぬ安けさに携へて植木市に入る

この人もまた惱めるか吾が前に古きたたみに嘆く久しき

以上はアララギ十一月號の土屋文明氏の作品であるが、同じくアララギ十一月號には竹尾忠吉氏の

いと日晴れたる空ゆふぐれて市街を見下し走り過ぎぬる電車の中に居り

の如き作品がある。なほ文明氏は、短歌研究十二月號に

まこと女の愼ましきは容色と共に失することこの女のこの文章の示すが如し

の如きを發表してゐる。茂吉氏が飛行機の歌以來

有島武郎氏なども美女と心中して二つの死體が腐敗してぶらさがりけり

抱きつきたる死際の媾合を思へばむらむらとなりて我はぶちのめすべし

の如きを發表してゐることは、歌壇周知の事であらう。

就中土屋文明氏の現實的生活相歌は、茂吉氏の流動的作品と共に、今や、アララギに大きな

一つの流れを形成しようとしてゐる。空穂系の國民文學、勁草等にも現實的生活相の歌が多い。

國民文學は今手元ないので引用し得ないが勁草十一月號から宇都野氏の歌を左に抜く。

これの子はいつの日も笑めり病み臥して起つ日ありやと思ふ床にも

病める日も笑顔を見するこれの子や何に忍従の心なるらん

笑顔見むと入りつる室に何見たる空虚にあけしこの眼動かず

空虚にあけし眼よりやや遠き方に心の引かるるならじ

土屋氏の歌も國民文學の歌も、どうも面白くないと云ふ評を聞く、迫力を缺くからである。

詩魂を缺くからである。生活の表面描寫に終つてゐるものが多いからである。が、この面白くないといふ評語は、從來の短歌美學からの狭い見方に立つてゐるからではなからうか。少くともこれらの作品はほのほのとあはれに陶醉すべきものではない。却つてこれらの作品からこそ新しき短歌美學が生れてくるのではなからうか。新しき美學と言ふよりも、むしろ從來の短歌美學に新しい色彩が加へられてくるのではなからうか。それがどんな色合であるかは今のところ規定し得べきではない。ただ、より切實な、より強烈な、より刺戟的な色合であることは言へるであらう。

歌壇が一樣に陶醉境に浸つてゐる時、これ等の作家が一つの理想をもつて短歌を現實の中にひた押しに押し行つて行く態度は尊敬に價する。とともにかかる作品により多く抒情性をあたへる努力こそ、今や、歌壇に於ける最も大きな仕事である。特に若き人達の仕事として。

評論の側にあつて、かかる面への理解を示したのは短歌新聞の柳田氏であらう。が氏の評論には多分のジャーナリストらしさがつきまとうてゐるのが弱味である。七年度によき評論を多く見せた岡山君はこの面への理解を缺いてゐた。氏の評論には短歌への理想がない。その勝れ

たる鑑照の眼は、いつも出來上つた短歌の中に局限されてゐた。従つて白秋氏、茂吉氏に對する深い鑑照力も、一度茂吉氏の流動的作品に當面すると俄かに筆が滯つて顧みて他を言ふ結果をきたしたのである。

昭和八年の歌壇は、まさに、かかる一つ短歌美學の擴大を、課題とするに到るであらう。

短歌表現の方法

短歌に具象的表現法と抽象的表現及び具象抽象併用表現法のあることは、短歌理論（歌壇新報）に於て陳べておいた。具象的表現法とは、語をかへれば客觀描寫法である。地上の對島氏はこの客觀描寫一點張で他の表現法は拒否されるらしい。小生の

竹群に咲きて垂れたる藤波のあはれなりける庭のけはひや

を評して、「落柿舎の庭の荒れた情景を出さうとしたものだ。藤の枝が所もあらうに竹群などに絡んでしまつて、其所で花を咲かせてゐる。荒れた有様である。そこを捉へたのはいい。それだけを十分に苦心して云へば、庭のあはれさを表せる筈である。然るにそれができないためか

描寫を途中で投げて安易に説明しようとして、あはれなりける庭のけはひやとした。これでは折角の上の句に對して申譯ない手法である」と評してゐられる。しかるに同じ歌を太田水穂は「幽にして靜けし」と評してゐるのである。短歌の表現法から全然主觀描寫を拒否してしまへば短歌は其の半以上を消失するであらう。もちろん安易なる主觀語の使用は、最も忌むところである。が、この歌のあはれなる。が、さう安易に用ひられてゐるであらうか。一首の情景はむしろこのあはれを中心に集中してゐるのである。あはれと云はずしてあはれを感じしめる、と同時にあはれと言うてあはれを感じしめる場合もありうる。客觀描寫の價值については、表現の根本的な方法として十分これを認むべきであるが、客觀描寫なるものが同時にとかく物の表面描寫に終り易い事を對島氏に對して指摘したい。試に同氏の「地上」十一月に於ける作品をみる。

秋の曉、汽車中にて

山陰のひくき草の家あかときの靄に埋れて屋根ばかり見ゆ

高樫の暗き下かげ草の家の苔青き屋根を見下しにけり

これらの客觀描寫の作品には、客觀の裏の強い主觀が缺けてゐる。讀んで砂をかむ如く、一向に面白くない所以である。短歌は抒情詩である。強い主觀の裏付があつて始めてその表現は出来る。客觀的具象語を用ひるか、主觀的抽象語を用ひるかは、方法としての問題である。方法を本質と混同してゐるところに對島氏の歌論の狭さが生じて來てゐるのである。表現法の大道としての具象法については小生もその重要性を、また抽象法についてはその危険をすでに短歌理論に於て、屢々説いてゐる。が、この一首の如きは、かかる表現法も認めていいのではなからうか。敢へて、同氏の再考を俟つところである。

なほ同氏が「地上」十一月號に於て小生の歌に加へられた評はまさしく、抽象的表現法の短所を衝いてゐる。この作品については小生は同氏の評を忝くうけるものである。

空穂系の作家には對島氏と同様に表面描寫からくる平板的な淺さが共通してゐる。

「國民文學」の松村英一氏、半田良平氏等の作品の持つ味がそれである。この點では「勁草」の宇都野研氏の作品はいい。客觀的態度から必然に現實的な傾向に進んでゐる上に、客觀描寫の弱點に氣付いてゐる氏は作品に詩魂を失ふ事を最も恐れてゐる。同氏の作品こそ最も注目せ

らるべきものである。

二二八

地方歌壇

地方歌壇から、しきりに雑誌が刊行され協會が設立される。文化の進展にともなふ當然な現象であらう。一人の大家が歌壇を支配するといふやうな時代はすでに過ぎ去つた。

地方歌壇が事大主義から覺めてきたことはよろこんでいい。が、ただ雑誌を刊行するだけでは何にもならない。却つて群小歌人を自慰的に陥入らせて、短歌を墮落させるに過ぎない。短歌に對する一つの理想をはずきり認めて、そこに立場をおいて始めて意義が存する。さもなければ短歌を藝術行動から趣味行動へと後退させるだけである。地方の中で、水準が中央歌壇と同程度まで行つてゐるのは名古屋だけであらう。「短歌」にしても「歌壇風景」にしてもいふことがびたり中央歌壇の焦點にはまつてゐる。

自然風詠は短歌の本格的な道である。短歌の用語形態の動かぬ限りは、短歌的情趣の世界から抜ける事は容易でない。短歌の不易な面は一應完成せられた今日、如何に現實感を採入れて

ゆくかを、作品行動で示してくれて始めて「短歌」同人諸君の名評は生きてくるのであらう。

歌壇の豫望

1

今日の日本文學のうちで、短歌ほど現實性を失つて超現實の世界に陶醉してゐるものはない。もちろん、また如何なる他國の文學のうちにも見出せないであらう。その主なる原因が個人主義思想の行詰りにあることは、すでに指摘されてゐる。しかし、より永續的な原因として傳統の魔力を忘れてはならない。長い間の封建經濟に依存せる社會組織は、島國としての地理的環境からくる民族の孤獨性を、さらに孤獨的にしてきた。孤獨は人間を保守的崇古的たらしめる。各時代の現實相のために動かされることの少い、高踏的超越的な傾向は、わが國の短歌に共通する色彩である。自我を發揮した啄木にも後繼者が出なかつた。啄木の短歌が眞に勝れた藝術なら、後繼者が出るはずである。一つのすぐれた藝術は、必ずそれを承け繼ぐ人が出て益々洗

練されて行くべきであるから。しかるに、啄木には後繼者が出ないところを見ると、彼の短歌はすぐれた藝術とはいへない。といふやうに考へることも可能ではある。が、この考へ方は傳統の力を計算に入れてゐないために、多少の誤算を來してゐると思はれる。反對にアララギが一月號を廿五周年號として、數百ページの大冊を發行するまでの擴大をなし得たのは、萬葉集といふ傳統短歌を背景としてきたからである。傳統のうちに陶醉しきつてゐる人たちには、自分が傳統のなかに生きてゐるのだといふことさへも認めることができない。今日の歌人の大多數がそれである。しかるに、すでに、アララギにあつても、現在指導的地位にある人々、齋藤茂吉氏とか土屋文明氏とかは、短歌を今日の藝術にまで進展さすべく努めてゐる。アララギ崇拜の有象無象が、盲目的にアララギ流萬葉調を追かけてゐる間に、指導者たちは、今日の短歌の頂點に立つて阿修羅の苦行をしてゐるのである。今日の短歌の場合にあつては、これを現代の短歌にまで進展せしめるといふことは、即ち、既成短歌のなかに如何に現實を採り入れて行くかといふことを意味する。このことが、時代に生きる若き歌人によつてなされないので、却つて土屋文明氏とか、或は勁草の宇都野研氏とかの如き人々によつてなされつゝあることは皮肉

である。萬葉精神をまこと、古今精神をあはれ、新古今精神を幽玄といふ概念で代表せしめて、この國の短歌史をも、今日の歌壇をも、この三つの精神の隆替錯雜を原理として説明することが昨年來流行してゐる。が、まことは短歌の態度であつて内容ではあり得ない。萬葉精神をまことと假定するなら、それは萬葉人の生活態度と解してのみ正しく理解し得る。まことの態度で人生に生きてゆく時、感ずる感情の内容には、あはれもあればをかしもあるであらうし、さらに文化の進展とともに複雑なものが派出してきてゐるのである。平安朝の文學は、このあはれとをかし、の二方面を採り上げてゐるが、平安朝の短歌はあはれの面のみを内容としてゐる。まことの態度で人生に直面する場合、感情内容は自由であり多様であるはずである。また感情を誘發する事象も自由なはずである。

2

しかるにアララギの短歌は素材を専ら自然に對する感傷的内面集中と個人的心境とに限定するに至つた。かつて啄木が自然主義の當然の方向として、現實社會を採り上げ初めた時に、啄

木と最も花やかな闘争を展開した齋藤茂吉氏は、同時にアララギ短歌から現實社會相を放斥してしまつた。こゝにアララギ短歌が現實主義を高唱しつゝ超現實主義に墮して行つた一半の理由が存する。齋藤茂吉氏の功罪相半するといはれるゆゑである。が、アララギは、今や、その一度放逐した世界を再検討せねばならぬ時機に達した。土屋文明氏の昨年度に示した作品は、明かにこのことを物語つてゐる。アララギ内におけるこの傾向は、すでに相當擴大してゐる。

本年のアララギは益々この方向に進むであらう。これはアララギとしては赤彦以來の、一つの劃期的轉向である。赤彦にしても中村憲吉氏にしても齋藤茂吉氏にしても、過去において各一つの完成を遂げてきた。そして、それは、凡そ短歌の至り得る頂點にまで達したものとといへる。將來のアララギの指導者たるべき土屋文明氏には、これらの人々の開拓してゐない境地を拓いてゆくよりほかに、進むべき路は残されてゐなかつたのである。

現在の文明氏の努力が、今日の短歌の進むべき一つの方向を正しく指してゐながら、その作品の皮相的表面的であるのは、その努力に明瞭な自覺が伴つてゐなかつたため、いへば、前述の如き立場からやむなく選んだ方向であつたためといへなくない。現實社會を、正確に、意識

的に把握することによつてのみ、文明氏の作品は深さを加へ得るであらう。平凡な浅い身邊の生活相のうちに深いものを認識することが、同氏の作品には要求されていゝ。本年度におけるアララギにとつての課題としてこの要求を提出しておきたい。

短歌の形式において、現實感を表現しようとすることは、用語および形態の拘束のために、到底不可能であるとして、遂に定型律を放棄してしまつた自由律派にあつては、詩歌の前田夕暮氏が、昨秋ごろから短歌的重量感なるものを持出して、再び短歌へ近附かうとする傾向を示した。この傾向は本年も引續き進められて行くであらう。そして詩歌は舊短歌の教養と修練とを経た人々と、超現實主義に出發した若き人々との懸隔を益益大ならしめて行くことを豫想し得る。この距離が、つひに兩者を分裂せしめた後においてのみ、夕暮氏のほんとうの姿を見出すことが可能となつてくるのであらう。

最近の氏の作品を特色づけてゐる官能的自然主義の色彩は、定型律時代の氏の持つてゐたものと殆ど何等の變化をも示してゐない。白日社以前の初期の氏の歌にあつた思想は完全に氏の作品から放逐されてしまつてゐる。思想がない。これは現實感の把握および表現といふ正しき

意圖にもかゝはらず、氏の方向を高く評價し得ない最も重要な條件であらう。このことは土岐善麿氏についてもいへると思ふ。

短歌研究一月號は、大東京競詠短歌として、歌壇の人々に大東京の風物を競詠せしめてゐる。そのうちの土岐善麿氏の作品と、石原純氏の作品とを比較してみると、石原氏の方がはるかに前田氏や土岐氏よりも現實感を背後の事實のうちに理解しようとする努力を示してゐる。が、作品としては、前田氏や土岐氏の方が勝れてゐるやうである。石原氏の作品には概念が露出してゐる。現實感の具象化といふことが如何に困難であるか、特に短歌といふやうな抒情詩にあつては、イデオロギーが自然發生的にまで熟してゐない場合、多くは、失敗勝ちに終り易いことが今さらのやうに顧みられるのである。自由律派全體の問題として、この面への努力が集中されてくることを期待する。知識階級としての理想を探究して行くといふ方向に沿うて、たとへば、新緑の鳴海要吉氏の提唱する健全律の如きに、さらに理論的思想的な追究を向けることによつて。

自由律短歌は、短歌に非ずといふ斷定を歌壇から下されたための不安から、自由律各派が一

つに合同しようと試みた運動は、進歩的な人々の結社意識に對する否定より、つひに中途で解消するに至つたが、歌壇へは一つの波動を與へた。殊に昨年度において、短歌定型の擁護者として花々しい論陣を張つた北原白秋氏は、短歌民族なるクォーターを秋に刊行して、定型律短歌の尊嚴のために立つといふ氣概を示した。多くの追隨者達は白秋氏の藝術的精進と良心の厳しさに惚々と見入つてゐる。勝れたる天稟の才能を、傳統のうちに生かして行くところに、白秋氏の短歌の魅力は存する。

3

傳統の陶醉より醒めることのないであらう歌人たちは、その藝術至上的唯美的作品に絶大の讚美を惜しまぬのである。氏の定型律論が、消極的のものであることなどは夢想だにもしないで、傳統短歌に表現し得ざる現實感、自由詩の形式において表現すればいい、短歌には短歌的情趣だけを表現せよ、到底今日の短歌は古典短歌なのだから。といふ主張のうちには短歌を境涯の藝術とする限界が存する。そのことは理論においてのみならず、同氏の作品が明かにこ

れを物語つてゐる。人は風景を見る。しかし心は風景に集中しないで、風景が惹起するさまざまな感情の裡に生きる。感情を享受してゐるのであつて、風景を享受してゐるのではない。風景はたゞ感情を生むために、刺戟するためにはあるのである。風景そのものは精神的力を持たない。ひとり感情のみはそれを持つてゐる。抒情詩はかゝる感傷的内面集中をその生命とする。従つて作歌に際しては感傷の質および集中の二つの面が考へられる。感傷の質は天稟である。集中は鍛練である。白秋氏の追隨者につひに白秋氏以上のものが出ず、晶子氏の門弟から晶子氏以上の歌人の出ないのは、感傷の質に差があり、それは天稟だからである。白秋氏の天稟と鍛練とは本年も短歌を益々唯美的藝術至上的に洗練せしめゆくであらう。今日の短歌にかゝる面の開拓を肯定することは、天才白秋氏に委せておいていい。

明星は滅びた。生命があつたから。心の花や水蘂は滅びない。最初から生命がないから。といふ観察は一面の眞である。と同時に明星は傳統を拒否したが、心の花や水蘂は國文學的傳統短歌を立場としてゐるために、そこに擴大性と永續性との存するを認識することによつて、滅びないであらう、といふ肯定をも與へうる。幽玄といふ傳統美學の世界を足場とする潮音も引

きつゞき、不易流行のうちの流行の面に精進することであらう。自然主義のあとに、象徴主義の旗印を擧げ、かつ新詩社のフランス船載の象徴を斥けて、俳諧の幽玄を意識的にとりあげた點に太田水穂氏の伶俐さを知ることが出来る。直感を云々しつゝ觀念的になり易いことは氏の弱みである。個人主義の行詰りに立往生してゐる自然の尾山篤二郎氏は、虚無的な色彩の濃い作品を、引きつゞき示すであらうし、浪漫主義の夢を恐らく死ぬまで見つゞけてゐるであらう吉井勇氏は、相も變らぬ相聞歌に精を出すことであらう、橄欖の吉植庄亮氏が昨年度に示した現實感をどの程度まで掘下けてゆくかも興味ある謎である。これらの作家はその作品がかつて示した或ひは現在示しつゝある優秀さにもかゝはらず、すでに過去の作家である。

評論家としての岡山巖氏は、既成短歌への卓越せる批評眼にもかかはらず、同様に、短歌の進展の上に何等の役割をも果し得なかつたし、岡野直七郎氏はわづかに短歌の方向に疑問を投げかけたといふだけに、岡山氏より進歩的であるといはれてゐるのであつて、ともに、短歌美學の現代化に何等の示唆をも示し得なかつた。今日、短歌では食べてゆかれぬ。このことは短歌を著しく趣味的たらしめるに役立つてゐる。短歌は他の文學と異なつて讀者即ち作者であ

る。しかも讀者の大多數は短歌を楽しんでゐる程度の歌詠みなのである。

二四〇

4

短歌を藝術として苦しむよりも趣味として楽しむ歌人の方が、實際は遙かに多い。現在毎月印刷される短歌雑誌は全國で三百餘種に上るといはれてゐる。これら自慰的な歌人達の手によつては、短歌は恐らく一步も進展しないであらう。が、そんなことにおかまひなく群小雑誌は本年も増加する一方であらう、といふことを豫想しうる。何しろ、彼等にとつては短歌はまことに手ごろな玩具なのだから。かかる傾向より自覺せぬ限り歌壇の評論は前進し得ない。そして本年も昨年の如くしばしば歌壇外より短歌に關するよき評論をきかされることであらう。たとへば短歌研究における長谷川如是閑氏等によつて。

象徴主義の次に來るものとして若い一群の間には、すでに構成派の運動が鮮明に現れて來てゐる。この運動は昨年來漸く明瞭な方向を示して來た。多分に未來をもつ方向として注意せられていゝ。短歌表現による津輕てる子氏や兒山敬一氏がこれを代表してゐる。その理論指導の

地位にある兒山氏は短歌の傳統を無視してゐるために、作品に大衆性を缺く結果を來してゐる。短歌を流動の相の中に認識すべきことを忠告したい。赤彦流寫生歌の模造品より脱却せねばならないといふことは、今や歌壇共通の問題としてうけとられてゐるところである。

主智的な傾向をとる人々は、構成派の流行に統一せられてゆくことを豫望し得る。兒山氏の主觀主義的態度は、一步の差で超現實主義と手を握り易い。このことは警戒せられねばならぬ。まるめらの大熊信行氏は舊結社觀念を揚棄することにより、短歌建設の清水信氏は新感覺派の色彩を鮮明にすることにより、いづれも本年の短歌的な仕事を向上せしめるであらう。

定型律の側より、現實感を表現して行く運動をこそ、根強く進展せしむべきである。土屋文明氏のほかに窪田空穂氏の系統に屬する國民文學および勁草等にもこの傾向を見る。たゞ國民文學の松村英一氏以下の作品の作家の日常生活相を歌つた作品にしても、土屋氏の作品にしてもあまりに皮相的である。抒情性を缺いてゐる。この現實感に基づく抒情性を、定型律若しくは基準律の形式において表現せる作品が次第に藝術的洗練を重ねることにより、從來の短歌のもたなかつた短歌美學が新しく開拓されねばならぬ。形態への關心も、もう一度新しく意識さ

れる必要がある。

昨年の歌壇は無産短歌の解消によつて反動的な酔けさの中に置かれてあつた。白秋氏と夕暮氏との定型律と自由律の對抗がわづかに生氣を興へてゐたかの如き状態であつた。自由律と定型律とを、分離した様式として理解することは、今日では歌壇の常識である。歌壇は、今日の現實感を如何に生生と抒情しうるかといふ、極めて素朴な、しかし、基本的な原則に立脚してもう一度短歌形態を見直すことにより、この怠惰なる常識を消滅させねばならない。現實の生活構造の著しい變貌に伴ふ生活觀念、生活感覺の變革を短歌に具象化することこそ、本年の歌壇の最も意義深き仕事となつて來るであらう。

あらゆる意味における、現實から避難せる態度を拒否し、生々した感覺をもつて、現實感を正しくかの短歌形式に具象化することこそ、歌壇の新しい目標である。この方向を歌壇の主流にまで押進めてゆくための運動は、追々顯著なものとならねばならぬ。新しい時代の情緒を表現しようとする最近の現實的新抒情主義短歌の提唱は、その運動の一つである。

歌壇の新人

今の歌壇に新人がありうるや。さあど私は首をかしげる。これは力量の問題ではなく、主として今日の短歌そのものの有つ困難さにとづく。ここにとりあげる少數の人々はよくこの困難をつきぬけるであらうか。

「アララギ」 大正期以後の歌壇を代表する結社であるだけに多士濟々である。ただ第二線に立つ人々のうちには、ひたすら第一線に立つ先輩のあとを追ひかけてゐるものと、なんとかして自己の歌壇を開拓しようとするものがある。もちろん、新人としては前者には多くの期待はかけえない。期待は後者の人々のうへにかけられる。しかしながら、「アララギ」の内部にあつて、今日、自己の歌壇を開拓するといふことは、いひかへれば、現代の短歌そのものを推進せしめることを意味する。それだけに傳統の色の濃い、従つて、師弟關係の緊密であるべき「アララギ」内部の人々に、それを期待することは一層困難かも知れない。が、いまの定

型歌壇で現実的な傾向を求めるとすれば、なんといつても、この雑誌あたりに見出せるのではないかとも思はれる。そこで、やはり現歌壇への期待の一部は、すなはち「アララギ」の新人への期待につながるわけである。さて、その新人であるが、鹿兒島壽藏君などがまづあげられるのではなからうか。

つづいては村田利明、落合京太郎、佐藤佐太郎の諸君等々。鹿兒島君のごときは今更新人でもないかも知れないが、その手堅い表現のうちに、いつも新鮮味をたたへてゐるところに將來性がある。村田利明君は眞正面から而も素直に歌ひあけてゆくうちに豊かな詩味がある。それだけに弱いともいへるし、またすでに過ぎてきたものへの追隨に終り易い點があるともいへよう。反對に落合京太郎君には逞しきがある。九月號の「山行時時」などよく實力を見せてゐる。佐藤佐太郎君の歌は題材からも、表現からも、眼立つて特異性を持つてゐる。この人の作品あたりが今後の短歌の一方方向となるのではなからうか。新人とはこの人などを言ふべきであるかも知れない。

「多磨」は北原白秋の主宰する雑誌である。高踏的な白秋らしさが雑誌の隅々まで行きわたつてゐる。白秋がかつて「ザムボア」復活號に於て河野慎吾、村野次郎の二君を最大級の讃辭を以て歌壇に推薦した如くに、この「多磨」からもやがては幾人かの新人が推薦される事を期待する。いまのところ、ここから新人を求めるとすれば、これも今更新人でもないかも知れないが、先づ穂積忠君に指を屈する。穂積君は二二三ヶ月は亡き母を歌つた長歌をひきつづき發表してゐるが、その詩藻の豊潤さは十分認められていい。穂積君については木俣修、中村正爾の二君をあけたい。しかし穂積君に比べると差がはつきり眼につく。これは一つは鍛練の期間の長さ短かさからくる差でもあるが、それにしても、白秋を追ひかけて息切れを見せないやうな新人を望むことは、望む方が無理であらうか、とにかくこの雑誌は今元氣である。希望に燃えてゐる。

「心の花」は創刊が明治三十一年だから、今年で四十三卷の誌齡を重ねてゐることになる。明治三十年前後といへば、自由主義がやうやく和歌にも浸潤して來た頃である。自由主義が、他のあらゆる文學形式より、なぜにこんなに遅れて最後に短歌の世界に入つて來ねばならなかつたか。短歌は傳統の文學だからである。竹柏會は、だから最も自由主義的な色彩を持つ結社

である。この標語は「深く廣く己がじしに」で四十年間を一貫してゐる。「かくあれ」といふ至上命令はここには存在しない。が、これだからこそまた木下利玄を生み川田順を出したのであるともいへる。では、今日の「心の花」の新人とはいはれたら、小宮良太郎君及び石樽茂君五島美代君の夫妻等々をあけたい。小宮君の歌は「心の花」の作風の一面を代表する。淡々たるうちに動いてゐるものがある。五島君には最近に歌集「暖流」の著がある。石樽君にはさきに「石樽茂歌集」がある。この「石樽茂歌集」と最近の石樽君の歌との間には明らかな轉換がある。今日の石樽君の歌はかつて「アララギ」に小杉茂の名で出詠してゐた頃の歌風にちかい境地であるのではないかと思ふ。先日BKの明石海岸からの歌會の放送の時に、石樽君夫妻と一座したのであるが、あの日の作などは明らかにさう思はせるものがあつた。それにつけても傳統短歌に時代の情感を止揚するといふことが、特に現在の如く短歌がすでに一應圓熟完成期に達してゐる時代にあつては、如何に困難であるか、如何に不退轉の勇猛心を要するかを思はせられたものである。五島さんの「暖流」は母親としての暖かさを持つてゐる。

「水麩」は尾上柴舟の主宰にかかる。しかし本誌の創刊當時に故石井直三郎氏は、いつも「創

作」と「アララギ」の間をと言うてゐたものである。それが、のちには雑誌としては國文學的な和歌といふ風に落着いて行つたやうである。九月號には安藤彦三郎君の「藝術への情熱」のやうな文章が掲げられて「水麩」の短歌は低調であるといふ批判に對する反省が、雑誌の内部に見られるにいたつたことは注目に價する。研究物では、日比修平君、加藤將之君、熊谷武至君等の眞面目な努力が、いつ見てもきもちいい。日比君の「歌壇詠風の推移への雜考」など現代短歌を發生成長のうへから理解しようとしたもので相當讀みごたへがある。熊谷君の明治大正歌壇の書誌的研究はひとり「水麩」のみならず歌壇の好研究物である。ただ、その熱意はさることながら、最近のものは聊か本道を外れ趣味に淫する嫌ひがありはせぬか。歌の作品のうへでは安藤君の嘆息にも拘らず、これといふ新人はゐないやうである。安藤君が言うてゐるやうなことは、その昔私なども考へたことがあるが、その考へを徹底させれば、「水麩」今日の盛大さを保つことは容易でなくなるであらう。そこに石井氏亡きあとの「水麩」の今後の悩みがあるのではなからうか。

「潮音」ここからいはいゆる新人は容易に出ない。ここでは作品に於けるイデオロギーが象

め規定される形をとり易いからである。そのうちで山崎等君の作品をとる。動きがあるところがいい。

「ポトナム」からは福田榮一君、尾關榮一郎君、小島清君、國崎望久太郎君等を推す。歌壇になんらの情實を持たないこの雑誌から歌壇に出るといふことは、實力以外に種々困難な事情が伴ふと見えて、福田君の歌の如き却つて「中央公論」等に屢々推薦されてゐる。尾關君には確かな技巧があり、國崎君には近代人の透徹した詩魂がある。小島君の作品は今日の短歌を如何に推進せしむべきかに身を以てあたつてゐる。その結果よりもその意力に意義を認めることができる。

その他では、「現實短歌」の田口白汀君、「橄欖」の小西光三君、「歌と鑑賞」の矢吹正衛君、「眞人」の片桐顯智君、「地上」の杉野朴君、「國民文學」の谷鼎君、「勁草」の大塚政光君、山科杉夫君、「蒼穹」の服部忠志君、「どうだん」の清水千代君、「明日香」の生方たつゑ君等々の諸君。「覇主樹」、「創作」、「青垣」、「自然」等には今のところこれといふ新人は見出せないやうである。

地方の雑誌では「日本歌人」の前川佐美雄君、田中武彦君、「帚木」の中原勇夫君。また臺北

市から出てゐる「あらたま」に平井二郎君がある。同誌七月號の「端硯水巖譜」の一聯の連作は新人としての彼の力量を十分に語つてゐる。もつと中央歌壇にみとめられていい人である。秋田の「樹陰」の佐々木順君も、もつと中央に知られていい。九月號の「川を見る」の一聯などは相當の作である。

なほ自由律の側からは、「短歌科」の清水信君、「短歌表現」の兒山敬一君、「短歌と方法」の逗子八郎君、「立像」の藤井千鶴子君を數へることができようか。

最後に見残した雑誌が、従つて見残された新人が、まだあることと思ふ。

近代短歌の方向

現代の短歌が、どんな傾向にあるか、また、將來どんな風に動いて行くかといふことを知るためには、先づ現代の短歌が、どういふやうにして生れ、どういふ風に成長してきたかといふ點を明にすることが、必要になつてくるのでありますが、一體、日本の文學の種々な形式のうちで短歌ほど長い傳統を持つてゐる文學形式は、ほかにはないのであります。萬葉集以來、一千年以上の長い年月を経た今日、なほ、殆んどそのままに近い形式で行はれてゐて、そのうへ、ほかの文學は、みんな、現代語になつてゐるのに、短歌だけは依然として昔のままの文語が用ひられてゐます。こんなことは、ひとり日本の他の文學ばかりでなく、外國のどこの文學にも例のないことと思はれます。傳統を尊重する國民性の一端が、ここに見られるわけで、いはばそれほど、短歌は日本の國民性にとけこんでゐるともいへるのであります。それなら、萬葉集

以來少しも變化してゐないかといふに、それは時代によつて多少の變化があります。萬葉集の短歌と、古今集及び新古今集の短歌とを比べますと、可なり相異つて居ります。しかるに、その後は、すうつと變らずに明治の中頃までつづいてゐまして、明治年間に、宮中の御歌所の長であつた高崎正風なども、古今集を和歌の經典の如く考へ、古今集の撰者、紀貫之を和歌の神様のやうに崇拜してゐたのであります。勿論、その間にも古今集の和歌の内容たる、あはれの情趣が、新古今集では幽玄となり、明治になつては、それが、風雅（ミヤビ）に展開してゐるといふやうに、多少の變化はありましたが、それにしても、一方時代は明治維新以來一新してゐるのであります。そこで、短歌も變らずにはゐない筈なのでありまして、追々和歌を改良して、新時代にふさはしいものにしようといふ「和歌改良論」や「長歌改良論」が唱へられるやうになりました。これが明治二十年代の初頃。それに刺戟されて一部の人々の間に新しい短歌をつくる運動が盛になり、一時これを従來の短歌に對して新派和歌といひ、従來の短歌を舊派和歌と世間ではいうたのであります。明治三十年から三十五年までに、歌壇には、この新舊の入れかはりが行はれて、三十五年になるともう新しい歌を新派といふ人はなくなつた。短歌

といへば、新しい歌のことをいふやうになつたのであります。それなら、新派和歌の運動は、どういふ風に行はれてきたかといひますと、初めは従來の和歌の中に、新題——これは西洋から輸入した新しい事物、たとへば、ガス燈とか輕氣球とか新聞とか、何でも新しく珍らしいものを短歌によんだものであります。これが盛に行はれましたのが明治の四、五年頃から二十年頃までであつて、三十年になると、文化が段々進んできて、新題がもう新題でなくなつてしまつて、新題歌は自然に消えてしまひましたが、この新題歌は、元來、風流とか、風雅とかを内容としてゐた當時の和歌を形や詞ことばはそのままにしておいて、中味だけ新しいものに入れかへた、さういふものでしたから、たとへていへば、洋服の上に羽織をひつかけてゐるやうなもので、どうにも、形式と内容とが一致しない。そこで短歌に限らず、今様とか、長歌とかいふ昔から我邦にある韻文の形式では、どうも新時代の事物や思想感情を詠むには適しない。新時代には新時代の詩の形がなくてはならない。といふ考へが新しい時代の空氣を吸つて育ち、新しい教育をうけた青年達の間に唱へられるやうになつた。これが明治十五年の「新體詩抄」であります。新體詩とは新體の詩、即ち、今までになかつた新しい形式の詩といふことであります。

す。ですから、これは、和歌とか、俳諧とかとちがつて明治から現代にかけて新しく出来た一つの詩形であります。ところが、明治二十年頃になると當時の盲目的な外國崇拜に對する反動として、東洋的なもの、日本的なものへの再認識が叫ばれるやうになり、それに呼應して、新體詩のやうに外國の詩をお手本にして、我邦の短歌や長歌を否定してしまはないで、これを改良してゆけ、といふ和歌改良論や、長歌改良論が唱へられ出したのであります。この「和歌改良論」でいうてゐることは、題詠をやめて實感をうたへとか其他種々ありますが、要するに和歌が懦弱であるから、もつと強い、勇壯なものにしてゆかなければならないといふ、これが當時の短歌の作品のうへに、最も強い反響をもたらししてゐるのであります。この調子の強いますらを振りの歌を作るには、どうも平安朝以來の古今集の調子ではうまくゆかない。ここに萬葉集の短歌が平安朝以來初めて、短歌に再びとりあけられて來るやうになつたのであります。それなら、當時のどういふ歌人、どういふ流派が、その役目を果してゐるかといふと、それは、どの流派でもどの歌人でもない、維新の際に活躍した志士の系統に屬して、維新後は専ら國事に奔走してゐたいはゆる國士といはれてゐる一部の人々なのであります。この人々の

あとをうけたのが與謝野鐵幹と正岡子規とであります。普通には新派和歌は落合直文から始まると考へられてをりますが、直文は古今集の調子からぬけ切れなかつた人であります。従つてこの役目を徹底的に果すことは出来ませんでした。その直文に出来なかつたところを鐵幹がやつてゐるのであります。「亡國の音」といふものを書いて、御歌所の歌は國を亡す音だと言つてゐるのであります。子規はその次に現れた。今日では、萬葉調といへば子規といふやうに考へてゐる人が多いやうですが、そのまへに、かういふ人々があるて、萬葉調の歌を作り、また萬葉集の價値をのべてゐるのであります。子規は、それらの影響をうけて萬葉集をよむやうになつたのですが、ただ鐵幹は萬葉集の短歌をそのまま眞似ずに、それを現代化しようとなつた、それが段々現代化の方に力が入つたため、一見萬葉調とは離れたものになつていつたのですが、子規は萬葉の短歌をどこまでも眞似て、詞までそのまま用ひるやうにしてをりました。それなら、鐵幹はどういふやうにして短歌を現代化しようとしたかといひますと、一つの方法として新體詩から種々とつてゐたのであります。この新體詩は新時代にできたもので、いはば、新店ですから、どしどし新しいものを取入れてゐる。ところが短歌はノレンが古い。一千

年以上もレンメンとつづいてゐる老舗ですから、種々な束縛があつてなかく自由の新時代の新しいものを取入れることが出来ない。そこで新體詩の方でやつたことを真似る。すすんで短歌も新時代の詩の一つの形式として、新體詩運動の中にふくめて同じやうに扱はうとしてゐたのです。ですから、この明治二十年代から四十年頃までは、短歌のことを多く短詩（短い詩）というて、いはゆる新體詩を長詩といひ、兩方合せてこれを詩或は新體詩といつてゐた——當時の進歩的な雑誌、特に浪漫文學の雑誌は皆さういうてゐたのであります。かういふやうにして、明治三十年頃には古今集を手本としてゐる舊派の和歌に對して、萬葉調の新派の和歌の側からしきりに攻撃が始められたのみならず、舊派同志のうちからも、古今調の御歌所派の歌に對して論難を加へるものがあらはれたりして力をあはせて、舊派和歌の中心團體であつた御歌所派の人々を攻撃したわけであります。鐵幹の「亡國の音」が明治二十七年、子規の「歌よみに與ふる書」——これは「貫之は下手な歌よみにて古今集はくだらぬ集に有之候」といふやうな書出しの勢のよいものですが、この「歌よみに與ふる書」が三十一年、さうして三十三年頃には新舊が入れ代つて、その後は和歌といへば新しい短歌をいふやうになりました。この三十年

代の短歌は、新しく生れかへつたところの青年日本の理想を高らかに歌つた、浪漫的香氣の高いものでありまして、新時代に於ける「個人の自由」といふ思潮の上に立つて「自我の詩」といふことを強く主張してゐたのであります。「明星」といふ雑誌の第六號(三三)をみますと、新詩社の規則のうちにかういふことが書いてあります。「一、われらは互に自我の詩を發揮せんとす、われらの詩は古人の詩を摸倣するにあらず、われらの詩なり、否われら一人一人の發明したる詩なり、一、われらの詩は國詩（日本の國の詩）と稱すれど新しき國詩なり、明治の國詩なり、萬葉集古今集の系統を脱したる國詩なり、一、新詩社は社友の交情ありて、師弟の關係なし、一、去る者は追はず、來る者は拒まず。」かういうてゐます。ここに現代短歌に於ける最も代表的な浪漫精神による、結合の一つを見ることが出來ます、青年時代は誰でも一度は詩人である。現代といふ時代を一人の人間にたとへてみると、青年期の最も華やかな、胸の高なるやうな情感、これはやはり韻文の形式をとつて表現されるのが、いはゆる文學の公式なのであつて、その現れがこの三十年代の新詩社一派の浪漫短歌だつたのであります。しかるに明治四十年頃には、文壇の自然主義運動が歌壇にも入つてくるやうになつた。これまで浪漫主義の

短歌は、新體詩などとも詩の一形式として文壇をとかくリードしてゐたのが、この自然主義の運動が歌壇に入つて來た時を界として短歌は文壇にリードされるやうになりました。短歌そのものにリードする力がなくなつたといふわけではなく、時代が人間でいへば、青春の時代から、壯年の時代に入り、詩を好む年頃から、小説を求める年頃に成長したわけであり、小説は散文の形式をとるのが常態でありますから、現代に於ける韻文の時代は、この四十年頃を界として一應すぎ去つたことになります。が、それならば短歌は段々衰へたかといふと、さうではなくて、短歌自身としては、益々成長をつづけて行き、大正の中頃に至つて圓熟の域に達してゐます。即ち明治になつてから、他の文學に比べるとずうと後れて生れた現代短歌は、この大正期に入つて完成したのであります。すべて新しい文學が生れる時は、その時代の種々な情勢から生れてくる。たとへば二十年代に短歌にますらを振りかざされたことは、當時の日清戦争前後の國民的感情の昂揚と呼應してゐるといふやうに、それが生れてくる理由が、時代の中にあるのであります。しかし一度生れてしまふと、今度は、一方時代と相互に相關聯しながら、一方それ自身として完成を求める方向をとるものであつて、現代の短歌も、大正期

に於て短歌自身としては、個人心理の描寫と自然の寫生といふ點に於て、一應圓熟完成の域に達してゐると考へられるのであります。そこで、どんな風にして、完成への道を進んでいつたかといふと、公式的には浪漫精神に基く理想主義の短歌のつぎに、寫實精神に基く自然主義の短歌が、文壇の影響のもとにあらはれるといふことが豫想されることになります。ところが、事實はこの自然主義の影響をうけて、とにかく、自然主義短歌の役割を荷負つたものは、正岡子規の根岸派系の寫實精神に立つ人々ではなかつたのであります。却つて落合直文の淺香社系の浪漫精神によるものの側から出てゐるのであります。これは何故か。子規の寫實精神が、直接に自然主義に展開する性質のものでなかつたからで、子規の寫生はどこまでも短歌の方法としての寫生であつて、その短歌の内容は「趣向の配合」といふ主觀的なものであつた。俳句と短歌とを同じやうに考へて、専ら、自然の寫生を重んじてゐて、一步進んで人生の眞實を寫すといふやうな寫實精神にまでは達してゐなかつたやうに思はれます。もちろん子規個人の境遇教養性格等にもよりますが、時代がまだそこまで到つてゐなかつたと見るべきでせう。伊藤左千夫は、馬酔木といふ雑誌の終刊號(四一)でかういふ意味のことを云うてゐます。「子規は、

文學はただ文學を目的とし、短歌はただ短歌を目的とする態度をとつてゐて、従つてその作品を見ると自然を親み、人生を傍観してゐるところがあつた。短歌と短歌以外の一切の文學との關係、もしくは宗教問題、社會問題、人生問題等の諸問題と文學との關係については殆ど意を注ぐところがなかつた。即ち子規は短歌の問題は單に短歌なるものの範圍内に於てのみ解決を求めようとしてゐたのである。もし子規がもつと長く生きてゐたら、あのまま止まつたとは考へられない。しかるに、その後、短歌の理想は、子規の時代とは頗るその中心を異にして、人間研究を根本とするやうになり、歌をつくる態度はおのづから、人生を親み、自然を傍観するやうになつた。といふ意味の事を言うてゐます。しかしながら、この人生を親む態度は、結果から見ればこの派よりも却つて浪漫派系統の歌人から出てゐるのです。明治の終頃には、文壇の自然主義のゆきつまりから生じた混亂に相呼應して、歌壇にも破調の歌とか、口語歌とかいふ種々な運動が行はれて一時混亂を來しました。が、それを過ぎて大正の初期には、新詩社系の新時代的なものを、根岸派系の傳統尊重の態度によつて表現する。つまり、新體詩的なものを我國固有の短歌的聲調のもとに表現するやうになりました。ここまできて傳統短歌が、新體詩

からとるべきもの、いひかへれば新時代からとりいれるべきものはよかれあしかれ一應とり終つたのでありまして、この頃から短歌と新體詩とははつきり分れるやうになりました。しかし將來も我國の文學の一形式としての詩の形式を如何にすべきかといふ問題が出てくれば、この短歌と新體詩とは、いつでも、また、詩として一所になる可能性がある。現に昭和の初期にも歌壇に於て短歌の詩への解消論が一時唱へられたりしましたが、とにかくさういふ風にして、現代の短歌が追々完成に向つて進むと同時に、始め明治三十年頃の出發點に於てわかれた浪漫精神と寫實精神、理想主義の態度と自然主義の態度とが融和され、子規のスケッチと言つたやうな軽い意味の寫生といふことが、「實相に觀入して、自然自己一元の生命を寫す」といふ東洋畫論に見るやうなものにまで進められて、「短歌寫生の說」として唱へられるやうになりました。かうして、短歌が完成し始めると、今度は短歌そのものが一つの權威を持つやうになつて歌道（ウタノミチ）といふやうなことさへ云はれるやうになるものであつて、そこに新しく師弟關係がつくられ、また歌の修業は人格の修業であるといふやうなことが一時大に言はれたりしたのであります。

以上が現代短歌の成立についての極く大まかな歴史であります。かういふ風にみても、現代の短歌は先づ明治から大正の初期にかけて一通り成長をとけてゐる。従つて、現代に歌人として世に知られてゐる人々は、明治三十年頃から明治の終頃までに世に出て、短歌の成長に何等かの役割を荷負つた人々に限られてゐる。そのあとから出て来た人ではどうやつてみてもこの第一線に立つて、現代の短歌を築き上げて来た人々に及ぶことは困難なのであります。ですから歌壇では、大正中期頃に新人といはれてゐた人々が、今でもやはり新人扱ひにされてゐる。作品の上で追いつけないばかりでなく、現代短歌が一度成長し終るや、各流派各結社は、それぞれ門戸を張つてお互に對立するやうになりました。これは、現代短歌の成長圓熟期を代表してゐる一派の傾向が、傳統を重んずる立場をとつてゐたためのものであります。かうして、歌壇は明治の中期に前時代的な師弟關係を否定して、自由な友人關係に立つところから出發して、再び、もとの前時代的な師弟關係にもどつてゆくといふ様な風になりました。これは「個人の自由」を求める立場とは一致しないのであります。元來現代の短歌は新時代の「個人の自由」の思潮にもとづき、内容及形式の自由を追及する精神を基調としその線に沿うて成長して

きてゐます。この精神を内容にだけで止めずに、形式のうへにまで進めたのが自由律短歌であります。そこで大正の中頃から今日にかけて、もつと自由に、形式からいへば短歌を現代語でつくらう、三十一音の形式を一應すてしまはうといふ運動が行はれてきた。この三十一音といふ形式は萬葉集のできる直前頃にできた形式であつて、當時の語法と切離して考へることは出来ないもの、いはゆる文語と切離せない關係にあるわけで、短歌の文語を現代語にかへようとすれば、いきほひ、三十一音の形式も動かさなければならなくなるわけでありませう。かうして口語短歌の運動は、初は三十一音の型のなかに口語をおきかへるといふ方法から出發して、今では殆んど全部自由律の形をとつてゐるのであります。一方内容からいへば、もつと、今日の現實に即した態度で歌を作らうと前に左千夫がいうてゐるやうな人生に親しむ態度で歌をつくらうとする、いはゆる現實主義の態度が、今日歌壇に於て種々と論じられてゐるのであります。また最近には新浪漫主義といふやうな運動も一部に行はれてゐます。時代の現實感を傳統短歌にどの程度にとり入れうるかといふことは、非常に重大な、そして困難な仕事でありますし、新浪漫の運動も自由主義がゆきつまつて新しく統制主義がいはれたりしてゐる今日、理論的に

は一應みとめられるかも知れませんが、これも、事實としてはどうもこのままではさう前途あるものとは考へられません。現實派にしても浪漫派にしても其他諸々の運動も、結局は現在のところ現代短歌の方法、表現の技巧のうへに僅ばかりの新鮮味を加へることが出来る程度にすぎないものと思はれます。即ち、現代の短歌は、種々な運動は絶えず行はれるにしても、まづ當分はこのまま推移してゆくこととせう。何故なら、今日の時代は明治大正のつづきであつて、その間に、明治と徳川時代との間にあつたやうな時勢の變化がないからであります。即ち、歌壇はなほしばらくこのままであつて、その間、現實主義的な態度をとつてゐるものの一部によつてほんの少しづつ動いてゆく、それが私の結論であります。

近代の歌書歌壇

維新勤王志士と和歌

維新勤王志士の和歌を集めた歌集を勤王志士歌集と稱してをるが、この勤王志士歌集は幕末から明治初期にかけて京都、土佐、長州等で數多く出版されてゐる。明治和歌史の幕は、實にこの勤王志士歌集の出版によつて開かれてゐるといへよう。ところが、從來、勤王志士の歌集については、専門の研究者は勿論、國文學者等からも、生硬粗雑なものとし、その和歌史的意義を認められてゐなかつたのである。が、私はこの勤王志士の歌の展開は、明治三十年前の新派和歌の生れるうへに、深い關係があると思ふのである。これを事實の上より考察するに、明治のいはゆる新派の和歌は、當時歌人として自他ともに認めてゐた人々のなかからは、生れてゐないのである。

新派和歌運動の大立物ともいふべき與謝野鐵幹氏の新詩社や、正岡子規の根岸庵歌會の歌の

系統を遡源的にたどつて行くと、この志士の和歌へと行きあたるやうに思はれるのである。鐵幹の父の與謝野禮嚴法師は、本願寺派の僧侶であつたが、維新の際には勤王のために様々奔走畫策した人である。又子規の歌の先生ともいふべき天田愚庵は、もと、禮嚴に就いて始めて歌を作つたのである。その他、鐵幹氏や子規に影響を與へた丸山作樂も、維新の際の志士であつたし、福本日南も、いはゆる國士型の人物である。即ち明治の新しい歌——それは明治大正昭和とつづいて、現在の歌壇を形作つてゐるのであるが——この明治以後の時代を代表する新しい和歌が、どこから生れたかといふに、それは明治前半期の歌壇の中心をなしてゐた御歌所とか、或は民間の歌の團體とかよりも、むしろ、この勤王志士の和歌あたりの血の方が濃いのである。この點から、勤王志士の和歌は、専門的な和歌史の研究のためにも、再検討せらるべき意義をもつてゐると思はれる。

明治の新派和歌が、日清戦争の前後、國家意識の高く燃えた時代に、生れたといふことも、偶然ではないのである。それなら、そこに、どういふ共通點があるか。先づ第一に、態度が現實的であつたといふことである。現實からうけた感情の動きをそのまま表現してゐる。従つて

技巧は拙くても、和歌が生き生きしてゐる、生命が通つてゐる。師匠とか宗匠とかいふ、専門歌人の和歌は、とかく形が出来てゐても、なかに魂がこもつてゐないものになりがちである。この實感を直接に表現してゐるといふことは、和歌にとつては、まことに大切なことなのである。彼等は、現實的であるため、従つて何人か集れば、すぐに現實の批判を始める。周圍の人の是非を論じて、忠義の士か、奸物であるかを定めて、奸物ならすぐに斬つてしまへといふことになりがちだつたのである。第二に感傷性——物事に感激し易い——といふ點も似てゐるであらう。勤王志士歌集にあらはれてゐる志士の、忠君愛國、倒幕攘夷を歌つた和歌のうちには、人に先だつて憂ふるといふ、東洋流儒學の思想が強く流れてゐる。人に先だつて天下の憂をうれふるところに、彼等の感激し易い性格が認められるのである。

渡邊 内藏

早さけば早手折らるる梅の花きよきころを君にしらせて (殉國慷慨)

安定十郎左衛門

維新勤王志士と和歌

梅散りしのちの櫻の初花はわれを詠めのさきがけをせん (殉國)

三條 實美 (七卿落)

さきがけてこの世の梅とちりもせばついてあきさく花もあらなむ

南 八郎 (生野、河上彌一郎)

おくれなば梅も櫻に劣らんさきがけてこそ色も香もあれ

春にさきがけてさく梅の花こそ、彼等の心情を語るものである。

當時は、對内的にも對外的にも、非常に不安な時代であつた。この先憂の觀念は、國家の前途を思ふ忠君愛國の情となつて現れてゐる。忠君愛國の情を歌うたものは、數が非常に多く、殆んど、すべてが、それだと言つてもよい位である。

吉田 松陰

九重の惱む帝をおもはへば手にとるとそものみえさるなり (歎涕)

蒲生 君平 (王室家)

比叡の山見おろすかたぞあはれなる今日九重の數し足らねば

金子 教孝 (水戸、櫻田の變)

とぶ雁にこと問ひてまし深雪ふる蝦夷かちしまのなみ風の音 (殉國慷慨)

ます鏡清き心は玉の緒の絶えてし後ぞ世に知らるべき

佐久良 東雄 (水戸、櫻田の變)

事しあらば我大君の大みため人もかくこそちるべかりける

有村 治助 (さつま、櫻田の變)

大君の憂御心をやすめずばふたたび國にかへらざらめや

平野 國臣 (生野の變)——歌人

あまつ風吹くや錦の旗の手になびかぬ草はあらじとぞおもふ

わが胸の燃ゆるおもひにくらぶれば煙はうすし櫻島山

この忠君愛國の念から歴史上の忠臣義士が彼等の崇拜の的となつたことも、容易に想像が出

来よう。特に楠正成、赤穂四十七士、近くは櫻田事變の志士の、彼等に與へた影響は少くなかつたのである。先づ楠公を詠んだものに、

三條西季知

ひとすぢの道をふまずばさくら井の里の木すゑもなにか別れむ

眞木和泉守 (楠公戦死の日に)

かかる身になりてさこそと思ふかなたぐへて見んはかしこかれども

藤田東湖

みなと川身をすててこそたちはなのかぐはしき名は世にながれけれ (行餘)

櫻田門事變の和歌では、

伴林光平 (大和義舉)

櫻田の雪とけぬれどかぐはしき名は萬世に朽せざりけり

攘夷の思想は、尊王愛國の考と相伴うてゐたのである。彼等のうちには、外國と交際すれば

國家が危いと心から信じ切つてゐたものが少くないのであつた。なかには、攘夷といふことは、到底行はれないことであると自覺してゐながらも、これを幕府を窮地に陥れるための手段に用ゐてゐたものもあつた。

姉小路公知 (公卿、文久三年五月二十日朔平門にて暗殺)

古に吹きかへすべき神風をしらで蜚子えみしら何さわぐらん (歎涕、殉國、慷慨)

吉田松陰 (安政の變)

七たびも生かへりつつゑみしらははむこころ我わすれめや (殉前、詩文)

清川八郎 (出羽の郷士)——眞木和泉、平野國臣

ふきおろせ不二の高根の大御風よもの海路のちりをはらはむ (正氣)

これらは、彼等の感激し易い性質が、外へ向つたものであるが、それが内に向つては、悲歌、慷慨、狂燥、官能享樂等になつて現れてゐる。彼等の多くは、妻子をすて、親を忘れて、同志相求めて盛に悲歌慷慨してゐる。

相見文之助

二七四

岩にたに立矢はあるをいかにして我真心のとふらさるへき (殉前、詩文、慷慨)
武市半平太 (土佐)

乾 十郎 (大和義舉)
いまはしきひと屋の内の物うさを黄泉の國までともにかたらん (殉國、殉續)

兒島 強介 (宇都宮郷土坂下門)
いましめの繩は血汐に染るとも赤きところはなとかはるへき

南 八郎
御心のまにまに皇の行幸まして花みそなはず時になりなば

坂本 龍馬 (土佐)
議論より實を行へなまけ武士國の大事をよそに見る馬鹿

世の中の人は何ともいはばいへわがなすことは我のみぞしる

有村 治左衛門

くろかねもとふらざらめや大丈夫か國のためとおもひきる太刀

またその多くは、直情徑行、時代の反逆兒であつたともいへよう。偽り、狂して、噪ぐ。いはゆる狂噪といへる。かの山縣有朋の山縣狂介、品川彌二郎の春狂、木戸孝允の松菊狂夫、吉田松蔭の長門狂奴等といふやうに、狂の字を好んで名前に使つてゐたのである。また彼等は多く、傾斜の巷に出入してゐる。

高杉 晋作 (ほととぎす)

きれてくれろと

真綿で首の

八千八聲の

血をはくよりも

やはらかに

こわ意見

ほととぎす

なほつらい

かういふ半面もあつたのである。

以上は、志士の歌にあらはれてゐる特色の重なるものであるが、これを歴史的に見ると、第一に、身分制の特色、第二には復古思想がはつきり現れてゐることが數へられる。志士の大多數は下級武士、及び浪士であつた。しかも彼等は、妻子をすて、親を忘れて、天下國家の事に奔走してゐる。また當時日本の國家は内外多事にして、非常な不安な状態におかれてゐた。かういふ時には、東洋の諸國は、よりどころとする（標準）を古に求めるのが常である。この二つの特徴がはつきり現れてゐるのである。

さて、それなら、志士の和歌はどの位あつて、その和歌を集めた勤王歌集は、凡そ、何種類位あるかといふに、勤王志士歌集に現れてゐる和歌を、個人別に分類して、數へてみると、和歌約千二百首、作者約四百三十人となる。京都東山の招魂社には、安政の獄以來、難に殉じた勤王志士千五十名が祭つてあるといふことであるから、さうすると志士の約四割の人々が、和歌を残してゐたといふことになるのである。もちろん、この數字は、當時出版せられた勤王志士歌集についてだけの數であつて、個人の歌集、たとへば、明治二年春松下村塾から出版せら

れた、抄宗寮叢書のなかにある宍戸眞徴の「にほのうきす」とか福原越後の「綠濱詩草」とか國司信濃の「高田のおしね」或は同じ明治二年、浪華柏屋板の「平野國臣歌集」とか、明治十年二月出版の「江月齋遺集」の中の久坂立端の歌集とか、明治二十五年十一月の山縣有朋の「葉櫻日記」とか、いふやうなものは加へてゐないのである。個人として最も數の多いのは、伴林光平の四十一首。伴林光平には別に笹廼屋五百首がある。次に平野國臣の三十六首。平野國臣に國臣歌集の存することは前述せるところである。ついで藤田東湖の三十八首、關鐵之助の二十四首、野村望東尼の二十首、金子教孝の十九首、眞木和泉守の十五首、月性の十三首、吉田松蔭の十二首、蓮田市五郎の十一首等々がある。萬葉調歌人として藪園歌集の著のある佐久良東雄の歌は六首、東雄は水戸の人、志士中の歌人として、光平國臣望東尼等と共に近世和歌史（佐佐木信綱博士著）のうちにも紹介せられてゐる。次に、歌集の方は文久二年から明治二年までに約二十種、その後の分を加へると、大體二十五種四十冊位、少し範圍を擴げると三十五種五十冊位を數へることができる。この歌集を示さなくては、上述の數字が明瞭になつて來ないのであるが、それは勤王志士歌集の展開なる題目のものに改めて觸れることにする。

勤王志士歌集の展開

勤王志士歌の歌集

- 1、明治元年、二年に多い(三年以後たえる)
 - 2、土佐、長州、京都、大阪より刊行
 - 3、明治十年十一月、以後は東京より刊行
 - 4、明治七年以後は定數歌集(教訓物)が出る
 - 5、追善出版(江月齋遺稿)
 - 6、教科書(佐田秀歌集)遺墨
- A 元年 諷 歌 新 聞
 元年 中 外 新 聞
 9年 瓦 解 集
 25年 泥 舟 先 生 詩 歌 集
- 勤王志士
 江戸會津

- 25年 櫻 園 集
 25年 さ く ら 山 集
 B 9年 近世暴徒遺草 賊
 17年 増田宋太郎遺稿 西南の役
 13年 記 念 集
 35年 彰 功 帖 官
 C 15年 愛國民權 演説家百詠選 自由民権
 26年 あ さ か 社 戲 稿
- 定數歌集としては、義烈四天百首(七年)、近世報國百人一首(八年)、明治英名百首(十二年)、
 現今英名百首(十三年)、明治三十六歌撰(十四年)、近世文武名家百人一首(十五年)、近世國歌集
 等を數へることが出来る。

明治の和歌と開化

明治の和歌にまで新時代の文明開化がとりあけられるやうになつたのは、大體明治五、六年以後のことである。尤も單に和歌のなかに南蠻渡來の事物を詠みこむといふ程度なら、もつとすつと早くから存したのであるが、これを意識的に「新題」としてとりあけて、部立のうちの名稱とするやうになつたのは、凡そ明治五年から十年までの間と見るべきであらう。「開化」といふ名をつけた歌書としては明治十一年十一月十日梓行、大久保忠保編「開化新題歌集」を以て嚆矢とする。この書は題箋にも内題にも第一編とはしてないのであるが第二編(四一三)第三編(四一七)と引續き同じ編者によつて續篇が刊行されてゐる。なほ上中下三卷三冊の後摺本があつて、この方は三冊とも卷末の作者姓名及奥附けを缺いてゐるが、内容は全く同一である。但し第一編には元來目次がないのであるが、後摺本上卷には目次を附してある。第二編以下にならつてあ

とから添へたものであらう。

さて、それなら當時どんな事物が所謂「開化」としてとりあけられてゐたかといふに、第一編によると次の百七十七項目が数へられるのである。その大部分を左に掲げる。以て明治十年代の文明開化をしのぶすがともなるであらう。

- 太陽曆 一月一日 新年宴會 紀元節 電信機 郵便 汽車 停車場 汽船 飛脚船 輕氣球 馬車 人力車 小學校 女教師 外國語學校 洋字 女學校 華族學校 農學校 工學校 洋學生 女生徒 新聞紙 蝙蝠傘 氷賣 煉瓦石室 寒暖計 玻璃窓 瓦斯燈 石腦油 鐵橋 萬代橋 鎧橋 國旗 暖爐 避雷針 唧筒 浮標 檢震器 洋畫 活版 摺附木 石盤 鳶被 勿大小 斷髮 廢刀 立憲政體 復古 廢藩 廢關 元老院 訓盲院 病院 起廢病院 養育院 育種場 雅樂稽古所 橫須賀船造所 王子製紙場 器械製紙場 東京書籍館 植物園 富岡製糸所 警視分署 巡查 徵兵 練兵 近衛兵 陸軍 陸軍兵學校 陸海軍 海軍始 軍艦 燈明臺 佃島燈臺 博覽會 博物館 國立銀行 圓金 造幣 楮幣 民撰議院 洋教 禮拜堂 貿易 歐布 歐婦 歐人 歐花 松葉牡丹 洋行 西洋醫

- 術 外國交際 西洋料理 測量 卷烟草 筆算 牛乳 製鐵 鐵道 望遠鏡 種痘 牛肉 肉店 男女同權 自主自由 繙譯書 天理 究理 地球 地球儀 天長節 府縣會同 墨水 行幸 開拓 和魂 開明日新 京都歌舞練場 僧侶妻帶 鶉鳥獵 室內鏡 新都 避暑休暇 幸逢開明世 日曜日 洋犬 權妻 文化日新 土族 土族歸農 土族商法 土族引車 廢官 幼稚園 馬車退廳 新進貴官 汽船出港 地租改正 ○○○ 家祿奉還 奉還金 祿券 大和杖 斜明扉 賞勳牌 貸座敷 娼家寫眞 隱賣 徵毒檢査 娼妓解放 招魂社 臨時招魂祭 魯土戰爭 徒罪 懲役 墨水流燈 琉球藩。

以上のような社會的新現象が歌人の興味を喚起した所に開化的時世相の本質が覗かれるであらう。

近世期に於ける婦女童幼の讀物の一つに百人一首がある。これは明治初期まで繼承せられて明治の初から二十年頃までの間に何々百人一首といふ書物が數十種輩出してゐるのであるが、同じく婦女童幼物と言うても、専ら婦女に讀ませるためのものには、小倉百人一首が多く、それも家庭百科全書式のいはゆる庭訓物のなかに、その一部分として收められてゐる場合が多いの

である。たとへば「若鶴百人一首」といふのを見ると、實は家庭百科全書で、うちに婦女の心得置くべきものとして小倉百人一首を載せてあるに過ぎない。しかるに童幼相手のものは、教訓を主としてゐるだけに、その内容も時世とともに變化してゐるのである。殊に維新に功のあつた人物や、その後の世の中にうまく棹して成功しつつある實業家等を内容とせるものには、時代性が濃く滲み出てゐる。「義烈回天百人一首」(明七)「近世報國百人一首」(明八)「明治英名百詠撰」(明一二)「現今百名百首」(明二三)「明治英名百首」(明一四)「近世文武名譽百人一首」(明一五)「中興高名百首」(明一五)等はそのうちの一部である。

ここに紹介しようとする「童戲百人一首」も、さういふ種類に屬するもので、和小本文二十五丁表紙には童戲百人一首全とあるが、本文の柱は「文明童戲百人一首」となつてゐる。著者は當時の新進ジャーナリスト七杉子總生寛。表紙裏には、文明開化自主自由之人七杉子書と上部にあり、下部に文明開化の服装をした一人物(著者肖像?)の圖がある。惶々曉齊畫である。次に自序がある。曰く

定家卿小倉の山莊に在て百人一首の名歌を集む僕は東京市街に僑居して百首の狂歌を詠す李

白が詩百篇は一斗の酒を飲盡す時間に賦せり此は書肆の需に應じて洋酒一硝子燻を傾くる間に時世の横容を吐露せり其潤筆僅に一杯飲て餘物なし依て標題を百人一酒といふて允當又百人一銖と稱するも可なり

紀元二千五百三十二年第八月

と。即ち明治六年八月にあたる。奥附には、發行年月日著者名等なく、發行書肆として、伊丹屋善兵衛以下椀屋喜兵衛にいたる各地の書肆名が列擧されてゐる。本文は小倉百人一首の作りかへで上句に當時の文明開化を詠みこみ下句はもとのままにおき、上下の句の相照に興味を持たせるやうに工夫せるもの。組方は一丁の表裏に各二つづつ畫を配し歌を散書きしてある。二三の例をあけてみよう。

黄昏の調練場所にラツバ吹く聲きく時ぞ秋はかなしき 猿丸太夫
 瓦斯燈の光はあれどお霜の白きを見れば夜ぞふけにける 中納言家持
 新橋や横濱通ふ蒸汽車に知るも知らぬも逢坂の關 蟬丸

明治の和歌と開化

御布告と日日新聞を讀むべしと人にはつげよあまの釣舟
 郵便に心の丈はつくせどもあはで此世を過してよとや
 ざんぎりや半髪はんぱつあたまた總髪ともみぢの錦神のまにまに
 道ばたに小便したも新聞紙人に知られてくるよしもがな
 酒飲はびいるさんばんあるこほるいつみきとてか戀しかるらむ

中納言兼輔
 藤風興風
 大貳參位

いろいろの西洋植木はやり出し松もむかしの友ならなくに
 西洋をうつす眼がねの大流行いでそよ人を忘れやはする
 婦女童幼は申すに及ばず、如何なる無學文盲の徒も知つてゐた小倉百人一首を利用して當時の文明開化を理解せしめると共に、一笑を求めようとしたところに、著者の頭のよさがうかがへる。

明治短歌史新資料二二三

1

明治前半期の短歌史は、いふまでもなく御歌所派が主潮流を占めてゐた。御歌所派歌人としては、最初に堂上派の三條西季知、次に鈴屋系の近藤芳樹、次に桂園派の八田知紀がある。近藤芳樹のうしろに長州閥があり、八田知紀のうしろには薩州閥が控へてゐる。知紀門の高崎正風及び税所敦子が姿を見せ初める。明治十年頃である。それから先づ三十年頃までは御歌所が歌壇の主流をなしてゐる。しかしこの間にも若干の反御歌所派がある。いはゆる民間派である。御歌所派にも種々の系統が入つてゐる如く、民間派とよぶべき中にも種々の系統がある。

この民間派と御歌所派とを私は一様に古典主義短歌と稱してゐる。藩閥官僚を背景とし其庇護下にあつた御歌所派に進歩的なものを求められないことは當然であるが、當時の民間派にも

同様に進歩的なものは求められない。これは少からず物足りないことであるが、事實はさういふ相を示してゐる。たとへば最も著しく御歌所派を論難した海上胤平を採上げてみよう。彼がこの期の唯一の萬葉主義萬葉調歌人と推す人もあるやうだが、彼の断片的な歌論のどこに彼の外形模倣萬葉調歌のどこに、進歩的なものがあるといへるであらうか。彼が、共に御歌所派の攻撃に骨を折りながら後に與謝野鐵幹等からおいてゆかれたのは何故か、彼も亦古典主義歌人の一人だつたからである。

それなら三十年代の新派和歌の運動はどこから生れてきたか、それは突如として起つたものか、そこにいたるまでにどういふ展開をしてきてゐるか。凡そ、短歌にあつても他の文學一般と同様に、新しいものが突如として生れ出てくるといふことは考へられない。それならそのつながりやをどういふところに見出してゆきうるか。假に私はかういふ線を引いてみたいと思ふ。三十年代初期のところに與謝野鐵幹と正岡子規とを立たせる。鐵幹から禮嚴に線をひく、これは父子である。鐵幹から愚庵に線をひく、愚庵と禮嚴とは友人である。自然鐵幹と愚庵との間にも交渉が生じてくる。次に、正岡子規から愚庵に線を引く。子規と愚庵とは短歌では先づ準

師弟である。子規から丸山作樂に線をひく、新聞日本の先輩である。子規から福本日南に線をひく、やはり新聞日本の先輩である。日南と鐵幹との間にも線をひく。日南は當時の種々な學者詩人と交つてゐるが、ここでは必要の線を最少限度に引いておくことにする。最後に鐵幹と子規との間に線をひく、もつともこれはあとではお互に反撥することになるのだが。

さて新派和歌の大立物鐵幹とそれに子規を脇に立たせておいて、二人から引いてゐる線をたどると、禮嚴作樂愚庵日南に行きあたる。これらの人々のうち禮嚴と作樂とは維新前からその後にわたつて國事に奔走した人達である。愚庵は維新の騒動に行方の知れなくなつた父母や妹を探すに一生を費し、ついに探しえずに終つた人、日南またしきりに圖南を策した國士的人物である。この四人は、誰一人いはゆる歌人とよばれる人ではない。この人々の作品を私は現實主義的萬葉調と稱してゐる。現實主義的萬葉調といふと後年のアララギのことをさうよぶ人もあるやうだが、別にアララギだけをよぶものと限られた名稱ではないのである。明治前半期のいはゆる御歌所派も民間派も一樣に古典主義短歌に遊んでゐた時に、かうした現實主義の方向をとつた人達が、殆んど歌人として認められなかつたことは當然であらう。また彼等も

歌人と呼ばれることはよろこばなかつたに相違ない。彼等には歌は生活の手段であつたり目的であつたりしたのではなくて、生活は生活として別にあつて、歌はそこから生れてくるものであつただから。それでも作樂の歌集磐屋集は續歌學全書に加へられてゐるし、傳記とともに死後間もなく版にもなつてゐる。また愚庵のは後に全集が出てゐる。禮殿はその作る所の歌三萬餘とあつて、この四人のうちでも一番歌人らしい。晩年はややさうした生活に近づいてゐる。しかし維新の時に勤王軍のために北陸道に行つたり、維新後も官につかず民間にあつて文字通り文明開化の魁になつたり、破産したりといふ實生活を通つて來てゐる。それらによつてうかゞふに、とにかくこの人々は一樣に現實生活からの直接感情を表現してゐた。またそのことが、必然的にこの人々を古今調にゆかせないで萬葉調にゆかせたのもある。そこまでは一致する。さらにいづれも進歩的であり反官僚的であり、國家主義的である。細かにいへば愚庵の時の政府を耶喻せる歌や、日南のジャバ、スマトラの歌や、作樂の忠君愛國の歌等々が、それぞれ共通ななかに多少づつ異なる色彩を示してゐる。そして、そこから鐵幹の朝鮮征伐へ線がひかれてくる。即ちこの人たちのいはゆる國家主義は前時代的のそれである。自由民權論を潜

つてゐない、封建主義的のそれである。太閤秀吉の朝鮮征伐と相近いのである。太刀佩きて虎に打向ふ、虎と劍との朝鮮征伐である、南洋圖南である。そこには維新前の尊王攘夷論が姿をかへて現れてゐるのである。と、ここまでたどつてくるとこの期の現實主義的萬葉調の源流に勤王志士歌集をうかべて眺めることが許されてくるやうな氣がする。ここに紹介しようと思ふ二三の資料はこの勤王志士歌集から引いてゐる線に沿ふものである。

明治短歌史の幕は、十指に餘る勤王志士歌集の梓行によつて開かれる。維新のために、生命をかけてはたらしきつその成る日を見ずして寂しくこの世を去つて行つた、或は去らねばならなかつた人々への追慕の氣持が、そこに明かに反映してゐる。然しながら、そこに吾々は同時に更に寂しい死の相を見のがしてはならない。徳川幕府方の、或は會津藩の或人々の作品である。明治維新は、所詮は、徳川期の一應完成せる日本文化を持ちつづけようとするものとこれを破壊し去らうとするものとの對立である。さういふ二つの階級の力の均衡が保ちきれなくなつたところから生れてきてゐる。當然われわれは勤王志士歌集の裏側に埋れてゐる、或は埋れさせられてゐる、幕府側の人達の歌集を表面に引き出してこれを同列におくといふ工作を、第一

に必要とするのである。が、不幸にしてその方面の資料の少いことはやむをえない。今までに知られてゐるところでは、井上文雄の諷歌新聞、明治元年（慶應四年）四月頃の中外新聞、明治九年の瓦解集位のものである。瓦解集は一名關東邪氣集ともいふ。ここに述べる「さくら山集」は會津を背景とするものの一つである。

2

さくら山集 全

高木盛之輔編 栃木町 三十五年九月十六日

和中。緒言四、序四、本文一三七、傳記三六頁。

山川浩の歌集である。緒言は高木盛之輔の本書編集についての記述、次に山川浩の寫眞、さくら山の寫眞、各一葉、その次の序文は谷干城の作るところの漢文。目次はなく、すぐ本文に入つてゐる。本文の部立ては春・夏・秋・冬・戀・雜の部。最後に山川浩君之傳と題する傳記がある。この傳記は頗る詳密である。山川浩は會津の藩士、文久三年容保公守護職として京師

に在るや命によつて入洛し、京師警固の傍、攘夷の説を主張す。慶應二年外國奉行小出大和守に従ひ佛獨を経て露國に至る。即ち攘夷論の非を悟る。慶應四年正月三日鳥羽伏見の變に際し最後まで大阪城に駐りてその殿の任にあたり、つづいて會津の戦に加はり後防禦總督に挺でられた。會津日光口の戦に於て谷干城に知られ後干城のもとに陸軍裁判所大主理となる。明治六年熊本鎮臺司令長官たりし干城の乞によりて熊本に轉任、陸軍少佐となる。佐賀の變に傷を負ひ休戦となるや閑居。藩閥者の驅使に甘んぜず屢辭職を請うた。十年の騷亂起るや休戦より起ち、西征別働軍參謀として大に努め、重圍の熊本城を救ふ。しかも率先熊本城の圍を破つて城中に入つたことによつて、却つて旅團長山田顯義のために難ぜられて待罪書を出す、兒玉源太郎は當時の熊本城の參謀である。この西南の變に最も奮戦したのは舊會津藩の人々であつた。けだし、偶然ながら十年一劍を磨いた形である。以上は山川浩の前半生である。明治十九年文部大臣森有禮の頼みによつて、高等師範學校長となつて以後の彼は餘に有名である。彼の弟は後の東京帝大總長山川健次郎、妹は大山大將の夫人捨松である。

さくら山集の四季及戀の部は題詠の作が多く、異色あるを見ない。當時の歌壇一般の作品に

ちかいものがある。肺を病んでゐたといふことが、彼を消極的な隠遁者の氣分に居させたのであらうとも考へられるが、「風流を楽しむ」といふやうなものが、まづはりついてゐてそれらの作品をすつかり逃避的なものにしてゐる。さくら山にかかはる私の關心は、専ら、雑の部のうちの一部の、實生活から生れたものにつながる。一部を抄録する。

從軍

從軍行

- 1 旗の手の吹や嵐もみにしみてよろひの袖にさゆる朝しも
戊辰の役敵の屍をみて
- 2 これもまた我爲ならでさらしけんあはれ蓬かもとの屍も
圍を潰して若松城に入たる時女中の勝敗を尋ねければ
取あへす
- 3 よせてこし仇は跡なくちりはてて残るは野への屍なりけり

小出^註光照の戦死をなげきて

- 4 後れつる身こそつられれ死出の山越ば共にと思ひし物を
- 5 わか爲になけくのみかは國の爲世の爲いと惜き君かな
佐賀の役やつかれもいた手を負いと危ふかりしか小川
亮小川隆吉等の助けによりて僅かに圍を出を得て筑後
國をここことさまよひありきて終に久留米の縣にて公
より設けられし病院にきて治療しけるに卯月二十日餘
りには稍々こころよくなりぬやつかれかいたつきのお
こたるにつけて光照か事いと思出られければ
- 6 いたつきのいゆるにつけて思ふかな君か今には残す恨を
- 7 君しあらば浮世の事もみのうさも語り慰む方もこそあれ
わか年頃思ひ立し事も光照か死せしかはともに語らう

友なくいと心細ふ覺えける折

8 かねてよりおもひし事も君なくて今はた誰に語り合さん

病おこたらは都に赴かなんと思ひつゝける折

9 としことにまちつる花もこの春は遅かれと祈るみ圍の神

同じ頃花を見て

10 春風に笑ふ櫻の花みればみのいたつきもわすられにけり

す田の櫻も散りはてぬなといひおこせけるかへり言に

11 行てみんすたの堤のさくら花ちりにし枝の下葉なりとも

愛甲義實の熊本に歸りける折朝鮮の事なといひ出て別

けるとき

12 今茲に手を分つとも君と共にありなれ河は越んとそ思ふ

鹿兒島征討の大令をかしこみて

13 薩摩人みや東の大夫かさけはく太刀のときかにふきが
14 のちの世になかれて高き功しをいまこそたため耳川の水
西南の役に折にふれて

15 歸るにはしかすと鳴は大方の旅路となれやおもひ違へし

懷 舊

明治十五年西京なる大内をかみて

16 九重の一重はかりはのこれともものこらす草は蕃合にけり

述 懷

月あかかりける夜同じ心の友とつとひて過來しかたの
事何くれとなく物語しける折

17 なからへて今宵も月をみつるかなとく消ぬへき露の命を

會津のとの口はらにて

18 矢さけひの聲かとはかりとの口の原松か枝に風渡るなり

會津の東山にて

19 山川の音もいつしか聞なれてもの静かなるさしの高との

○

明治の初めかた薩長の人士に示す

20 夷うつなりやの流鏑いつの世にならさんとする心成らん

註 小田光照會藩士、山川浩の妹操子を娶る。當時佐賀縣大屬たり、これに死す。

以上はさくら山集より抜萃せるものである。(13)(14)當時の會津人士の偽らざる感懐である。(16)からは、維新直前の京師を舞臺として演ぜられた幾多の悲劇と、その守護職たりし會津藩の立場とが情緒的に遠景に浮んでくるであらう。特殊な感慨が暢達な手法によつて極めて自然に表現せられてゐる。(17)(18)(19)は以て彼の作歌技倆を知るにたる作。(20)にいたつて

は辛辣骨を刺すものがある。攘夷は討幕のための方便となり了つて、恬としてまた口にするものなき時にあたり、早く明治維新前に泰西を見て來た彼として、薩長藩閥に向ひかうした皮肉を浴せかけざるをえなかつたのであらう。維新の東征のことを史に記するにあたり、東軍西軍の語を以することを許さなかつた薩長本位の維新史、それが西南の變には忽ち地をかへて所謂官軍賊軍の名を逆に冠せられねばならないことになつた。所詮は前述の如く、ふるい階級と新興階級との對立であつたのである。何故に新興階級が起つてきたか、何がさうさせたか、この二つの階級を如何に分析すべきか。

明治短歌史の後景は、そこから、出發しなければならぬ。私は、しかし、本篇の目的たる新資料の紹介のために次へ進むことにしたい。

さくら山集所収の歌數は、春二〇四、夏一〇〇、秋一三八、冬五一、戀二二、雜五〇九、計一〇二三首、外に長歌三篇。但し長歌はいはゆる唱歌である。文學上からは問題とする價値は認められない。編輯者高木盛之輔といふ人について知るところがない。ただ本書によつて共に西南の變に従軍してその部下であつたこと、後長く相交つてゐたこと等がわかるのみである。

古典歌集の所收歌數は、普通春夏秋冬といふ順序であるものが多い。本書は春秋夏冬といふ順序をとつてゐる。傳統短歌が、物のあはれに出發してゐる限り、一年のうちで最も詠みにくいのは、激しい夏の日である。最も詠み易いのは秋から冬である。そこに、數の上にあはれたこの歌集の積極性がある。ただ、作者は見られる如く、時に藩閥に背かうとし、時にこれと妥協したといふやうな生活を送つてきてゐる。そこからこの歌集の微溫性が生れてくる。短歌史上よりいへば、本書はさう高い價値は與へない。が、前述の如く明治初期に於ける數の少い裏側の歌集として見る時、また逸すべからざるものといへよう。

3

記念集 第一輯

高田義甫編 大津湖南博交社 明治十三年七月

和尙、題字一、序三、緒言二、本文三十五、跋二丁。定價〇・二〇

題字は三品朝彦親王、序は山縣有朋、緒言「十九年王師戡定西南之賊、越十月、我聯隊還

于大津、將校以下死傷九百餘名、殆當_三全員三分一_二云云」そこで三井寺に一大石碑を建て、これを奠した。その折に各地より寄せられた詩短句を集録したものである。

短歌は井上溫恭以下作者八一、歌數一〇八、長歌は作者一、歌數一。他は漢詩文及び句である。一部をあければ

○

井上 溫恭

1 なきたまは長等の山にとまりて名は萬代にくちせざらまし

林 陸夫

2 後の世に語りつたへんますらをの功しるす三井の碑

大谷 光尊

3 動きなき石にしるして真心をたてし功は世々にくちせじ

田中 光顯

4 そのかみをわすれかたみの石ふみにたかき功を仰かるゝかな

羽根田文明

5 石ふみを見るたひことにおもふ哉こゝろつくしを丈夫のとも

大體こんな風である。その作品にいたつては儀禮的形式的のものであるのは、作歌の動機からいうてもやむをえないであらう。ただ西南の變にからまつてかういふ歌書もあつたといふ程度の興味だけは持ちうる。さういふ歴史的な價値だけは認められていいと思ふ。

維新後の傳統的短歌にやや新しい色彩を添へてゐるのは、歌壇的には、時世の文明開化を詠んだ、いはゆる新題歌である。^註新題歌の發生及意義については、すでに述べたことがあるし、新題歌と、今まで述べて來た歌の流れとの交渉といふやうなことも、一つの題目たりうるのであるが、ここには、明治新派和歌發生の一要因として、前に述べた一線上に、途中からあらはれて、間もなく姿を消していつた新題歌もまたそれ自身一つの歴史的意義を有するといふことだけを述べて、資料の紹介に移ることにする。

新題歌とは維新後の文明開化にともなふ新題を詠んだ歌の意である。歌といへば題詠と考へてゐた頃である。今までにない題だから新題といふ名が生じてきたわけである。新題といふ名稱がいつ頃から用ゐられてゐるかはまだ明にしえない。新題歌が歌集に収録せられてゐるのは明治歌集（九年一月）の第六・七雜之部頃からである。作られ始めたのは明治四年五年頃からと見ていい。歌集に新題といふ名が用ゐられたのは、明治十一年十一月の開化新題歌集からである。これはあとから第二、第三編が出て三冊となつてゐる。上中下とした三巻の後摺本もある。十年九月、西南の變が終つて、人心やうやく落付きかけた頃である。今まで京都で専ら刊行せられてゐる勤王志士歌集が、東京からも梓行せられるやうな機運（皇朝近世詩文歌集、十年十一月）に向ひかけた頃である。それだけでも、時世の推移がはつきり感ぜられるであらう。そんな風で新題歌集は十一年頃から版に附せられるやうになつたのである。

茲に紹介する明治詩文歌集もその一つである。

4

明治詩文歌集

岡村邁 大阪 同盟書樓 明治十一年五月
洋菊半 目次七 本文八九頁 定價〇・二〇

目次は、文十五題（題輕氣毬圖以下）、詩二十二題（祝復古、風船、讀新聞以下）、歌十九題ある。いづれも新題である。即ち新題の詩文歌集である。歌の部を左記に摘記する。

勸業博覽會

永山退叟

1 さまさまにいとなむ業を劣らじと盡す心の程は見えつつ

懲 役

2 背負こし罪を日毎におろしてそもとの人には返るべらなり

馬 車

下條言志

3 くるまひく駒の蹄の塵たてて雲の中ゆく心ちこそすれ

輕 氣 毬

横山由清

4 人をさへのせて遙かに天とぶや輕き氣による術ぞあやしき

瓦 斯 燈

朝岡直子

5 闇夜ゆくしるべまがはず成にける都大路のともしびのかず

傳 信 機

三浦直子

6 海山をへだてし道もひく糸のただ一筋にかよふ音信

民 權

大井長平

7 時しあれば雲の上にも立いでぬ大木のもとにおほはれしみの

賀 易

福羽美靜

8 なりなりて餘るをよそに賣てこそ國の富をもうむべかりけれ

閣 龍

高木幹臣

9 いつよりか世に成出て海中に此の陸土はわれをまちけん

地球

畑田真幹

10 御柱をめぐりし神の跡とめて今もよどまぬ是の國土

時儀

11 小車の時ををざして違はぬに鶏の空音そらねもかひなかるべし

學校

12 學ぶべき道ある御代に誰しかもいらで過ぐらん人のあるべき

共和

砂川雄健

13 人やりに高き卑しきさだめなき昨日の冠けふのわらくつ

旭旗

14 高照らすみよのしるしと旗の手にくまなく靡く朝日かけかな

廢刀

15 名にしをふ秋の霜とや消はてんさやかにも世につかはれぬみは

國事犯

16 國の爲盡す心もあだなれや道のただちを踏し終へずは

新聞紙

増山靈堂

17 曇なきみよの光もます鏡日毎にうつす人のおもかけ

風船

18 天の原風の湊を船出してくもの潮路にこぎも入るかな

帽笠

小川重波

19 大路ゆく人のかぎりは君がよのふかき恵を冠らぬもなし

新題歌といふよりも、新題解題歌である。新題の事物を説明してゐる。これは一つは新題に扱はれてゐる事物がまだ世人に十分に知られてゐず、親しまれてゐなかつたために、先づそれを

説明する氣持が先に立つたためである。當時の事情としてはやむをえなかつたのであらう。それにしても、説明から詩は生れて來ない。新題歌其物は全體として、文學的に高い價値は認められないものである。本書の新題歌は、新題歌としては不出來の方ではない。相當選んだものであつたことは想像できる。一首一首についての記述は略するが、いづれも明治十年頃の世相を傳へてゐる點に興味がある。しかし、本書の價値はさういふところにはかりあるのでなく、新題歌集として、恐らく本書が明治短歌史上嚆矢のものではなからうかといふ點にあるのである。

註 明治新題歌の發生及意義（國語と國文學、昭和八年五月號）

明治好音集に就いて

明治の開化新題歌を輯めたものとしては、從來大久保忠保の開化新題歌集（廿二年）及び椎ヶ本吟社の明治歌集第一編第七冊雜之部（九年）等が知られてゐる。

茲に述べようとする明治好音集（三八年）は、以上の何れよりも早く刊行せられ、然も新題歌を輯録してゐる點に於て、開化新題歌集に一資料を加へたものといへる。全一冊、岡部啓五郎輯、玉巖堂發兌、和中、三十六丁。例言に、維新以降開化に係る歌と詩とを撰抄して、これを上梓せよと慫慂する者あり云々、とあるによつて、その大體が知れよう。即ち、漢詩及和歌（短歌）を輯めてあること、明治詩文集と同様である。かういふ新題の漢詩については、評論（二月號）で柳田泉氏が書いてをられるし、一月の明治文學談話會の席上に於ても、同様のお話を聞くことを得たが、明治初期の、本書の如き體裁のものは殆んど例外なく漢詩と和歌とを並列させて扱つてゐるやうである。幕末志士の歌集にも同様の傾向がある。といふよりも、志士歌集

あたりから系統をひいてゐる傾向といふ方が正しいのかも知れないが、とにかく、この明治好音集は和歌のみでなく、漢詩の側からも新題詩の資料として見ることが出来るやうである。分量からいへばむしろ漢詩の方が多いのである。和歌の方の新題としては、

公使参朝 伯徳璋 那勃列翁 畢馬屈 横濱蒸車 富岡製糸場 歸農 歸商 天長節 電信
 機 蒸汽車 小學校 國立銀行 瓦斯燈 徴兵 郵便 病院 石腦油 洋學生 肉店 休暇
 日 新聞社

等がある。以て大體を推しうると思ふ。

明治前半期の京阪・中央歌壇

1

明治十年夏西南のみだれ起り、聖駕西京に駐りおはしました程彼地在住の華族のうへにつきて何くれと御心をそそがせ給ふことありけるうち、歌は各家祖先よりして世々修しこし道なるに維新の後これの研究を怠り斯道頓におとろへたるはいとくちをしきこと也、いまより後は月々の歌會をまうけ詠進せしめよと時の右大臣岩倉公に御沙汰があつた(巽西花の序文高)。實に維新後の京都に於ける堂上派は委微たるもので、わづかに清水谷公正、山本實政の二人を數へるのみであつた。これは一つは有力な華族が多く東上してしまつたためもあるが、その人のなかつたのも事實である。冷泉爲紀の如き地下の岡本經春の門に學ぶといふ有りさまであつた。桂

園派には香川景恒の門に毘尼薩臺巖、清水蓮成が居り、竹内享壽の門に遠藤千胤、渡忠秋の門に尾崎実夫、中西石陰、細辻昌雄等がゐた。臺巖蓮成は僧侶である。神官としては、賀茂神社の社家賀茂季鷹の門に岡本經春があり、經春の子に經邦がゐた。季鷹は千蔭に學んだ。即ち縣門江戸派の流を引いてゐる。稻荷神社の神官近藤芳介は芳樹の養子、宇田淵とともに重く推されてゐた。師岡節齋は松尾神社の神官である。京都歌壇と關係深かつた矢部玄道も神主、角田忠行は遠く熱田神官の官司、この三人は勤王實行家である。岡本經春は下鴨神社の官司、歌集うすかすみ(明治二年三月)は富士百首ともいふ。詠史百首(三十九年)は經邦の發行にかかる。その詠草には佳作が少くない。經春の門には子の經邦、水菴盤樟野村敷明等が出てゐる。經邦は豊國神社の禰宜、盤樟は平野神社の禰宜である。盤樟は交際家で新聞の撰等にも携つてゐたが歌はそれほどではなかつた。季鷹門の松田直兄の子一直も亦歌才があつた。なほ縣門には鈴屋派に猪熊夏樹、藤原重浪がある。夏樹の瑞枝舍百首(天延元年)は猪熊淺麻呂氏の刊行にかゝる。藤原重浪は近藤芳介にも學んだ。芳介の追悼歌集は雪のしらゆふ(三十三)といふ。近藤久敬の跋文を添へて刊行せられてゐる。富士谷派には赤松祐以がゐた。其他に拜郷蓮因、園美蔭等があつて、月々に月次會

を開き互に相往來してゐた。華族の歌會の向陽會の外に山階宮見親王の歌會があつて、この歌會に招かれるものは歌人として認められたものに限られてゐた様である。向陽會に對しては互評會があつて、歌壇共通の會となつてゐた。互評會の撰者は初め近藤芳介、次に黒田清綱、本居豊穎があつてゐた、見親王の追悼歌集を竹のしづく(四十六)といふ。廣田常善の編にかゝる。歌人に神官の多いことは前にも述べたが、秋山光條もこの頃八坂神社の官司として京都にゐた。なほ神官の歌人を雪のしらゆふから拾つてみると、先づ村山松根(松原神社)を始め大貫眞浦(稻荷神社)、吉見資胤(北野官司)、平野素壽(護王神社)、篠田時化雄(神宮奉贊會)、半井眞澄(護王神社)、岡本定清(上賀茂神社)、鴨脚秀文(下鴨神社)、藤木保受(丹波出雲神社)等々枚擧に暇がない。桂園派の中西石陰、尾崎実夫も神官であつた。女流には蓮月、式部を始め、蓮月門の上田重子、三輪貞信、村岡矩子、花輪よし子、大屋久子等がゐた。上田重子は祇園の女。後に長澤伴雄の妻となつた。家集を稻葉の波といふ。三輪貞信の家集蓬がつゆ二冊(二十七年)は本人著述にかゝる。正風、芳介の序、谷勤の跋文がある。大屋久子の家集瑞垣集(天正十二年)は多治子の編にかゝる。花輪よし子等とともに光風會といふ女流歌人の會を作り牛耳を執つてゐた。

光風會の撰者は須川信行、信行歿後は大屋よし子がこれに代つて撰にあつた。

向陽會の撰集に菊廼下葉(五十九年)がある。小出祭の編にかかる。祭はその才がわざはひして東京から京都へ左遷せられ、向陽會師範となつたのである。後に須川信行が代つた。向陽會の世話役は平田系の宇田淵。

いささか雑然となつたやうだが、明治初期の京都歌壇の大勢は大凡以上の如くであつた。廿年頃の京都歌壇に就て

田中美風氏は

「當時私の知つてゐる人々の中から大家連の名をあけると我が松樹園宗匠の外近藤芳介、拜郷蓮茵、遠藤千胤、赤松祐以、中西石陰、細辻昌雄、毘尼薩臺巖、尾崎実夫、三輪貞信等の宗匠が健在であつた」(寶相花昭和八年五月號)

と「明治二十年頃の京都歌壇の記憶」に於て述べてをられる。松樹園宗匠とは園美蔭のこと。美風氏はその門下の逸足である。「千胤昌雄は中京邊の大商家の隠居」であり、美蔭はもと「寺侍か公家の侍」であつたといふ。當時は「短歌を詠むことは老人に限つた仕事で、少年が作歌

に没頭するが如きは以ての外のヒガゴトで、病人ならいざ知らず、壯健な人間のする事ではない」といふ世の中であつた。なほ「冷泉爲紀、須川信行、藤原重浪の三氏は前述の人々より少し後の大家」であつたと述べてをられる。田中氏が華族の向陽會にふれてゐないのは、接觸の機がなかつたためであらう。次に太陽五ノ十(明治三十一年五月)の彙報欄の京都和歌壇の五派の項を引用する。

「京都和歌壇の五派とでもいふべきか。第一歌人の多きは「てにをは」より寧ろ外面の優美を主とせる香川景樹派にて、毘尼薩台巖老師、尾崎実夫、須川信行、細辻昌雄、中西石陰の五人△本居派の「てにをは」語學古學故實等を講究せるものは現時京都美術工藝學校和語囀托教師藤原重浪、猪熊夏樹の二大人△定家流の流をくむ冷泉爲紀大人△萬葉杯を主として故實を專にせる富士谷(成章)派には赤板祐以大人△中立或は眞淵派と稱せる部分には宇田淵大人何れも社中ありて現時の錚々たるものなりといふ。」

近藤芳介が數へられてゐないのは前年に物故したからである。明治前半期の京都歌人を語るに與謝野禮嚴、愚庵のことに觸れなかつたのは、この二人は現實派歌人として別項に述べよう

と思ふからである。

次に大阪の歌壇には中村良臣の子良顯、有賀長隣、佐久間果園、眞鍋豊平、佐々木春夫等がゐた。有賀長隣は長伯の後年基の子、晩年には東京に移つた。佐々木春夫は大阪玉造の里正、勤王の志厚く十津川の擧に軍資を供し、天誅組破るるや累身に及ばんとしてわづかに逃るゝを得たといふ。和歌は夏目莖滿、加納諸平に學んだ。眞鍋豊平は長歌を以て名があつた。水穂舎詠草(十二年)は木活字本である。良顯の門からは藤村叡雲、彈琴緒の二人が出で、以上の人々にひきついで大阪歌壇の中堅をなしてゐた。

河内國に敷田年治がある。年治は明治前半期に於ける京阪地方での國學者であつた。その和歌は喪明録、荒海日記等の紀行文中に見ることが出来る。この二書は桃垣葉(昭和七年一月)の下巻に收めてある。田所千秋は神戸生田神社の官司。大鏡文雄は隆正門。明石岩屋神社の社司。姫路の砂川雄健には明治響洋集の編著がある。女流には叡雲門の菊地竹子、大阪朝日の記者となつた山田淳子等がゐる。

2

明治現存三十六歌撰(昭和十年)東京十四大家集(明治十六年)明治現存續三十六歌撰(明治十八年)等はすでにガトナムの短歌講座に紹介してある。花雨吟社の筆の花第一號(昭和二十一年一月)所載の廣告文を左に引用する。

花雨吟社	東京神田中猿樂町十七	水原史郎(水原未瑛子)
翠園	牛込區神樂町二ノ十七	鈴木重嶺
竹柏園	神田小州町一	佐々木弘綱
蓬園	日本橋磯殼町二ノ一五	網野延平
松園	四谷仲町三ノ八	加藤安彦
鶴氏	本所區松井町一ノ一九	鶴久子
萩の舎	小石川區水道町十四	中島歌子
不二園	下谷區練堀町十	大野定子

明治前半期の京阪・中央歌壇

河村 女校 麻布芝森元町二ノ二三 河村 重子
服 部 氏 赤坂氷川町十八 服 部 磯子
柳 園 麻布區永坂町一 伊 東 祐命

鈴木重嶺は國學を村山素行に學ぶ。詞林の選者。詞林は重嶺の歿後心の花に合併された。網野延平、屋代柳魚等は重嶺に歌を問うたことがある。

三田葆光は三田花朝尼の養子、花朝尼は景樹門の歌人であるが、葆光は村田春海を景慕してゐたといふことである。櫛紅葉七冊(年八月)は三田信の刊行にかかる。

心の花第七號(年八月)には歌會の寂寞と題して、

今東京にて重なる人の歌會を月々行ひをるものをあぐれば、宮内省派の樂風會を始とし、鈴木重嶺氏の翠園歌會、橋道守氏の椎本吟社、佐々木信綱氏の竹柏歌會、諏訪子の年廻舎歌會、小杉楹邨氏の杉園の歌會、加藤安彦氏の歌會、中島歌子氏の歌會、鶴久子氏の歌會、江刺恒久氏の歌會、松の門三艸子刀自の歌會、黒田子爵一派の歌會等にしてなかく、曠々はし。さるにても重もに歌の製造にのみ熱心にして眞正の情を養ひ歌を詠まんとする人少なしといふ

ものあるは如何にぞや云々

とある。

同じ桂園派であつても必ずしも一致してゐるわけではなかつた。その間の消息に就いては、

佐々木信綱氏の「一葉女史と當時の歌壇の回顧」がある。(心の花二十六ノ十二)

新しい歌の未だ生れなかつた明治二十年ごろの歌入のおもなる人としては高崎正風、黒田清綱、間島冬道、小出榮、伊東祐命、松波資之、海上胤平、鈴木重嶺、橋道守、わが先考弘綱女流では税所敦子、小池道子、鶴久子、中島歌子、大野定子、松の門三艸子の數氏をかぞへ得る。上記のうち高崎、間島、小出、伊東四氏はいはゆる御歌所派で、税所、小池の二氏は宮廷の女歌人であつた。黒田氏は高崎氏と郷國及歌の師を同うしたが、歌風其他に於て相容れぬところがあつて、別に瀧園社を興した。松波氏は、同じく桂園の流を汲みつつ、隱遁的の立場をとり、海上氏はひたすら御歌所を攻撃して一派をなしてをつた。民間歌人としては、自餘の人があつた。鈴木氏は幕末の佐渡奉行をつとめた人、翠園と號した。橋氏は守部の孫で、祖父の遺稿の刊行につとめた人、鶴氏は江戸の歌人蜂谷光世の未亡人、大野松の門二氏は井上

文雄の門人、中島氏は伊東氏と同じく加藤千浪の門人であつた。これらの民間歌人は、毎月例會を催し、一月の發會十二月の納會には互に往來した。……中島氏は、小石川安藤坂が今のやうに道幅が廣くならなかつた頃、坂をのほりきらうとする右側に門があつて、毎月九日の歌會の日には、數臺の車が門前に待つてをつた。坐敷の床には、眞淵翁の考案になつた人鷹の畫像がよくかかつてをつた。はじめ伊東氏、同氏の歿後には、小出氏が競點の點者や歌合の判者をし時としては、三田葆光、加藤安彦、梅村宣雄氏などが合點した。披講は加藤氏が美しい聲で講じた。……當時女歌人中では中島、鶴の二氏が並べ稱せられて居たが鶴氏の會には、いはゆる下町のよい人々が多く、中島氏の會には、貴族もしくは中流以上の士女が多かつた。

民間に重きをなしたものは鈴木重嶺、つゞいて佐々木弘綱、瀧園黒田清綱をあけるべきであらう。また橋守部の子の冬照及其の妻東世子、子の道守は家を椎本吟社と稱し、守部以來の傳統を守つてゐた。早く明治歌集(明治十年)を續刊し、つゞいて詠進歌集をも續刊した。三十二年には明治歌集は第九編、詠進歌集は第十三編に及んでゐる。その歌作は典型的宗匠風であり、非

進歩的であつたので、積極的には何等の意義をも持たなかつた。椎ヶ本吟社は事大主義で新年勅題詠進歌の集を作つたりしてゐるが、徹底的に御歌所に批判を加へ、むしろ反抗的態度をとつたものに椎園海上胤平がある。

海上胤平は諸平門。萬葉調論者として一部より認められてゐるが、彼の萬葉調は五七調といふことに全部かぎつてゐる形式論に過ぎなかつた。彼に果して萬葉調がわかつてゐたかどうかは疑問である。形式主義である故に古典主義短歌の破壊には役立つたが、新しい短歌の建設には參加することはできなかつた。彼の東京十四大家評論は明治歌評の嚆矢といふべきであらう。海上瀧子は胤平の養女である。

當時歌が貴族神主僧侶婦女子の専用物の如く考へられてゐたことについては、小中村義象も和歌の精神(歌學第四號二)に於て左の如く述べてゐる。

歌は長袖即公卿のよむものなりとは、舊幕時代に於けるこの道の思想なりき、故に野にあつて歌をよむものを野公卿とも嘲りいふものあるに至れり。大宰純が詩に熱心なりしも、歌はいかによみたりとて、公卿の専有のやうになれば、とても及ばずとてのことなりきといへり。

この思想は封建政治の衰滅と共に消えゆきしが如くなれども、今にいたるまで猶たまたまのこれり、さるは書生の歌よむは少くして貴族の（ことに公家華族）あたりには普通の物のやうに行はれ居るにても知るべし。そもく歌は萬物皆諳ふものなるを一派の貴族の物の様におもへるは甚非なり。凡て事は青年書生より起るものなり。さるをただ貴きあたりにのみ行はしめて普通に及ばざらしむるはこの道の衰頹の非なり。かかる念は一日も早く避けざるべからず。

鐵幹の書生調は出づべくして出たのである。中央の歌壇に對して地方の歌壇をあぐべきであるが、地方のうち京都についてはすでに述べた。その京都歌壇にしても時代の中央集權の影響は強くあらはれてゐる。地方の歌壇も明治十年頃までを境として同様に中央に統卒せられる傾向にあつた。地方の重なる歌人に就いてはなほ言ひ残したのもも少くない。そのうちでも下總の神山魚貫、三河の加藤公阿、美濃の大久保忠和、弘前の下澤保躬等はそれぞれいい仕事をのこしてゐるのである。今は省略に従ふ。

御歌所と藩閥

1

維新の王政復古に參與した公卿にして、明治以後和歌の制作を残したものに、三條西季知、三條實美、岩倉具視、東久世通禧等がある。歌人としては封建政治の崩壊に向つて専ら努めた薩州藩に香川景樹門下の高足八田知紀がある。知紀はひとり鹿兒島藩のみならずその文名九州一圓を風靡してゐた。高崎正風はその直系である。長州藩の庇護をうけてゐたものに近藤芳樹があつた。舊大名中伊豫宇和島の藩主伊達宗城肥前平戸の藩主松浦詮等はみづから歌を作り御歌所にも關係してゐた。この二人の庇護をうけたのは鈴木重胤である。舊大名公卿中には外にも歌を詠み制作を残してゐるものがある。大名としては長州の毛利元徳、加賀の前田利熨及利嗣、信州諏訪の諏訪忠元、阿波の蜂須賀茂韶の如きそれである。渡忠秋は三條西季知の知遇を

うけてゐるが元來は桂園の出であつた。かくの如く歌人にして舊公卿の保護をうけ或は藩閥を背景としたものは皆社會的勢力を得たが、しからざるものは多く實力の割に不遇に終つた。この傾向は井上文雄の筆禍事件によつても知られる。

明治初年の御歌所は堂上派が中心をなしてゐた。九年高崎正風、近藤芳樹が御歌所に入り、十三年三條西季知、近藤芳樹が歿した。つづいて十四年に渡忠秋が歿した。この九年から十四年にかけて、御歌所の中心が堂上派より桂園派に移る過渡時代であつた。高崎正風は若き頃國士を以てみづから任じ、歌人たることを潔しとしなかつた。その初めて、明治帝の御製を拜見したのは明治十年聖上京都より御還幸途次遠州灘航行の船中に於てであつた。還幸後は從來御製を拜してゐた三條西季知と双方に拜見を仰付かることになつた。正風は「從來季知が御製を拜見してゐたのであるから、それを出し抜くやうでは困る」と思つてゐたのである。がその後は主に正風が拜見を仰付かるやうになつた。官廷内にあつて間接に正風を援けたものと同じく知紀門下の才媛税所敦子がゐた。黒田清綱等も外部から直接間接彼を支持してゐた。薩州の勢威はひとり府中のみならず宮中にも及んでゐたといへる。明治十一年正風始めて點者となつ

た。十二年からは預選歌の御前披講が行はれるやうになつた。このことは御歌所歌人に非常な權威と勢力とを賦與した。當時の歌人はまだ前時代的な事大思想にとらはれてゐたのである。たとへば池袋清風の如き新しき學問をした人ですら明治勅撰歌集を夢みてゐた。況んや税所敦子の如きは正風に勅選集の御沙汰を奏請せんことをすすめてさへゐる。一般がさうした情勢にあつたのだから預選歌に入選するといふことは苟も歌を作る人にとつては一代の光榮であつたのだ。預選歌は點者が寄人と協議して決定する。ここに御歌所歌人による一つの團體的集合が絶大の威望を持つにいたつた。その中心はいふまでもなく高崎正風であつた。小出祭が文學御用掛雇となつたのも、三條西季知の斡旋によるとはいへ彼を三條西季知に推舉したのは正風であつた。伊東祐命は小出祭が正風に推薦した人である。十四年には正風が初めて題者點者を兼ねた。爾後十九年まで、題者は時に福羽美靜と交代したが多く正風が勤めてゐる。點者はいつも兼ねてゐた。かくて、十年代の御歌所はその初頭に於て堂上閥衰頹して薩州閥が漸次勢力をかためていつた。即ち知紀門下の桂園派がその勢力を扶植した時代であつた。

明治二十年以後は、高崎正風が題者點者を占めて明治末年にその死に至るまで及んだ。この

二十年代は正風を中心とする桂園派歌人が御歌所内に絶體的な勢力を得た時代である。御歌所派の歌風は二十年後半期に於て略完成の域に達し、その社會的勢力は絶頂にのほつたものと見ることが出来る。しからば御歌所歌風とはどんなものであつたらうか。

2

御歌所派といふ名稱の内容は不安定である。果して御歌所派の歌人が一派を形成するだけの短歌に對する理想を持つてゐたらうか。彼等は御歌所を中心として集合した漠然たる存在に過ぎなかつた。強ひて言へばむしろ桂園派歌風の連続であつた。明治十年頃までの御歌所は題者より講頌まで概ね堂上派の色彩を帯びてゐた。が、堂上派といへども前時代に桂園派の色彩を濃くうけてゐたのである。その堂上派も薩州閩を背景とする桂園派に壓迫され勝ちであつた。桂園派が御歌所に根を下したについて先づ第一に擧ぐべきは八田知紀の力である。知紀は桂園門下のうちでは十哲に入らぬ程度の詠手にしか過ぎなかつた。作歌の技倆に於ては木下幸文などとは格段の差がある。然しながら薩州藩の権力の増大するにつれて彼の勢力も自然伸びて行

つた。明治三年十月彼は皇學所御用掛を命ぜられた。維新直後學問の士の少なかつた爲もあつた。四年十一月には大嘗祭悠紀方風俗歌二首の詠進を仰せ付けられた。翌五年四月歌道御用掛を命ぜられ、在職一年餘にして六年九月二日に歿した。知紀の御歌掛在職はかくの如く短かかつたけれども、その間に桂園派の基礎は根強く築かれたのである。三條西季知の知遇をうけて七年御用掛に入つた渡忠秋も桂園派の出であつた。八年には高崎正風の推した税所敦子が東久世通禧の手によつて權掌侍として官中に入り文學の御用をつとめることになつた。敦子は知紀門下の高弟であり正風とは早くより親交があつた。九年には正風が歌道御用掛を命ぜられた。正風は深く、明治帝の御信任を得てゐた。十一年召歌に入つた村山松根、十二年預選歌に入つた松波資之、十九年寄人となつた間島冬道等は知紀と同じく桂園派の歌人である。十一年正風の推舉によつて御歌所に入つた小出繁は江戸派の出であるが江戸派の俤はない。十二年預選歌に入つた加部嚴夫、十三年の預選歌に入つた伊東祐命、十六年預選歌に入つた香川景敏、二十三年預選歌に入つた小池道子は正風の直系と見ることが出来る。小池道子は正風に學び官中に仕へて掌侍となつた人である。二十三年御歌所に入つた大口鯛二も元來は江戸派であるが、

桂園の歌風に近付いて行つた。二十三年預選歌に入つた須川信行、四十二年に預選歌に入つた外山且正の二人は小出繁の門下である。三十五年の奉行植松有經、三十六年大口鯛二、三十七年千葉胤明、三十九年鎌田正夫長谷信成、四十年宮地（加部）殿夫、四十二年須川信行等々に到つて御歌所は正風直系の士によつてかためられて行つた。この間鈴舎派の近藤芳樹、福羽美靜、小杉楹邨及び黒川眞頼等或は參候となり或は寄人となつたが、一團として努力を固めてゐた桂園派に兎角壓倒され勝ちにあり、歌風の上に於ても何等特色なく徒に桂園派に追隨するに過ぎなかつた。

二十年後半期に至つて御歌所歌風は完成の域に達した。完成は同時に行詰りを意味する。この頃から同派の一部はしきりに俗語漢語を用ひて歌境の開拓をはからうとつとめ始めた。明治三十年には鈴舎派の本居豊穎及び阪正臣、中村秋香等の新人が寄人となつた。これは御歌所の歌風に新味を加へんとする爲ではなかつたらうか。當時中村秋香は佐々木信綱と共に新しい歌をつくる人として好評があつた。彼は新語を歌に取入れてこれを巧に驅使してゐる。平明にして暢達な手法である。併しその類型的な作歌は御歌所短歌の歌風を革新するまでには到らな

かつた。斯くの如く江戸派鈴舎派等々の歌人も一度御歌所に入るや桂園派に對して或は不即不離の態度をとり、或は單身の境地にあるなどして、遂に特色ある御歌所歌風を形成するには到らなかつた。御歌所派なるものを一步深く觀察する時は、以上の諸派が混沌たる状態に於て僅に均衡を保つてゐたものと思はれぬ。歌壇の權威であるべき筈の御歌所派は遂に明治の新时代をあらはすに足る確固たる歌風を樹立し得なかつた。

四十年に井上通泰が御歌所に入ることになつた。これは再び、御歌所の歌風を一新せんとする爲であつたと考へられる。井上通泰は常盤會によつて明治時代に相當する歌調、所謂明治調を制定せんとしてゐた人である。井上通泰の御歌所入りは、山縣有朋の斡旋にもよるが、實は明治帝がかねて通泰の新聞日本に連載した城南莊歌話を叢覽してをられたところより、明治帝の思召によつたのであつた。通泰は始め桂園風の歌を作つてゐたが、次第に古今調の孱弱な格調に嫌らなくなり、後ひそかに萬葉調の剛健さを宗とするやうになつた。彼の歌風は雄渾剛健をねらつて未だ到らざるものといひ得る。即ち彼を御歌所に入れたといふことは、御歌所派の歌風を萬葉調に導かんとする豫期があつたのではなかつたらうかと想像される。もしさう考へる

ことが思すぎであるなら、少くとも型に墮した御歌所歌風の上に何等かの新味を創り出すべく一部から豫期せられたためとはいへよう。しかしながら彼へのこの豫期も遂にみたされずに終つた。

御歌所派の歌風は淡雅にして平明ではあつたが、眞淵派の蒼古雄勁を缺き、ともすれば彫蟲の末技に墮し易く、談理的にして巧緻に失した歌想と平板な格調とは、觀念的非現實的な桂園派歌風を一步も出でてゐない。御歌所派即桂園派といはれる所以である。それは遂に昨日の和歌でしかありえなかつた。いはば封建思想の上に咲きのこつた寂しい晩花であるにすぎない。

長歌改良論と弘綱の書信

佐佐木弘綱の長歌改良論は、萩野由之の小言（和歌改良論）とともに、明治和歌史上に於て看過すべからざるものであつて、雑誌筆の花第九集（九二）に發表せられてゐる。従來この長歌改良論が一卷として刊行せられてゐるものの如き記述が尠くない。日本文學大辭典の佐佐木弘綱の項にも、著書に○長歌改良論一卷、とある。しかし寫本としてならとにかく板に附せられたことはないやうである。

或は筆者の見聞の狭いせいかも知れないが、とにかく、今までに見たものとしては、筆の花第九集のものと、海上胤平の長歌改良論辨駁（五三）のうち本文全部が引用せられてゐるものとこの長歌改良論辨駁が筆の花第十五集（三三）より第十九集（七三）までに分載せられてゐるものうちにあるのとだけである。

長歌改良論は、歌人や國學者の間には相當の反響を起したが、由之の和歌改良論が與へた程の影響はなかつたやうだ。さう長くもないので、次に筆の花第九集よりその全文を紹介する。

世にありとあらゆる有情非情の物、すべて聲あるものなり。されど氣に感じ物に觸ざれば聲を發せず、たとへば、鳥獸聲あれども、季に感ぜざれば鳴かず、草木音あれども、風に觸ざれば音をたてず、金石聲あれども打たたかざれば音なし。絲竹聲あれども、彈人もなく吹人もなければ、音なきが如し。そが中に、人は萬物の長にて、殊に聲多き物なれば、黙して心を鎮むる時は聲出ず。され共、人は鳥獸抔よりは、物に感じ安く觸安ければ、尤も聲多き物也。其出る聲を言葉といふ。其言葉に、句と調といふ事あり。

句とは聲をつらねて、ひとつの調となりたるをも、又調にてにをはのそはりて、三言四言五言六言七言などなりたるをもいふ。かく上古は、句の文字數さまざまなりしかど、大方は、五言と七言の句となれり。調とは、聲ととのふをいふ。是を漢語にては、調子といへり。此調子あはぬ時は、管絃は勿論、人の調も更に感なく、意も通ぜぬものなり。されば、聲はしらべを第一とすべき也。其調は天地自然の物にして、更に人作にあらず、しか定まりたるもの

から、其人々の聲によりてみやびたるあり、さとびたるあり、美はしきあり、ききにききあり。又國々によりて、聲のしらべかはり、又世々ふるまゝにしらべのさまうつりもてゆく物なり。

國々にて、横なまりかはることは、萬葉集の十四廿の卷などにて、いちじるしく、代々に移りかはることは、記紀萬葉の頃の歌と、八代集の頃と、十三代集の頃の歌をよみくらべみればしらるゝ也。かくしらべは様々なる中に、ことにすぐれたるが句となれるを、つらねたるを歌といへり。

されば、平語は、調のよしあしを撰ばねば、人感動せざれども、歌の句つゞきよく、調うるはしきは、人はいふも更にて、目に見えぬ鬼神も、あはれとめで給ふ物なり。

さて、句は上にいへるごとく、上代は長短あれども、大方は、五言と七言となる物にて、古くは先五言よりいひはじめて、七言につゞくが、定りなり。

さて、うたは短歌が始めにて、長歌は後なり。そのはじめは、須佐之男命の神詠なり。「八雲たつ出雲八重垣つまごみに、やへがきつくるその八重垣を」かく五七七七七とつゞきて、一首となれり。つぎにながうたのはじめは、八千矛の、かみなり。「八千矛の、神のみことは、

やしま國、つままぎかねて」かく、五七五七とつゞけもてゆきて、一首となるものなり。かくて、奈良朝の頃までは、五七の句續なりしを、桓武天皇、都を平安城へ還させし頃より、萬事往昔のさまは移ろひ、花美になりもてゆきて、歌の調も句もうつりて、五七の調忽七五の花やかなるしらべとなりて、萬葉集にては、なかざりし鳥もきなきぬ、咲かざりし花もさけれどといひしを、古今集にては、長柄の橋のながらへて難波の浦に立浪のとやうに、優美にかはりたり。是、自然の理にて、七五のしらべ當時のにあへる故なりけり。

かくて、あまたの年經にしを、近く元文明和の頃、加茂眞淵翁古學を唱へて、長歌をも古體に擬して作られしより、一夫吠れば萬犬のたとへにひとしく、其門人皆七五の調を、五七に復してよみ出しより、古學ならばぬ人々も短歌は近體にて、長歌は五七なり。しかいふ弘綱も、五七にのみよみ來つるに、つらつら思ふに、七五の調則今の調なるを、短歌は近體にて、長歌のみ復古して、しひて古風によむべきいはれ更になし。

總て、復古に、よき事多けれども、調のみは、自然に代々移り來ぬる物にて、七五の調を、今更五七に、復古せさすべきやうは、なきものなり。しかるに長歌を得よまぬ歌よみは、歌

よみにあらず、貫之躬恒もかた羽者にて、短歌はよめども、長歌は得よますとおほけなくも、口を極めて、人毎にいへる先生あり。こはいかなる非が心ぞ。

抑、吾國上古文字なくして、人々口々に言傳へ來にければ、文字渡りて後も猶同じさまにて、たまたま文かく人も漢文のみ成しかば短歌にて思ふ事、言ひ盡し難き時は長歌を詠みつるに、中古かな文字出來にしより、其便利よくなりて、短歌にて、言盡し難き時は、かな文に書取事と成て、長歌は自然にすたり、慰ものやうになりて、短歌に巧なる人も、長歌は生涯六七首の外は、よまぬやうに成たり、そは家々の集にていちぢるし。

されば貫之躬恒ら、片羽者には決てなし、殊に紀朝臣は、歌はいふべくもあらず。文かく事に、秀られたる事は、古今集序、大井行幸序、土佐日記などにてしるければ、長歌はよまでも、ことかゝねば、心とせられざりしにや。そは朝臣のみならず、紫式部の才にても、長歌は不用の物と思はれしにか、源氏五十四帖に一首も見えず。

さて、短歌のめでたくすぐれたる、又文章のめでたき祝詞宣命物語冊子などには、神も人も感じてさまざまの感應有し事あまた見えたれど、長歌を神も人も感ぜし事上古は知らず、

中古より更に例なし、されば長歌は、只古學者のなぐさみ物にて、古人の口眞似なり。

さるをかの先生は、七五の調の長歌は、よしこのどどいつに同じと、あばきいへれど、よしこのどどいつは、人のうさを晴し、心を慰むる徳あれど、長歌に其徳なきをいかにせむ。されば、今よりは長歌のかはりに、今様をよまむとす。今様は七五の調にては、第一の雅調感深きものにて、かの慈鎮僧正、四季の今様は、今に人々もうたひ、おほやけの唱歌の中にも入て、童子にうたはせ給ふ。感深きを知るべし。

さて今様は、常に七五四の句を作り、事ある時は八句十二句十六句など長く作りて長歌にかへむと思ふは、よしやあしや。

おのれもとより、かな文と今様を好みて、あまた書もし、作りもしつれど、長歌は人のこへばすべなくて作りたるが、七八十首にて、百首には見たず、こは我のみならず、平田篤胤翁、鬼島廣蔭主も、長歌は益なき物に思はれしと見えて、歌集文集はあれども、長歌集は見えず、猶もれたる事は今様考にいふべし。

といふのである。これに對する賛否の大體を列擧してみる。

長歌改良論	佐々木弘綱	筆	の花	(三二・九)
長歌改良論について	佐々木弘綱	讀賣新聞		(三二・一〇)
長歌改良論を讀みて	山田美妙齋	讀賣新聞		(三二・一一・一六)
長歌改良餘論	佐々木弘綱	讀賣新聞		(三二・一二・一八)
福住ぬしに答ふる文	佐々木弘綱	讀賣新聞		(三三・二二・三三)
長歌改良論辨駁	海上胤平	筆	の花	(三三・三三)
長歌改良論辨駁	海上胤平	筆	の花	(三三・四)
○長歌改良論辨駁	海上胤平	玄	同社	(三三・五・一〇)
長歌改良論辨駁	海上胤平	筆	の花	(三三・五)
長歌改良論辨駁辯	佐々木弘綱	讀賣新聞		(三三・六・二七)
長歌改良論辨駁	海上胤平	筆	の花	(三三・六)
長歌改良論辨駁辯	佐々木弘綱	出版月評		(三三・七)
長歌改良論辨駁	海上胤平	筆	の花	(三三・七)

長歌改良論をよみて	石丸忠胤	明治會論叢	(三三・一〇)
長歌改良論を讀みて	石丸忠胤	日本文學	(三三・二〇)
雅調論	福住正兄	日本文學	(三三・二三)
雅調論	福住正兄	大八洲學會雜誌	(三三・二二)
雅調論を駁す	佐々木弘綱	日本之文華	(三三・二)
雅調論を駁す	佐々木弘綱	大八洲學會雜誌	(三三・二二)
長歌改良論同辨 駁及辨駁辨の評	村上正雄	筆の花	(三三・二二)
同	村上正雄	筆の花	(三三・三)
雅調論の駁を駁す	福住正兄	大八洲學會雜誌	(三三・三)
駁雅調論を讀む	田所千秋	大八洲學會雜誌	(三三・三)
再雅調論を駁す	佐々木弘綱	大八洲學會雜誌	(三三・四)
再雅調論を駁す(一)	佐々木弘綱	日本之文華	(三三・四)
再雅調論を駁す(二)	佐々木弘綱	日本之文華	(三三・五)

再雅調論を駁す 佐々木弘綱 大八洲學會雜誌 (三三・五)

雅調論の再駁を駁す 福住正兄 大八洲學會雜誌 (三三・五)

雅調論の再駁を駁す 福住正兄 大八洲學會雜誌 (三三・五)

再雅調論を駁せる文を見て
いささかおもふよしを述ぶ 坂部てる子 大八洲學會雜誌 (三三・六)

雅調論餘論 福住正兄 筆の花 (三三・七)

雅調論餘論 福住まさえ 國文學 (三三・一〇)

このうちで、真正面から反對の矢面に立つたのは、福住正兄である。福住正兄と弘綱とは親交があつたのであるが、このことから遂に交を絶つに到つた。福住正兄には弘綱のどちらかといへば進歩的な見解を理解することができなかつたのである。雜誌筆の花も、その第十五集の長歌改良論辨駁のまへに

左の一篇は元客年十一月寄贈ありたれども修正する廉ありて過般更に寄せられたれば本集より追回分載する事となしたり又第十三集に記載したる福住氏の長歌は其後に寄せられたるを前後に採録したるものなれば其意を諒せられよ且三氏の立言孰是孰非もとより本社を知る

所にあらず擇具眼者の公評に在らんのみ。編者識
といひ、さらに第十九集では

本論爰に完了す頃日佐々木氏が此辨駁に對したる文を讀賣新聞に登載せり讀者諸君若し彼此の論に就て異議あらば高見を録送せられるべし本社採録の勞をとりて定論を世に問はんとす是故らに事を好むにあらず又斯道研窮の一端なればなり。
といひながらも、第十五集の卷末には

佐々木弘綱氏儀事故有之自今本社會友を除名し交通を謝絶
す就ては同氏へ傳達紹介一切授受不致候此段廣告候也

明治二十二年三月二十日

花 雨 吟 社

といふ廣告を載せてゐるところなどを見ると、弘綱に好意を持つてゐたものとは思はれない。

この論争は、かうした感情論になつてしまつたので、學的に展開するに到らなかつたが、そのうちただ山田美妙のものだけはいはゆる當時の新知識らしい進歩的な見解として、一應注目に價するものを持つてゐた。

箱根山あつき湯本に住みながらいかで心のつめたがるらん、と福住正兄のことを憤つてゐた弘綱にとつて、この美妙の理解ある所論がどんなにうれしかつたことであらう。

弘綱は美妙に一書を致してそのよろこびを述べてゐる。宛名は駿河臺鈴木町十六番地山田武太郎殿、差出人は小川町一番地佐々木弘綱十一月九日附、消印は二錢の切手に武藏東京神田二一十一年十一月九日へ便とある。

未得拜眉候へども愈御清逸奉拵賀候抑過日長歌改良論をよみうり新誌上へ出し候處昨日水原三酉歌會にて六日紙上へ愚論の參考を御しるし下され辱候ただし杲に御かきの通字の趣意は大むね古學者の耳遠き詞をつかひ學者顔するをかたはらいたく思ひ且詞のしらは山城遷都後は詞のふりも調も自然うつりて七五の調になりたる事を論したるにて御説のごとく何言にて何の詞のしらべとなるやうの事迄深く論したるには無之候併古學者の頑固の弊をため

んと思ふ心を御賛成下され且御文章いとめでたく御若年と承り實以感心仕態と御禮申上候也
御著述も追々御出来俸信綱毎々拜見感心仕候儀に御座候先は右御禮迄如此御座候 勿々頓首

十一月九日

佐々木弘綱

美妙齋詞兄机下

以て、その頃の情勢をうかがひうるであらう。また明治和歌史上の一資料といふべきである。

新派和歌發生に至るまで

1

従來の明治大正和歌史のうちで評價のくひ違つてゐるものといへば、これを一個人の歌業或は一冊の歌集といふやうな細部にわたつて考察する時は、數限りないこととなる。また評價である以上見る人の立場が異れば自然評價も異つてくる。同じ人が同じ立場から評價したにしても、見る角度を代へて行くにつれて價值もちがつてくる。といふやうなわけで、この問題について何か言はうとすれば種々なる限定を先づ以て提出してかゝらねばならない。が、こゝではさうした限定からは一切解放されて極自由な立場に立つ物言ひを許してもらふこととする。従つて結論が或は獨斷的であることは豫めお断りしておく。

さて、本題に返つて従來の明治大正和歌史に於て、過大或は過少に評價されてゐるものにと

んなものがあるかといふに、過大の評価されてゐる方は先づ措いて、過少に評価されてゐるものについて言へば、第一に明治新派和歌發生以前の歌論がある。次に明治文學に於ける抒情詩文學を代表せる新詩社の短歌があるのである。これらは明治和歌史の流れのうへに於ける大きな事實である。

明治大正和歌史について云々するものは、從來殆んど例外なしに新派和歌發生のところから出發する。しかしその直前に於ける歌論については、全然無視しがちなのである。しかしながら、明治新派舊派和歌の轉換には幾多の歌論が伴つてゐたのである。時代で言へば明治二十年前後より明治三十五年頃に至る間に屬する。これらの歌論に見られる特質は、泰西詩學の影響である。これは明治以前の歌學の持つてゐなかつたところのものであつて、この期の歌論を特色づけてゐる。もちろん和歌といふ傳統文學にあつては新體詩に於ける浪漫主義、小説に於ける自然主義といふやうに著るしい影響が見られる譯ではないが、それにしても、明治大正和歌史は、いへば傳統和歌のうちに如何に泰西的なるものを止揚し來つたかをあとづけるものであるともいへるのであつて、そのためには先づこれらの歌論の持つ史的意義を正當に評價するこ

とが必要となつてくるのである。

それなら、何故これらの歌論が從來顧みられなかつたかといふに、一つは從來の和歌史が多く歌人の手に成つてゐたからである。歌人は實作を重んじる。彼等にあつては歌論は時に無用となる。桎梏とさへなる。これを輕んじるにいたるのは當然である。次にこれらの歌論の大部分が當時の新聞や雑誌に掲載されたまゝであつて、しかもその新聞や雑誌が現在では稀覯に屬してゐて容易に入手し難い。たとひその一部分は手に入れることができても、その主要なるもの全部を通覽することは非常に困難であつて、今日にあつては、殆んど不可能に屬するためである。たとへば與謝野鐵幹の「亡國の音」であるが、これは和歌革新論として代表的なものであつて屢々引用される。しかも、その引用される部分ほどの和歌史にあつても同一の個所であつて、それを追求して行つて見ると、結局全文を當時の二六新報によつて讀んでゐる人は一人もなかつたといふことになるのである。これは一例であるが、その他「亡國の音」の如く有名ならずしてしかも重要なものに至つては推して知るべしである。即ち歌人以外の文學史家のうちには、時にこの期の歌論の重要性に氣づいてゐるものがあつても、史料を手に入れることが

できないためにいい加減ですましておくより外ないのである。したがって正當な評價の生れて來よう筈がなかつたわけである。

しからば、それらの歌論にはどんなものがあるかといふに、それは數十百篇に亘るので、いまここにそれを一々紹介し評論することは到底できないのである。ただ余の「明治大正短歌史料大成」三巻中の第二巻「明治歌論資料集成」のうちには代表的な歌論五十二篇を収録してある。本書は原文の掲載されてゐる新聞雑誌の寫眞五十二枚を中扉に挿入し、できるだけ原文の面影を傳へてあるので、これらの歌論の再検討に役立つことと思ふ。

第二に新詩社に對する評價である。新詩社に對する過少評價は、短歌に於ける態度の相違が最大の原因をなしてゐるのであるが、この場合にも史料を完全に通覽することの困難である點も、その原因の一部をなしてゐる。正岡子規及根岸派については子規全集左千夫全集節全集といふやうに、それぞれ刊行されてゐて、特に子規に就いては全集によつて細大漏らさず知ることができるのである。しかるに「新詩社」及其前驅たる「あさ香社」等については、一々これを當時の直接史料に遡つて見るより外ないのであつて、しかも、それが容易な業ではない。「あ

さ香社」について云々しない明治文學史や明治大正和歌史はないのであるが、あさ香社詠草を調べてゐる人は未だかつて一人もなかつたのである。それは當時の新聞を調べなければならなためであつて、今までの人たちは「あさ香社」に關する評論に際しては、皆落合直文の詠草で間にあはせてゐるのである。また新詩社について言へば「明星」百冊は是非見なければならぬものであるが、これを揃へてゐる圖書館はどこにもない始末でそれなら全集のやうなものがあるかといへば、無いのである。元來新詩社の同人は浪漫主義者通有の性質として、記録等は一體に重んじようとしないうへに、今では散逸したままになつてゐる。新詩社の手許にさへ「明星」は揃つてゐない有様である。ために研究しようにも研究する方法がないのである。現在われわれは一つの與謝野寬全集をも持つてゐない。これは歌壇にとつて光榮あることではないのである。

さて、極めて粗雑な物言ひをして來たが、言ひたいことは一應言ひ得たつもりである。果して解つてもらへるであらうか。

あさ香社の人々

—— 槐園と鐵幹 ——

直文が短歌革新の意圖を抱くにいたつたのは、二十三年の頃からであつた。二十四年には新撰歌典の著があり、二十五年には雑誌歌學第一號の卷頭の一文がある。新撰歌典の序に於ては未だ單に抽象的なものにすぎなかつた彼の意圖は、歌學第一號の卷頭の一文にいたつて著しく具體性を帯びて來てゐる。これは當時の歌壇一般の情況を反映してゐるものであることはいふまでもないが、彼自身がさうした歌壇の動向の樞軸であり、機運醸成の一原動力であつたことは注目せられねばならない。國語國文革新の機運に乗つて提唱された彼のこの短歌革新運動は果然一世の視聽を引き新進青年の徒は期せずして彼の下に集つてきたのである。さらに彼の環境及び教養より來る國家主義的氣持も亦當時の反動國粹主義思潮に根強く影響しあうてゐた。

あさ香社の人々

ひとり彼のみならず明治和歌革新運動一般が國粹的國家主義の思潮から出發してゐたといふことは、その後の短歌を運命的に方向づけてゐる。このことも彼をして當時の求心的な傾向にある青年の人氣の中心たらしめるに有力な動因をなしてゐた。國分操子、大町桂月、鹽井雨江等は早くより彼に師事してゐたが、二十五年に内海月杖、伊藤正弘、與謝野鐵幹等が入門するに及び、同年の秋頃より直文を中心に短歌革新の實踐的機運が表面化するにいたつた。その結果翌二十六年二月に淺香社の結成となつたのである。これに加つた人々には前記の外に鮎貝房之進（槐園）井上一（經足）師岡須賀子、藤井靜子、風當咲子等があり、詠草は淺香社同人詠草として新聞日本に發表した。

つづいて久保猪之吉、服部躬治、武島又次郎（羽衣）、尾上柴舟、金子薰園、毛呂清春、丸岡桂等が來り加はり、一方二十六年秋二六新聞が創刊せらるるに及んで、淺香社の歌論及詠草は屢同紙上にも發表されるやうになつた。淺香社は創立の當初にあつては、毎月數回集合を催ほし「誰が師匠といふこともなく、誰が弟子といふこともなく、しかし非常な熱意を以て短歌の創作及研究をつづけて來たのである。そのうちでも最も熱心なのが槐園と鐵幹とであつた。槐

園は早く二十八年には朝鮮に去つたので、歌壇に多くの事を殘してをらぬがその鐵幹に於ける關係はむしろ常に指導的であつたと思はれる。

「この酒におのが心を語らばや君より外にきく人もなし」とは、初めて槐園に遇うた時の鐵幹の述懐である。「またおなじ道おなじ眞ごころ二人していざ太刀とらむいざ筆とらむ」とも鐵幹の詠んでゐる如く、二十六年から二十七年にかけて柵草紙及二六新報等に發表された歌論は、いつもこの二人の協力によつてなされてゐたのである。槐園の作品は多く殘つてをらぬ。管見に入つたものを左に録する。

風の音におどろかさされて益荒男の夢やすからぬ秋は來にけり
萩の葉を今朝ふく秋の初風は襟をただして聞くべかりけれ
國のため家をも身をも妻子をもわすれし袖のなかにぬれけむ
なかなかに國に盡ししかひありてひとり小島の月を見るかな
なに故に小島の月にかこつやとすぎゆく蟹は問はむともせず（以上東西南北）

あはれ知る人にも稀にあひにけり旅より外のふるさともなし
 なかなかに書よむ人に生れいでて憂にもれぬぞうれしかりける
 かへるに家なし行くに車なし刀たたきて何とうたはむ
 から日本もろこしかけて物ぞ思ふ三笠の月はてらずもあらなむ
 世に知らぬ月もながめつ花も見つただわれ一人たふとかりけり
 えにしあれば共に浮世をかこちけり忘れてもまた立ちかへり來よ

(三〇・九・六) 最初の一首を除く外は、京城での作であり二十八年から三十年頃までの間のものである。二十六年夏の松島紀行中にも彼の短歌が見える。

ひろせ川朝ぎりわけてたつ浪の音よりあくるしののめの空

かういふ詠風である。歌論に於ては最初鐵幹を指導してゐたと思はれる彼も、實作にあつては鐵幹の革新的詠風に到底及ばなかつたのである。京城に移つた後の作品はむしろ鐵幹の歌風

に追隨してゐるかの如き觀さへある。

與謝野寛年譜(與謝野寛短歌全集、四七〇頁)によると、明治二十六年の頃に、「寛の歌、
 外先生の柵草紙に採らる」とあるが、これは歌とせず歌評とすべきである。すでに早稻田文學
 に於ける池袋清風の新體詩評、自由新聞其他に於ける海上胤平の歌評等が、これ以前に存して
 るたが柵草紙四十七號(二六)四十八號、五十號、五十一號、五十二號、五十三號等に發表され
 た槐園、鐵幹の歌評は、淺香社の對外的運動の一端であつて、翌二十七年五月、二六新報に發
 表された亡國の音と共に實に明治新派和歌運動の上に於ける劃期的なものといふべきである。
 柵草紙は、從來桂園派の歌を多く掲載し、また桂園歌人に關する研究は殆んど毎號連載して
 るる。しかるにその四十八號に、槐園の柵草紙四十七號歌評、四十九號に鐵幹の柵草紙四十八
 號の歌評が掲載されたのである。槐園、鐵幹のこの歌評が導火線となつて、賛否兩論が對立し
 て引きつづき同誌上は歌評に賑はつた。

柵草紙四十七號歌評

(四八號)

槐

園

柵草紙四十八號の歌評

(四九號)

鐵

幹

あさ香社の人々

同 四十八、四十九號の歌評につきて	(同)	臘 昔 生
歌評を讀む	(五〇號)	柳暗花明生
柵草紙四十九號歌評	(同)	槐 園
近詠(短歌六首)	(同)	槐 園・鐵 幹
鐵幹氏の歌評を讀みて	(五二號)	を の
辨 惑 一 則	(同)	鐵 幹
槐園氏の歌評を讀みて	(同)	打碎樓主人・井軒
槐園、鐵幹兩氏の歌を評す	(同)	芝 園・井 軒
柵草紙第五十一號歌評	(五二號)	白川生・鐵 幹
花園、井軒、白川三氏に酬ゆ	(同)	鐵 幹
打碎樓、井軒二氏にこたふ	(同)	槐 園
歌評を讀みて思ふ事ども	(五三號)	蒼 人
鐵幹君に答ふ	(同)	落 葉

槐園、鐵幹の評はいづれも短いものであるから左にその最初の各一篇を引用しておく。

柵草紙四十七號歌評

すみわたる云々(註一) 三句らしはらんとあるべし、らしは想像の意淺し、理想上決定の意あり、こゝにはふさはしからず、四句あたらしき口つきなれど、一二三句に對して突然といふべし、二句碎けたり。ゆふ立の云々(註二) 一わたり聞えたるやうなれど、四句山かぜを受けていかが、風雨の主客顛倒せり。石はしる云々(註三) 夕立をよみたる詮なし。日さかりの云々(註四) 二句碎けたり歌がら奇を銜ひて俚俗に陥りたり、暑のゆめとなりたるは俳諧的なり、つきの枕などよみ人の品さへおもひやられて。すみだ川云々(註五) 二句碎けたり、たとへ歌としてはうけ取られず。山里は云々(註六) 四五句いとめでたし、一二三句にいたりては評せん語もなし、あたら歌を。妻こふる云々(註七) この歌歴卷といふべし、四句碎けたるなからんには。八月念七

夏 天 象

註一 すみわたる月も涼しとおもふらし水にも似たる夏の夜のそら

宮崎八百吉

あさ香社の人々

夕立風

土持綱安

註二

ゆふだちの雨を催ほす山かぜはふらぬさきよりすゞしかりけり

川夕立

太田春山

註三

石ばしる清瀧川のきよき瀬を打にごしたる夕立のあと

夏枕

三田彌吉

註四

日ざかりの暑はゆめとなりにけりつげの枕を友とせしまに
をりにふれて

をりにふれて

櫻井俊行

註五

すみだ川ながれに舟をまかせれば風なきよはも涼しかりけり

避暑の折に

松浦起陽

註六

山里は何はなくても何よりも岩田の清水みねのまつ風

萩と萩とのうちなびきたる

田山録彌

註七

妻こふる鹿のふしどや寒からんとなりは風のやどりなりけり

柵草紙四十八號の歌評 鐵幹

雨夏月云々(註一)ところどころといふ詞、かくても雅語なりとやそはなほゆるさむも庭のたまり水のところどころに月のうつると聞えて、庭のところどころには聞えがたし。蓮云云(註二)ところどころはまづ可なり、咲出でしの、一句あらずもがな、五句のあらはれとかさなれるやう

に思はれて耳ざはりなりに、ごりなき水、おなじことなれど、池水のきよき、ごころはと改むべし。水邊納涼云々(註三)「寒くなるまで涼みつるかな、俗語そのままのやうなり、景樹の弊をよしと思ふ人によ、いひやうもあらむを。月前夏旅云云(註四)夏は麓、あまり奇をてらひすぎたり、たへかねし夏とここにはいひて、秋になりたるやうにもきこゆ、この歌、非難多きだけ優れたるところあるなり。男眠れり云云(註五)歌がら卑俗の極、作者よくもよくもかかるところに思ひよりしよ、ごちよげなるうたねの句、露骨なり。萩の上風は、そよそよと吹くよしによむが例なるに、ごころは野分にや、さらでは熟睡をさまさむおそれあらじを。駒云云(註六)難もなけれど、目をとむべきふしもなし。三十一字をつらねたるまでならむ、わが君が代、今の新體詩家のよろこぶ口つきなり。をりにふれの(註七)「その句法、その語調、さながら桂園一枝中の尤物といふべし、つかさと云ふ詞、洋醫の感傷論を手にする如し、槐園に評せしめむには鵠的などいはず。をりにふれての(註八)また例の尤物、壓巻とやいはむ。されど、みだれてもの詞がこの全篇のいのちかと思へばいと心ほそし、大丈夫の作にはあらざりけり。をりにふれての(註九)流暢といふ外可もなく不可もなし、評しをへて窓をおせば秋雨

蕭々満月慘澹あはれわれ歌學もかくのごと、十月八日夕あさ香社にありて

註一 雨後夏月 池田輝滿

蓮 山本邦保

註二 濁りなき水の心は咲出しはちすの花にあらはれにけり 宮崎湖處子

水邊納涼 松浦菘坪

註三 川風に舟をまかせて夏の夜の寒くなるまで涼みつるかな

月前夏旅

註四 堪えかねし夏は麓となりにけり月にこえゆく小夜の中山 同

男眠れり、女軒端の菘を見る 同

註五 吾背子がこちよげなるうたた寐をふきなやましそ菘の上風 同

題駒牽の圖 同

註六 曳れくる駒のころもいさむらしわが君が代に逢坂の山 井上通泰

をりにふれて 同

註七 道のべのつかさのうへのひとつ松よしありげなるところなりけり 同

同 人

註八 やまかげの松のはやしにふる雨のみだれてもなくうぐひすの聲 同 人

註九 大ぞらにみちたる星のいづれにかわが世の末はならんとすらし 同 人

槐園鐵幹の評は、當時の淺香社歌論を代表してゐたものと見るべく、その所説は未だ國文學的歌學に據る所多く甚だ微溫的である。けだし、槐園も鐵幹も直文の論調に支配されてゐたためであらう。鐵幹が短歌革新の意氣を以てなした評論は、翌年の亡國の音であつたのである。柵草紙に於ける本論はそのための小手調の如きものであつた。

つづいて柵草紙に掲載された歌評は次の如くである。

柵草紙五十三號歌評 (五四號) 落葉・鐵幹・槐園

柵草紙五十六號歌評 (五七號) 落葉

落葉君の歌評を讀みて (五九號) 文苑

槐園鐵幹の、この新桂園派に對する挑戦はかくの如き反響を來したのであるが、一方同誌五十號には(二六)槐園鐵幹連名の短歌六首を見出す。これは「槐園鐵幹兩先生の御意見は、さも

あさ香社の人々

あらむとは尤に領承仕候、就ては猶心得のため、先生方の御作をも、御示を冀候也」といふ臘昔生の希望に酬いたのである。

臘昔生の御望にまかせ、えせ歌二、三首さしだし申候、桂園一枝の外に歌なしと心得たまふ先生方のお心得にはいかなれど。

さて御批評はよろこんでうけたまはらむ。かしこ

十一月九日

槐園、鐵幹

鷗外様

近詠のうちに

- 1 霜ばしら朝日に折れて稻ぐきの立てるもさむし岡崎の里
- 2 うまやぢの川ぞひ柳ひと葉こぼれふた葉こぼれて日は暮れにけり
- 3 入日さす薄まじりの小松原夕風寒し宿はなくして
- 4 うつの山夕虹消えて道塚の石のほとけに時雨降るなり

5 山おろし吹きよわりたるはて見えて木の葉にうづむ谷のした庵

6 尾花ふく嵐のすゑにもものふの夢のあととふ白川のせき

なほお望みとあらむには、續々さしだすべし。

この近詠六首は全部鐵幹の作か、或は槐園の作が混つてゐるかを、明かにしがたいのは遺憾である。このうちに2と3は松島紀行中の歌である。後東西南北の一四八頁に、「仙臺紀行の中に」及「秋柳」といふ詞書のもとに再録されてゐるが、作者については何の記載もないので、鐵幹の作と見るのが至當であらう。然るに2この歌は松島紀行には槐園の作になつてゐるのである。この歌は餘程得意だつたと見えてその後二六新聞(二七・三)にも再録されてゐる。いづれにしても123等は従來の桂園派の作品に比べて清新なものを持つてゐる事は否めない。6も松島紀行の後に鐵幹作として載せてある。

與謝野鐵幹と大阪

1

本年二月の京都愛書會の席上に於て、往年の「よしあし草」及「關西文學」の事實上の主宰者なる立場にあつた小林政治（天眠）氏に、當時の追憶談を聞くことを得た。明治文學史のうへに、關西の文壇が浮びあがるものとすれば、先づ第一に明治三十年から三十二、三年頃までの大阪の文壇が唯一の登場者たる光榮を持つであらう。そしてこの「よしあし草」及「關西文學」を機關誌とせる、浪華文學青年會及關西文學青年會がその大半の光榮を占有するものである。短歌史にあつても同様のそれがいへるのであつて、初期の「明星」は、この「よしあし草」及その頃與謝野鐵幹が選を擔當してゐた「文庫」の投書家を基礎としてゐるのである。殊に「よしあし草」は「明星」以前の與謝野晶子（鳳小舟）の作品を見るべき唯一のものであるうへに、

明治新聞雜誌文庫をはじめこの圖書館にも殆んど一冊も現存してゐないために、資料としての價値は高いものがある。

さて、同日は「ここはお國を何百里」の作者にして新詩社の歌人であつた故眞下飛泉をしのぶ會であつたので、飛泉と「よしあし草」との關係を主としてのお話をうかがつたわけであるが、なかでも小林氏の話された時は、速記係まで緊張して思はず聴手にまはつてしまつたため記録をとることができなかつたのである。以下はその折りの余の聞書である。

「よしあし草」は、明治三十年七月創刊してから三十三年七月までに二十七冊出してをります。そしてその翌月の八月から「關西文學」と改題して、これは三十四年二月の第六號までつづき、それで廢刊になつたのです。この「よしあし草」を出した「浪華文學青年會」が、どうしてできたかと申しますと、そのころ文學少年の間で盛に讀まれてゐた雜誌に博文館の「少年文集」及少年園の「文庫」の二つがありまして、この二つの雜誌の投書家中の大阪在住者が集つて、一つ文學團體を作らうと言ふことになり、高須梅溪君と中村吉藏君の二人が發起者となつて、會合を催すこととなつた。これが浪華文學青年會です。第一回の會合はたしか明治三十

年四月三日でした。會員には河井醉茗、佐藤義亮、野田別天樓、相馬御風、上野精一、田口掬汀、堀部周三郎、奥村梅臯、伊良子清白、齋藤弔花等が居ました。二十一年頃新聲の支部をやつてゐた高須梅溪君が與謝野鐵幹を知つてゐて、與謝野さんがわれわれの會に出たいと言つてゐるといふ申出でなので、當時「東西南北」や「天地玄黃」で賣出した鐵幹といふ男はどんな人か出たいと云ふなら出て來てもかまはないぢやないか。會つてみたらうへで氣に喰はない男だつたら、その時のこととすればいいといふやうなことになつて鐵幹がやつて來た。そこで、會つてみると、なかなかどうして國士らしい氣概のうちに颯爽たる風流才子の倂があつて、これならといふことになつて、大に提携してやつてゆかうといふことになつたのであります。

「かうして一つの團結ができたので、つぎにわれわれの會でも機關誌をつくらうぢやないかといふことになり、三十年の七月に初めて「よしあし草」の第一號を發刊することになつたのです。當時の中村吉藏君は高須梅溪君とともに大阪郵便監理局で月給十圓の雇員をやつてゐたのでありまして、當時のことを憶ふと此頃の朝日新聞に出てゐる「路傍の石」といふ小説の主人公とそっくりで、殆んど皆あんな風な生活を送つてゐたのです。「よしあし草」は三十三年の七

月まで滿三ヶ年つづいて、その間に二十七冊發行して廢刊になつたのですが、これは種々の事情から有力な同人が追々上京したためと、もう一つは矢島誠進堂の「ふたば」後に「小天地」と改題したあのふたばに押されたためもありました。同人のうちでは、先づ中村吉藏が「無花果」といふ小説を書いて、大阪毎日新聞から三百圓の懸賞金をもらつて、それを學資にして上京して早稲田の文科に入りました。つぎに高須梅溪君は小學教員の檢定試験をうけて一緒にうけた小石河野の二人が合格したのに、自分一人だけ不合格したので、大に發憤してこれも上京して、新聲社今の新潮社に入つたのです。

鳳晶子さんが小舟といふ雅號で「よしあし草」に新體詩や短歌を載せたのは、確か十一號からだつたと思ひます。永井荷風の最初の小説が載つたのは、「關西文學」になつてからです。鐵幹の作品は屢掲載されてゐます。「關西文學」になつてからは多く堀部君に手傳つてもらつて編輯してゐたのですが、ながくつづかず翌年の二月に第六號で終つてしまひました。「關西文學」の第一號は三十三年の八月發行で「よしあし草」にすぐつづいてゐるわけです。同時に浪華文學青年會が關西文學青年會と改題したわけです。が、當時の會員は各地の支部をあはせて千二

百名程でありました。

折角これだけの會員があつたのに、そのままに終るのも惜しいといふので、そのうち百名程の者が百ヶ月間の積立てをして、株式會社天佑社といふ出版書肆を東京に作つて出版事業を起しましたが、これは震災にあつて紙型を全部焼いてしまつたため、そのままついに解散といふことになつてしまひました。

2

小林政治氏のお話を聞いてゐるうちに、鐵幹と大阪との關係を調べてみようといふ氣になつて調べ始めたのであるが、なほ不明瞭な點があるので、左に參考文献を掲げて他日の資とすることにする。

1、明治十六年十月(十一歳) 攝津國遠里小野村の安藤氏に養はる(現代短歌全集年譜・二〇七頁)

回顧すれば明治十六年初夏の頃丁度私が十歳の時であつた。父が所用の爲住吉郡遠里小野村の眞宗本派の安養寺(現在の大阪市住吉區遠里小野町)安藤秀乘師を訪問して歸つてからの

話である。今度安養寺が養子を貰つた、何れ近いうちに連れて来るだらうから將來兄弟のやうにして共に勉強するが宜敷しからうと云云(與謝野の思出・河野 鐵南立命館文學二ノ九)

2、明治十九年(十四歳) 養家を去り岡山市の中學豫備門に入る(現代短歌全集 年譜二〇八頁)

寛君十四歳の時突然養家を脱出して岡山に行つて長兄の許に寄寓した。其後を追ふたのは私と八木といふ男だつた。この二人の狼狽子がコロット大阪川口の乗船場で探しに來た家人連に見つけられ逆戻りを演じた滑稽劇もあつた(河野鐵南 龍揚)

3、明治二十八年四月(二十三歳) 「二六新報」を辭し韓國政府學部省乙未義塾の教師となりその分校の一たる桂洞學堂を主管す(現代短歌全集 年譜三一〇頁)

四月七日、與謝野寛氏渡韓の送別會に臨み、席上詩歌の合作あり、場所は大和河の加賀屋新田。(アルス版詩集附録 年譜・二十八の項)

鐵幹と醉茗と「婦女雜誌」の投稿者として文通を交はしてゐたので、醉茗の幹旋でこの大阪の送別會が開かれたものらしい。(與謝野鐵幹の生活・神 龍清立命館文學二ノ九)

4、明治三十年秋頃かと記憶するが、鐵幹君が來堺したので堺の文學會同人(註・浪花文 青年會)數名が同

君を大濱の茅海樓に招じて歌論を聞いたり韓國土産の話を杯盤交酒の裏に興味ありげに聞いた。又筆を採つて詩作も試みた。此一團は私と共に河井醉茗、宅雁月、小林泉舟、辻本秋雨、岡本潤月の諸君子であつた(河野鐵南 龍揚)

註 二十九年三月 東京に歸る。

三十年秋 再び渡鮮

三十一年三月 東京に歸る(現代短歌全集 年譜二一一頁)

5、明治三十二年の春濱寺の一力樓に會合した。同人は醉茗、秋雨、雁月、泉舟、潤月、鐵南例の連中ばかり(河野鐵南 龍揚)

5、明治三十三年の夏濱寺に遊ぶ。同會者は宅雁月と鐵南であつた。堺よりは鳳晶子、大阪より高須梅溪、中山梟庵、大槻月啼、山川とみ子、鐵幹の諸子であつた。(河野鐵南 龍揚)

消 息 (與謝野鐵幹の生活・神 龍清立命館文學二ノ九)

□夏も漸く末になりて、天の川空に流れ、秋氣かすかに身に沁むを覺ゆる頃と相成申候。やがては桐の葉に風起ちてまん圓き明月を仰ぐ頃とも相成申すべく候。

與謝野鐵幹と大阪

□此時に當りて、支會諸子の意氣も亦新秋も共に昂りて、今後目覺しき活動を見ることゝ存じ申候、和歌山支會の近信に依れば横須賀の青年文士安岡秀峯君、同地の實業新聞に入社せられ、同社の岡田吊影君と熱心に和歌山支會の擴張に盡され、加ふるに桂月、玉風、雄濱諸兄の熱誠により、愈近日の中に支會の例會を開き、文學美術を談論し、本部と呼應して關西文學の野に燦爛の光を放たん趣の由、猶同地の更衣會は今回都合に依りて隨意解散したる由に候。

□本月三日、「明星」主筆與謝野鐵幹氏來阪、北濱なる平井旅館に投宿往訪者少からざりし様子に候。

□去五日鐵幹氏の來阪を機とし、臨時本部の例會を兼ねて、文學講話會を開き鐵幹氏を聘して一場の文學談を請ひ申候。來會者約五十名、鐵幹氏悠然演壇に登りて文藝の嗜好を説き進んで新派和歌に對する所見を公にせられ循々として説き去り、論じ來ること殆んど一時間、滿場何れも贊同の意を表したる様子に候。終て和歌の會合を開き、鐵幹氏の課題、涼と軍について作歌し、各それに對する批評あり、會員と共に膝を交へて、質疑應答せられ、快興夜の

ふけゆくと共に益盡きざるの感候ひし、六日堺支會の雁月、鐵南二子の招に應じて、鐵幹氏は濱寺に赴かれ候、琴風、月啼、登美子、晶子、及び小生も同行、大に歌筵を開きて、松風濤聲に吟懷を遣り申候、委細は琴風子の記事にて承知せられ度候。

□七日神戸支會聘に應じて鐵幹氏は山手俱樂部に臨まれ候、天眠子も來り會し候、矢張大阪と同様文學講演會を開き、鐵幹氏が新詩に關する二時間餘の長演説あり、質問、續出、鐵幹氏一々之に明答せられ候、此會合に依て新派和歌の真相を解したるもの少からざる様子に候、講演終て鐵幹氏の課題、市と船の二題にて作歌し、歌稿推積、一々鐵幹氏の嚴正なる批評あり、是にて一まず散會、來會者約四十餘名、湊川の官司芳賀氏もわざわざ來會せられ候。

□講演終て齋藤溪舟、廣江酒骨諸氏の發議にて舞子行を決し、同勢十二人、溪舟氏は桃、梨など入れたる箱を肩に掛け、酒骨氏は麥酒を提げ、忠宜君はステツキを振り回し、何れも一騎當千の強者、神戸驛より須摩驛迄乗車、車中「汽車」の課題あり、小生を真先に駄歌をうなりしも一興に候、天眠子も和歌を作りしは大に奇に候ひし、其後種々の珍談あり、須摩驛を下車して、河岸にて床木を並べ、同勢何れも麥酒を傾け桃、梨を嚙り黒雲に隠れゆく月を仰ぎな

がら、歌を作り申候、それより夜行、鐵幹氏「四百餘州」の軍歌を歌ひ、一同之に和して舞子に入り筒井氏の家にて徹夜歌稿積んで山を成し候。

□八日鐵幹氏の旅寓に琶風、思西、及び小生の三人期せずして會し、堺より、鳳晶子君來訪、浪華春風會幹事久、服部の二女史鐵幹兄を訪はれ候に付山川登美子君をも招きて此に又河風に袂吹かせながら、歌筵を開き申候。歌多し。

□十日岡山の新詩社支部員の聘に應じて鐵幹氏同地に赴く、小生青麟子と共に同行、夕刻岡山ニ富士に投宿、大に歡待を受く、翌日講演あり、非常の盛會に候ひし。

□岡山の講演終て鐵幹氏東上の途、再び大阪に立ち寄り、濱寺にて歌筵を開きたる由、中々清興多かりし様子に候。

□終に臨みて本部の消息と神戸支會の消息を洩らすべく候。

□神戸支會より這回「新潮」第一號發行、初號の割合に體裁よく材料も精撰せられ居り候。編輯日誌は中々面白く候、評論欄の氣焰萬丈に候。

□本部の春雨君は今猶故郷にあり、子が小説「小羊」此程脱稿、誠進堂より出づべく候、天眠

子は商業に多忙なる傍、小説に筆を染めて、往日の意氣衰へざるの概を示し、琴風子は新派和歌に熱衷して、氣焰當るべからず、靖文子は鳩の海のほとりに詩思を養ひ、醉茗君は過日常陸に避暑せられたりとの事、小生は正陽地方へ漫遊眞黒になりて歸り申候 以上(記手)

3

頃日小林政治氏の斡旋によつて、寺田周三郎(堀部靖文氏)所蔵にかかる「よしあし草」合本(創刊號より二十一號にいたる)を借覽するを得た。それによると前項の記事中に、二三訂正を要するやうである。「よしあし草」の刊行は全部で二十六冊(年六三三)である。但し二十二號が二回發行されてゐるゆゑ冊數でいへば二十七冊となる。また「關西青年文學會と改稱したのは第一一號(年三三三)からであつた。「浪華青年文學會」も「浪華文學青年會」ではなく、「浪花文學青年會」であつた。

次に鐵幹と「よしあし草」であるが、これは四月二十九日の夜小林政治氏をお訪ねして、種々と調べていただいた結果、同氏の日記によれば「よしあし草」大阪同人と鐵幹とは、三十二

年八月まで會つてゐないことが判明したのである。それなら、その後何時會つたのが最初かといふことは、同氏の御手許ではまだ明瞭でないのである。一方前號の記事の4にある三十年秋の堺の五人組と鐵幹との會見については、「よしあし草」紙上には何の記事も探せないやうであるが、5の三十二年の春濱寺の會合については同誌十三號に「はまゆふ」と題する醉茗生の記事があつて日も二十二日と知られる。

鐵幹と鐵南とは竹馬の友であり、醉茗とは投書家仲間で二十八年にすでに相會してゐることは前號の記事3で知ることができよう。醉茗は「はまゆふ」の始に、「三月二十二日與謝野鐵幹氏と高師の濱に會して大に詩を語らふ。初めて敷津の浦に氏と見えしは幾年の昔なりけむ。夢なつかしき浪の音に感興湧くが如く吟情抑へ難し」云云と述べてゐる。これによると鐵南氏の「三十年秋頃の會合」といふのは、同氏の記憶の誤りではなからうか。或は相會したとしても醉茗は座にゐなかつたのである。即ち一二の人々が相會したものと思はれる。鐵幹の短歌が初めて「よしあし草」に掲載されたのが、一月前の十二號(三十三)からである。よつて考へるに、鐵幹と「よしあし草」を結びつけたのは、堺の五人組の連中だつたのではなからうか。そして

鐵幹が、初めて「關西青年文學會」の同人と相會したのは、三十三年八月五日の文學講演會の時ではなかつたかと思はれるのである。この時の記事は「關西文學」第二號より前號に轉載しておいた通りである。

さて、ついでに晶子と「よしあし草」とについて見るに、晶子の短歌が同誌に初めて出たのは十七號(三十三)である。しかし、小林氏のお話によれば、晶子は三十二年一月三日の高師の濱に於ける近畿文學同好者大會には醉茗に伴はれて出席してゐたといふことをあとで誰からか聞いた、これが晶子の初めての出席であらう、とのことであつた。

以上によると、晶子と鐵幹とが初めて相會したのは、文献の上では今のところ三十三年八月の時としておくより仕方がないやうである。

なほ「よしあし草」は一時千三百冊位發行してゐた。また、「浪花青年文學會」と「文庫」を結びつけたのは小林氏であつて、第一號には、まだ「文庫」派はゐなかつたとのことである。

鐵幹と大阪との關係(二十八年頃より三十三年頃にいたる)については、以上の記述ではまだ物足りないやうな氣がしなくもない。しかし、今のところこれ以上は判明してゐないのであ

る。このうへは世の識者の示教を俟つものである。

窪田空穂と新詩社

四月二日の夜、河原町三條の東洋亭に於て窪田空穂氏の歓迎會が開催された。いままでは歌會等の席上で遠くからお顔を眺めてゐた程度で、この日が殆んど初對面に近い氣がした。そのまま明治の歌壇そのもののやうな氏のことであるから、種々と教をうけたいことがあつたのであるが、ノートが探出せなかつたため、新詩社との關係についてお話を承けたまはつた。折角の御入浴ではありお疲れのところを重々失禮とは存じながら、氏などには今のうちに一つでも餘計にお聞きしておくことは、吾々の爲すべき事の一つであると考えたので、敢へて一二の質問をしてお答を願つた次第である。以下、氏のお話の大様である。但しその日から日數を経たため、氏の口吻を傳へることのできないのは遺憾である。

さうですね、新詩社には滿一年位ゐるたでせうか。(註目約一年半位か。作品は十四號(三十四年八月)まで出づ)やめたのは、別にこれといふ譯があつたわけではなく、まあ晶子が上京して新詩社に

入りこんだため、嫌氣が出て行かないやうになつたんですね。「白百合」とは私は關係はありませんでした。元來私が歌を作るやうになつたのは、太田水穂君の影響です。太田水穂君が長野師範を卒業して村の小學校の先生にやつて來た。この太田君が歌を作る。そんなことから自分も作つてみるやうになり、だんだん投書などするやうになりました。「文庫」へ出したのです。鐵幹は「文庫」の歌壇の選をしてゐたので、「文庫」の投稿歌をそのまま「明星」にもまはす、といふやり方で、「明星」の創刊號には「文庫」に出た歌をそのまま轉載したのですね。(註・文庫
三十三号四
月一日發行)私の筆名は小松原はる子です。

元來鐵幹の歌は高名と戀愛、人物は英雄にして風流才子。立派な人でしたが、惜しいことに時代の力を軽く見すぎてゐたのですね。そのため、あんな風に時代から置き去られるやうになつたけれども、みづからは國士を以て任じてゐたのですね。私の如き初めから會費なんかとりませんでした。同志扱ひだつたんです。「明星」の初期に挿繪を書いてゐますね。あの一條成美、成美はナルミと讀みます。その成美が私の隣村の者で、よく知つてゐました。それで窪田ならいいといふやうなことを言うたらしいんです。そんなことで最初から會費を拂つてゐない。

したがつて何時やめるともなくやめてしまつたわけです。前に言つたやうに、晶子が入りこんできた。今日のまあ文學少女だつたんですね。とにかく、それで皆が動搖した。さうすると、私が年上の方だつたのですから、青年達の裏に窪田があるのではないかといふやうな眼で見られる。何となくそんな氣勢が感じられる。自然と鬨が高くなる。足が遠退くといふ形で、何時となく出入しないやうになつてしまつたんですね。

さうですね、歌風から言へば新詩社は自我の詩、いはゞ外國文學に對立する氣分がもとですね。子規の寫生は、いはば生活より歌を生み出す手法だつたので、要するに、新詩社と子規のちがひは外國文學を眼に入れる入れないちがひといへると思ふですがね。とにかく、現代の歌は自己に即した藝術である。自己の生活の表現であるといふところに意義がある。これは今までの歌になかつたものですから。さう思はれますね。

空穗氏が、どうして新詩社から離れるやうになつたかについては、直接空穗氏の語られたところで明らかである。そこで今度は空穗氏と鐵幹とが初めて逢つた折のことを述べることにする。登場人物は一條成美、高須梅溪、鐵幹、空穗の四人、さて時は殘念ながら三十三年十月頃

と推定されるのみで日まではわからない。と、くたくたく述べてゐるよりも、ここで高須梅溪の「上野まで」を讀んでいただくこととする。

上野まで

高須梅溪

鐵幹君を訪ふての歸るさ、成美君の家に立ちよつて西洋の畫論を初めて居るところへ、偶然來合したのは鐵幹君である。「ヤー梅溪君……」と障子を開いたまゝで、どかりと蒲團の上に座つた。成美君は主人振で、頻りに番茶を勧めながら、ニコ／＼と笑うて居る、鐵幹君はシガーをくゆらしながら、筆を執つてさら／＼とレターを書き初めた。レターを書いてしまつて、状袋の封皮に朝鮮文字で「ヨサノ」と戯れに書いて「奴でも朝鮮文字の片端位は知つて居る」などと笑ひながら、筆を投げた。

僕は何もせずに、ぼつねんと暮れゆく空の色を見て居た、夕日の光が、すこし雨氣を含める雲を射ると同時に、雲の色は緑、薄紅、紫などに染め分けられて、其の余光は更らに下宿屋の庭にある梧桐の葉を照らししめやかな、そして其中に何となく麗はしい分子を含んでゐるやうな、光線を投げかけて居る、初秋の風が幽かに梧桐の葉を音づれる毎に、葉と葉と

のさゝやきが聞へる、僕は何となく一種の幽趣を感じた。鐵幹君も亦空の具合を眺めながらどうも秋の景色はよい、そゞろに朝鮮の大陸的風光を思ひ出されるなど云つて居る、嗚呼朝鮮の大陸的風光！それは廣々とした野原に、秋の草花が色々に咲きいでて、ちやうど錦の織物をのべたかのやうなうちを、驢馬の背に依りながら、悠々と眺めてゆく趣はどうであらうか、殊に空には残月が夢のやうにかかつて居て、虫の聲の淋しい時は……などと吾も夢みるやうな空想を畫き出して、うつとりして居た時、其時、突然、「向島へ月見にゆかうぢやないか」と云つたのは鐵幹君である。諾。遊びには一も二もなく賛成する成美君と吾、直ちに議案は通過して、早速實行することとなつた、しかし序に窪田君を連れてゆかうではないかと、すぐに其の寓居を音づれた。成美君は窪田君と同窓の友人であるから、一番に家に遣入つて、しばらくすると窪田君をつれて出て來たのである、窪田君は小松原春子などと女の名前を書く丈に至極優しい、女のやうな人である、鐵幹君は初對面の挨拶も濟むや濟まずに一首を窪田君に與へた。

何といふ女神の戀のわび歌ぞ君がひろへる星の世の歌

窪田空穂と新詩社

處が遠慮勝ちの窪田君は、微笑みながら何も答へなかつた。

空には星が一つきらめき初めたが、何となく怪しい雲行となつて來た、そのやうな事には一向頓着しないで尻ひつからけながら目鏡迄急いで居つた、壯士然たる鐵幹君、例に依て那翁の帽をかぶりながら、腕を捲りあけて大跨に歩く、若旦那の落ちぶれたやうな窪田君、村役場の書記そのまゝとも云ふべき一條君、いづれも新派歌人と新派畫家の特色を顯はして居る、爲山先生、正に得意の畫題であらう。目鏡についた。ガタガタと馬の蹄の音がして馬車は今將に發したところである、ヒラリと一番に飛び乗つたのは鐵幹、それから成美、それから窪田君、殿が僕である、一條君と鐵幹君、窪田君と僕と、互いに二人並んで向ひ合せとなつた。窪田君は東京へ出てから間もないので、頻りにあたりを見廻してさも愉快さうである。僕も例の手帳を取り出しながら、一心に歌を考へて見たが、興の湧かない時は何も出來ないと見へて腰折一首も浮ばない、そこで歌は暫く中止することとして眼を窓外に移した。店頭

の灯、矢の如くすれちがふ馬車、忙はしさうな人の影、何となく愉快に感じられる、鐵幹君は僕の袖を引いて、一首書いて呉れと云つた、それも窪田君に與へたものである。

見なれたる町にはあれど君が手をとりのつゆけばはためづらしき

あまり感服した歌ではないが、優しい情は溢れてゐる。これでは窪田君も何か返答したまへ、と、手帳をしるつけて、無理に勧めたので、しばし沈吟しながら返歌一つ出來た、これは最初の歌に答へたものである。

星の夜の書拾ひしは夢なりき干せるまぐさに夕雨のふる

そこで僕も例の亂調をかつぎ出して、窪田君に示した。

君が名のやさしきに似てその胸の調へゆかしき星の世の歌

窓外に首をさし出すと空は全く曇つて、星の影は何處へやら消えてしまつた、何處ともなく、虫の聲が聞へて、小雨がふり出しさうである。

雲荒れて小雨そぼふる此夕君も語ればさびしくもあらず

と、こぢ附けをやつた、始終黙念として髻を捻て居るのは畫伯一條の君である。

馬車はリンと一聲の鈴聲と共に、上野についた、乗客は皆一齊に下りてしまつて、残つたのは、吾黨の豪傑連のみである。(關西文學四 號三三・一二)

「關西文學」は「よしあし草」の改題したもので、關西青年文學會の機關誌である。今は稀觀に屬する。敢へて全文を紹介した次第である。

さて、人の世の離合集散は、はかり知られぬもので、この同行四人のうち梅溪、成美の二人はこの時から半年程経つか経たぬに「文壇照魔鏡」の出現にからんで、鐵幹とは敵役にまはつてゐるし、空穂氏も少し後れて、新詩社から離れてしまつた。空穂氏から鐵幹に送つた消息が「明星」十四號(三三)に出てゐる。實に優しい情のこもつた文章である。

あれだけ傲岸だといはれた鐵幹も、空穂には好感を持つてゐたらしい。あるひは鐵幹はそれほど空穂に敬服してゐたともいへる。もつとも、「藪柑子」などによるとほんとは鐵幹より晶子の方が空穂に感服してゐたのかも知れないのだが、この觀察は、しかし婦唱夫隨の嫌があるかも知れない。とにかく、後年空穂の「まひる野」が刊行された時に、鐵幹が評した文の一部を例によつて左に引用する。

窪田氏は新詩社の舊友であつて、其の作は「明星」の初刊頃盛に載つて居る。こゝで評者は私情を陳べる。三十三年の四月雜誌「明星」を刊行して新詩社の主張を公表した時、種々の方面から予を補助せられた人々が少からず有つた中に、詩の作家として新詩社に馳せ集り、予と氣息を一にして、從來の軌法以外或る新異な詩風を唱道した隨一人は窪田氏であつた。

(略) 若し明治の詩壇、特に三十一字詩の方面に新詩社の貢獻した所が有るとするならば、其當初の勤勞は窪田氏等の取られた所である事を明にしたい。氏の三十一字詩が如何に清新の思想及形式を以て世人を驚かしたか、世人を啓發したか。否世人より前に予及社中同人を如何に多く感動せしめたか。是等は予の心中常に氏を尊敬し、氏に感謝して居る所である。今この集を讀むに付けても當時の光景や氏の風貌が眼前に彷彿する。一作の成る毎に互に評し、且つ削り且つ吟じ、果ては會心の境に至つて互に落涙を禁じ得なかつたものであつた。氏は其時二十三歳位信州松本から上京して早稻田の英文科に再學してゐた。物を言ふにも羞むやうに優しい低い調子で、謙恭溫雅、内に深く藏する所あらむとする人柄である。今は既に早稻田を卒業して、全く筆硯の人となられた。この初夏途中で出會つたが、依然として

若々しいなつかしい人だ。當時の新詩社同人で今も文藝に従事して居る人は甚だ少い。多くは種々の事情で他に轉じた。又その従事して居る人々の中でも、年を追うて進境の有る人は更に少いのみならず、我々が見て却て退却した、墮落したと思ふやうな人々もある。予は久しく社外の友人である窪田氏が、當初の志を一貫して、益々努力せられつつあることを見て甚だ中心の愉快を抑へ難い。(まひる野興論野生) 明星三八・一二

空穂氏たるもの、あに知己の感なくして可ならんや、と言ひ度くなるではないか。もし知己の感を感じられたら、空穂氏よ、どうぞ、前記の「上野まで」の月日を思出してこの一文に光彩をくだされ。

明治三十三年の秋

艶麗牡丹の驕れるが如き當年の晶子の歌を見るごとに、私はいつも山川登美子の存在を思出す。彼女は當時白百合にたとへられ、みづからも白百合を好んでゐた。白百合の清々しさと寂しさととは彼女の歌を貫いてゐる。そこには情熱に身を焦し切れない氣品と理性の閃とが見える。彼女の現實生活の不幸はここに胚胎してゐた。同時に彼女の生涯を美しい物語たらしめてゐるもそのためである。

彼女が鐵幹と初めて逢つたのはいつ頃か、大阪梅花女學校卒業前後とすれば三十一年になるが、三十三年四月(鐵幹二十八歳、晶子二十三歳、登美子二十二歳)明星創刊後同年の秋鐵幹は晶子と大阪で初めて逢つてゐるから、登美子が逢つたのも、この時ではないかと思はれる。この時彼女と鐵幹とは濱寺に遊んだ。

濱寺にて拾ひける石の名を登美子の芙蓉とつけければ

君が名を石につけむはかしこさにしばし芙蓉と呼びてみるかな
やさぶみに添へたる紅のひと花も花と思はず唯君と思ふ

(二首、登美子へかへし)

蓮切りてよきかと君がもの問ひし月夜の歌をまた誦してみる

(鐵幹子、二一六頁)

登美子は鐵幹晶子を殘して若狭へかへつた。郷里では父の意志による結婚が彼女を待つてゐた。鐵幹は西京よりとみ子のもとへ

比良こえて雲もかなたへ行く夕こころにかかる若狭路の雪

やらじとはかの人の子もわれにいひぬつよく別れて別れて笑まむ

(紫、一二九頁)

以下計九首の歌を後から追つかけて送つてゐる。登美子はあきらめと思慕の間に彷徨してゐた。「新しい短歌制作に對する努力と……或はもつと他の様々の煩悶とがあつたらしい」とは令弟山川亮氏がこの間の消息を傳へた言葉である。(現代短歌全集 第十七卷五九頁) 彼女はつひに結婚した。

人とわかれて後

芙蓉をばきのふ植うべき花とおもひ今日はこの世を花ならず思ふ
われひそかに榮ある花とたのみしも芙蓉はもろし水にくだけぬ
おもひでの多きをほこる秋ならずつめたかり白芙蓉の花

(紫、三二頁)

この人が登美子であることは前の歌から想像しうる。晶子に對する登美子の氣もちを歌つたものに次の一首がある。

晶子の君と住の江に遊びて

それとなく紅き花みな友にゆづりそむきて泣きて忘草つむ

明治三十三年の秋